

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

東方剣刃録

【作者名】

たっぼん1000

【あらすじ】

ひとつの出来事がきっかけで主人公が幻想入り。

時間が空いてる時にでもどっぞ

第1話

「暇あ……。」

俺はそんなどうでもいいことを呟いていた、休日の商店街ここには多くの人が行き交う。

買い物を済ませた俺はゆっくり歩きながら自分の家に向かっていった、どうでもいいことだが俺は一人暮らしをしている、両親は外国のほうで働いて帰ってくることはほとんどない、だからこうして商店街までわざわざ足を運んで買い出しにきているわけだ。

「おーい」

俺を呼びかける声があった、向こうでパタパタと手を振る俺の友達がいた、俺は手を振り返り返し小走りで駆け寄っていく。

「よう、みんなとどうで何してんだ？」

と俺は問いかける。

「いやさ、折角の休日なのになんかなくなてさ、商店街に来ればなんかあるかなー？って思ってた歩いてたらお前を見かけたからさ、声をかけたわけ」

「確かに休日はすることがないもんさ、だから俺もここにちょっと買い物でもね」

「なるほど」

と少し話しつつ、商店街の出口までやってきた。

「なあ、今からどっかいかな？」

「ああいいよ、でもちょっと待って荷物だけ家に持って帰っておきたいんだ」

「おっけーい、ていうかお前は一人暮らしなんだっけか？」

「そそ、案外楽しかったりするもんだぜ？一人暮らし」

「コイツは一人暮らしするのが夢？というか一人暮らししてる俺が羨ましいみたい、学校でもそんなことを言ってた気がするし。」

「いいよなー一人暮らし！でも家事とか全て一人でやるんだろ？大変じゃないか？」

「まあ慣れるまではね、慣れたら充実するっていうかワクワクすんだよなあ不思議な感じ」

そんな会話をして10分くらいが経ち俺の家の近くまでやってきた。

「ちよい、荷物置いてくるわ」

「あいよっ」

俺は買ってきたものを台所にあるテーブルに置き食材を冷蔵庫にしまい全てをしまい終わると友達が待つ玄関まで行った。

「おまたせー」

「案外、はやかったなもう少し時間かかると思ってたぜ」

「人を待たせるのは嫌いなもんでね、いつもそういうのには気をかけてるんだ」

友達は「ふーん」と言い家を出て歩き始めた。

「そんでさ、今から何処行く？」

「んー、そうだなあゲーセンはどうよ」

「おっ、いいねー！っじゃゲーセンへGOー！」

「ゲーセン行ったら何する？やっぱ対戦が出来るやつがいいよなー」

「お前が苦手なやつでもどーよー！」

とニヤニヤ笑いつつ俺に問いかけてくる、そういう悪巧みつつか、本気が冗談か分からないことを言ってくるがその人懐っこい笑みをみてるとなんだか許せてくるんだな、これが。

「またそういうことを言う、そー言っといていつも俺もまだ出来るゲーム選んでくれるよな」

「まあねん お前さRPGくらいしか得意なゲームないじゃんか」

「RPGだけじゃないよ、STGだって出来る」

「結局、一人でしかできないやつじゃん！」

「まあ、そう言っつなってWなんか、大人数で出来るゲームはあんまやつ

たことがなくてさ一人で楽しめるRPGやSTGしかやったことがないだけ」

「そんなもんか、でも一人でゲームってなんか寂しくないか？」

「まあたまに思うけど、でも自分がやってるゲームで十分満足してっからいいんだよ」

「そっか、お前がそこまで言うなら無理矢理進めはしないけど、ゲームなんて楽しみ方は人それぞれだかな」

そんなことを喋りつつ横断歩道の前で止まった信号が赤だったからだ、友達はさっきの会話の後から何か考えいるのか上を向きながら何か呟いていた、俺が止まったのをみてか友達も立ち止まった。

「なあ、そろそろゲーセンつくんじゃないか？」

「ん？ああもうそんなに歩いてたのか、やっぱ話していると早いな」

「うん、そうだね」

友達は何を考えていたのか知らんが俺の問いかけに反応するのに少し遅れた気がした、まあ俺がそんなことを考えていてもどうにもならんのだが。

「お、青になったぜ」

「よっし、行くか」

「そういえばもうすぐ夏休みじゃん？なんか予定とかあんの？」

「んー特にはないかな、この前親に連絡取ったけど帰ってこれそうにないみたいだし」

「そっかあ、俺も特にないんだが皆で集まってどっか行きたいんだよなー」

「いいねそれ適当に人呼んで海でもどう？」

「あー海か、その発想はなかった」

確かに、俺も最初は海なんて単語は出てこなかった、だが夏について考えてるとパツと出てくるのが海だったただけだ、海〓泳ぐみたいなの？因みに自分でいうのもあれなんだがスポーツというか俺は剣道をやってた、海には関係ないが…。

「お、ついたついた」

「そういえば俺、結構久々かもゲーセン」

「マジで?!お前これまでの休み何してたんだよww」

「本…かな？暑かったから家からでるの嫌だったし」

と話しつつ中に入っていく、中はかなり人で賑わっている、俺は知らないが俺が通っている学校の制服を着ているやつが少しみられた、というか休日なのになんで制服なんだよ！と心の中だけでつつこんだ。

「うわあ、かなり人いるなあ」

「まあね、ここのゲーセンうちの生徒も結構集まるから」

「そうなのか、まあそれはいいとして何する？」

「何か競えるもんがいいな」

「ふむ、じゃあこれにしよう」

と俺は目の前にあったゲームを指差し、俺と俺の友達はゲームをやり結果は俺の勝ちとなった、ゲームをして一段落ついた頃には外はすっかり日が暮れていた。

「お？もおこんな時間か」

「だなー、今日は楽しかったぜー！」

「俺もだよ」

と話した後、ゲーセンを出て友達と別れた。

「ちっさと家に帰るかー」

俺はそう呟きつつ、歩き始める、自分でもよく分からないんだがこのときは周りをキョロキョロしながら歩いていた、なぜ？分からん新発見でもあるんじゃないかという興味を示していたのだろう。

歩いてから少し時間が経ち、まだキョロキョロしていると右のほうに何かあるのに気づいた。

俺は無理矢理その方向に視線を戻す、そこには神社らしき建物が建っていた、「こんなところに神社なんてあったっけか？まあ、気に留めなかったら気づいてなかったただけだろう」などと思いつつ階段をのぼり始める。

「しっかし、無駄に長い階段だなあ学校にいくより疲れるわ、」りゃ
と愚痴なのかなんなのか分からんことを言いつつ登っていく。

「うわあ、なんともボロ〜」とで

俺がみたのはボロボロになっている神社だった、鳥居を潜ろうと思
い歩き出そうとしたら何かが当たった、そこにはひとつの札があった
それを持ち上げて板に書かれた文字を読む。

「博…神社？」文字目がかすれていて読めん、まあ入ってみるけども

そうして俺は鳥居を潜った瞬間、なんか強烈な光みたいなものに襲
われすぐに目を閉じその光が収まるまで思いきり目を瞑り手を前に
出してなるべく眩しくないようにしていた。

「…っ!!」

そして光が収まり、恐る恐る目を開けてみるとなんとそこには圧倒
的な存在感を誇る神社と思われるものが建っていた。

「…へ？」何処？」

第2話「ここは幻想郷よ」

「…へ？ここ何処？」

うん、目の前にあったのは神社だった。

え？俺、さっきまでボロボロになった神社が分かんところにいるんだが…訳が分からん。

とにかく適当に人探すか、神社だろ？一人、二人はいてもいい気がするんだが…人の気配が全くしない。

参道を歩いてたら、真正面に賽銭箱が一つ。

「ほお、賽銭箱か初詣以来だな、もっかいお願いしとくか」

1000円をポイツ！と。

パンパン！「今年もなんとか過ごせますように…！いやもう訳が分からんことになっているのだが」

お参り？も済んだことなのでもう1回人を探さ…ん？

ハイ、裏に気配を感じます。

俺はゆっくりと顔を気配する方向に向けた。

紅白のここの神社の巫女？女性っぽいし。

「あなた、誰？」

巫女さんが話しかけてきた。

「ん？俺か、尾神隼^{おがみはやと}だ、あなたは？」

「私は、この神社の巫女をやってる博麗霊夢よ」

「あと、あなたみたところこの人間じゃないわね？外来人？」

「この人間？外来人？なんだそりゃ、というかここは日本じゃないのか？まあ、俺も初めてくるところだし」

「えっと、どういうことだ？この人間ってなんだ、それと外来人って」

「ああちゃんと話すわ、ここは見ての通りあなたがいた世界じゃないわ、多分何らかの理由でここに連れてこられたと思うんだけど…」

「んーよくまだ分からんな、俺はボロボロになってた神社の鳥居を潜ったらここにいただけだ」

「え？あなた外の博麗神社が見えてたわけ？」

「博麗神社？この神社の名前か？ああ、なんかそんな札らしきものがあつたな、ホレ」

とボロボロだった神社に落ちていた札をみせた。

「確かに、これに書いてあるのはこの神社の名前ね、でも何故あなたが？」

「分からん、俺は家に帰る時にたまたまあつた神社に立ち寄っただけだ」

「へえ、不思議なこともあるものね」

「なあひとつ聞いていいか？ここはどっなんだ？」

「ここは幻想郷よ」

「幻想郷？なんだそりゃ」

「幻想郷はあなたが住んでいた世界から陸続きにある世界なんだけど結界で隔離されているから外部からは見えないの、そしてここからあなたをいた世界からも行き来は不可能になっている」

「はあ、まだよく分からんが一つだけは理解できた、つまり俺は俺がいた世界に帰ることは出来ないんだな？」

「まあ、簡単に言つとそうなるわね、あとは隙間の妖怪なんだけど…」

「隙間の妖怪？なんだそれは」

「私のことよ、隼」

ん？俺の名前を呼んだか、ていうかなんで知っているあなた様は…。

「あんたが霊夢の言っていた隙間の妖怪さん？」

「ええ、私は八雲紫。みての通り隙間に住んでる妖怪よ」

「で？紫、隼はどっするの？ここに置いておくの？」

「まあ、ここに来たからといって絶対帰れないという訳ではないんだけど、あなたにはここにいてもらうことにするわ外の奴とは思えない

ほど霊力があるみたいだし？」

と俺はここ幻想郷に住むことになった俺は別にいいのだが、新しい発見とかもありそうだし

「なあ、紫。俺はここにいるのは別にいいんだが外の世界にいた俺の友人やらは俺が突然消えたら大変なことにならないか？」

「ああ、そのことなら「うちでやっ」とくわ気にしないでね

「ん？ああ、分かった」

「というわけだからもよろしくな！霊夢」

「ええ、こちらこそ

と霊夢。

「じゃあ、私は帰るわね、では隼、楽しい幻想郷の生活を

「ああ、じゃあな」

「そうそう、隼。住むところないでしょ？この神社住んでるの私だけだし他の部屋貸してあげるわ」

「おお、なんきゅ

紫が去って行ったあと、縁側で話していた。

そして、数十分後。

「なあ、霊夢向こうからこっちに何か飛んでくるんだが…」

「え？あ、あれは…魔理沙ね」

「魔理沙？誰なんだその人は」

「あなたと同じで人間の霧雨魔理沙、白黒の魔法使いよ」

と話していたら参道でその魔法使いさんが降り立った。

「よっ！霊夢遊びにきたぜ！」

「魔理沙いらっしやい、なんかいいネタでもあった？」

「ああ、あつたぜ！」

魔理沙が小声で「今、見つけたんだけどな」と呟いた。

「へえ、それは何かしら」

「ズバリ！麗夢、お前の横に座ってる奴だ！」

と魔理沙が俺に向かって指をさす。

「え？俺か、俺は尾神隼、霊夢から聞いたぜ、人間であり魔法使いの霧雨魔理沙だろ？」

「ああ、そうだぜ！これから宜しくなんだぜ」

「いちばんこそ、宜しくな」

「さて、もう夕暮れだし帰るとするか」

と魔理沙。

「そうね、隼いきましょ」

「おお、魔理沙また明日な」

「おう！隼もな」

と言っていた気がするが筈に乗りながら言っていたので風で最後はよく聞こえなかった。

「さて、晩飯の準備だが俺がやるうか？」

「隼、料理できるの？意外ね」

「以外とはなんだ、俺は一人暮らししてたから一人で家事をこなすくらい出来るわ」

「へえ、なら手伝ってもらおうかしら」

「あーよ」

俺と霊夢は料理をし始めた、霊夢も料理の腕はなかなかのもんだなあと感じしつつ手を動かしていた。

「ふう、こんなもんか」

「隼が手際よくて助かったわ、私だけじゃいつももう少し時間がかかったら」

「へえ、まっ食べよっか」

数十分後。

「はあ、美味しかった、ごちそうさま」

「隼の料理なかなかのものだったわ、生活楽になりそう」

「生活？なんでだ」

「紫が去った後、かなりの時間話してたけど参拝客なんて一人も来なかったでしょ？だからよ」

「ああ、なんか変な事聞いちゃったな、悪い」

とペコリと一礼する。

「いいのよ、謝らなくてこれが事実なんだから」

「あ、ひとつ聞きたいんだが外の世界の金ってここでも使えるのか？」

「ええ、元々は隔離なんてされてなかったんだからね」

「そうなのか、なあ幻想郷には人が住んでるところがあるんだろ？そこに俺を連れて行ってくれよ、明日」

「いいわよ、人里の見学みたいな感じでね」

「俺が話したいことは終わったし、風呂にいきたいな」

「なら、この部屋をでて突き当りを右ね」

「あいよ、色々世話になるね、ありがとう」

「全然いいわよ、これくらい苦労じゃないし」

隼が風呂にいつてから30分経過。

「はあー気持ちよかった、霊夢次いっていい？…ってん？」

霊夢は寝息をかきながら気持ちよそそつに寝ていた。

「おいおい、こんなところで寝てたら風邪引いちまうぜ？」

声をかけても起きなかったので、布団まで連れて行ってやり寝かせてやった。

俺も押入れに入ってた布団を敷き、眠った。

こうして、隼の幻想郷での生活が始まったのであった。

第3話「人里へいこう」

「朝か…」

現在朝の4時半我ながら早い起床である、俺は少し背伸びをして霊夢が横で寝ているのを確認する。

昨日は布団に霊夢を運んでやったあと横に俺も布団を敷いて寝てしまったのだ。

「昨日は眠たかったから全然なんともなかったけど、今更考えてると変だな…俺」

洗面台に向かいつつ、そんなことを呟いてみる。

顔を洗い、寝癖の酷さに呆れながら身支度をしていた。

「朝飯を作つといてやるか」

何故そう思ったかは個人的な詫びである、自分でも横でなぜ寝てしまったか分からないので、償いにでもなればいいなと思ったからである。

「できたな」

そう一言いい、自分の分をさつさと食って、霊夢の分を置いてやった。

そして縁側に出て日向ぼっこ？をすることにした。

日向ぼっこ？をし始めて30分は経過しただろうか、裏からゴソッと
という音がしたので霊夢が起きたのだらうと俺は思い、戸を開ける。

「あら早いのね」

「まあな、それと朝飯作つといたからちゃんと食べとけよ」

「ありがとう」

と行って奥へ行ってしまった。

「さて、霊夢の準備が整うまで何するっかなー」

と考えつつ、歩きだす。

ウロチヨロしていたら倉をみつけた、位置的には鳥居からみて左奥
側ら辺である。

「倉か、最初来たときは気づかなかったがこんなものがあるとは」

と言って中に入って、運よく鍵が開いていたので。

中を探り始めて10分が経過。

「しっかし何もないなー刀1本もないな」

仕方ないので俺は出ることにした、その時俺は何かに躓き裏の棚に

背中をぶつけてしまった。

「いつてえー…」

俺は思いつきり叫ぶ。

その時また柵の上から何かが降ってきて俺の頭に直撃した。

「いつてえー！今度は何だよ！」

落ちたもののほうをみると一本の錆びきった刀があった。

「なんだこれ、刀か？ていつか錆びてるし…」

そんなことを言っていたら外から声が聞こえてくる、たぶん霊夢だろっ。

「隼ー！どっにいったのー？」

霊夢が心配そうにしているので俺はさっきの刀を持ち倉を出た。

「あ、いた倉にいったの？」

「まあちょっと気になったもんで、それよりこんな刀があったんだが」

「それね魔理沙が持ってきたものなんだけど、私刀なんて使わないし放置してたの」

「あのさこの刀人里にいつて鍛冶屋で鍛えなおしてほしいんだけど…」

「んー、確かに加治屋はあるけど何で？」

「身を守るためのお守りみたいな感じで持つときたいんだ駄目かな？」

「隼がそこまでいうなら、しょうがないわね」

「ありがとう！霊夢」

「ううして俺と霊夢は人里へ向かう。」

「その人里まで何分くらいかかるんだ？」

「まあ、事故がなければすぐ…かな？」

そんな会話をしつつ人里に向かいにいった、俺たちはその事故とやらにも会わず無事に人里にはついた。

「加治屋に先にいって後で色々周りましょっか」

「そうだな、そういえば鍛冶屋はどこにあるんだ？それらしきものが見当たらないんだが」

「人里にはちゃんとあるんだけど、少し奥だわ」

着くまでキンクリ。

「へえ、ここが加治屋か」

「まあ、ほとんど人なんてこないけどね、知る人ぞ知るって感じ」

そついいながら中に入ってく。

「こんにちわ、私だけどいるー？」

霊夢がそう大きな声で言う。

奥の方から人がでてきた。

「おうおう、久々の客だと思えば博麗の巫女じゃねえか今日は何の用だ？」

「ちょっとこの刀を鍛えなおしてもらいたくてね」

「どれちょっと見せてみ」

そう加治屋がいい、霊夢が刀を渡す。

加治屋が刀をじっくりみているといきなり表情が変わった何かあったのかと俺は思う。

「どうかしたの？」

と霊夢が問いかける。

「博麗の巫女これをどこで？」

「えっと魔理沙がなんかその刀を私に持ってきて仕方なく受け取ったの」

「ほお、霧雨道具屋のところのか」

「で、この刀は何なの？」

「この刀は【霊刀カグツチ】だ、かなり古くから伝わる刀だがまだ残っ

ているなんて俺も思わなんだ」

「私は聞いたことないわねそんな刀」

「無理もねえな、この刀の存在は本当に極一部の者しか知らなかったんだからな」

「そう、それで鍛えなおしてほしいんだけど、料金はいくら？」

「こんな珍しい刀を博麗の巫女に持ってきてもらったんだ料金なんざとらねえぜ」

「感謝するわ、でもその刀を掘り出したのは隼なの」

「フム、そのあんちゃんがか、中々霊力もあるみたいだしおまけでこの刀に霊力を込めといてやるよ」

「ありがと、それで時間はどれくらいかかるかしら？」

「人里をぐるっと周って帰ってくる頃には終わってるぜ」

「そう、じゃあ頼むわね」

「おうよ、任せときな！」

力強い返事だった、こうして俺と霊夢は加治屋を後にした。

「あの鍛冶屋の人はどんな関係なんだ？」

「ちょっと昔にね」

「そっか、俺が思うに刀を鍛えなおすのはかなり時間があると思うんだが」

「彼はねこれまでかなりの刀を鍛えてきたの、そう時間はかからないはずだわ」

「へえ、そんなに凄い人なのか」

そんなことを話しつつ、俺と霊夢は人里を2時間以上かけてゆっくりに周った。

そして加治屋まで戻ってきた。

「出来てるかしら？」

「勿論だ、これが本来の姿に加え霊力を加えた霊刀カグツチだ」

「これが本来の姿ね、ありがとまた来るわ」

「あいよ、そのあんちゃんもこの刀大事にしなよ」

「はい、ありがとございます」

とってから一礼し加治屋をでた。

「なあ、霊夢この刀常に持ち歩くには大変だから何処かにしまっときたいんだが」

「そっね、じゃあこっすればいいわ」

と言い、目を閉じて何やらし始めた、俺はそれが終わるのをじっと待つ。

「あ、あれ？刀は？」

「あなたの中だけに閉じ込めておいたわ、必要な時だけに使いなさい
翳せば刀が出てくるはずだから」

「そっか、ありがとな霊夢！」

「どういたしまして、それじゃ帰りましょうか」

「だな、帰るか」

俺と霊夢はゆっくり神社まで帰って行った。

第4話「弾幕じっしー」

人里から戻り、一息ついていると魔理沙がやってきた。

「よっ、隼！何してたんだ？」

「魔理沙か、いや人里にいったんだ」

「何をしに？」

「何故そこまで聞きたがる」

「面白いことがありそうだから？かな」

と言ってからニヒッと笑っていたので、仕方なく刀を見せたやることにした。

「この刀を鍛えなおしてもらってたんだ」

といい俺は手を伸ばし胸の前あたりで翳したら刀がでてきた。

「何が起こったんだ？」

「霊夢にちょっと細工してもらった、いつでも出せるように」

「なるほど…ってその刀よくみれば私があげたやつじゃないか」

「そうだよ、なんか鍛冶屋の人に聞いたらかなり珍しい刀だったみたい、だからお守り代わりにでも…」と

「へー、そんなことなら霊夢にあげるんじゃないかなかったぜ」

とブツブツとなんか魔理沙は言っている。

「そついや、霊夢は？」

「畳の上で寝てるんじゃないか？朝から出掛けてたし」

「そつか、ならちよつと顔みせてくるか」

寝てるのにかよ…と俺は思いながらも止めはしなかった、というかついて行ってた。

「お邪魔しまーす」

と小声で魔理沙が言う。

「お、いたいた。霊夢ー昏間から寝てると妖怪になっちまうぞー」

魔理沙が声をかける。

「…っ、魔理沙…？」

「おー気づいた、おはようさん」

「人が寝てる時に起こさないでよね」

「いいじゃないか、それより弾幕ごっこやるーぜー」

「…気乗りしないけどいいわ、やりまこよ」

「決まりだなー！」

と言ってから「ヒッ」と笑い、外へ飛び出して行った。

「なあ、霊夢？弾幕じっじってなんだんだ？」

「隼いたのね、まあ今やるからみてれば分かるわ」

「あいよ。あ、それと前々から気になってたんだが霊力って何だ？俺にはそんなものがあるのか？」

「んーそんなこと聞かれたことないから簡単に言っただけなら「コレね」

とじっして手を出すよ」とひとつの青白っぽい玉が出てきた

「なんだこりゃ?!」

「これはね、霊力弾と違ってね弾幕じっじに必要とされるものなの」

「へー、まあ見学してるわ」

俺は縁側で正座して見学しているのである。

「魔理沙準備はいい？」

「いいぜ、どっからでもかかっていいよ!!!」

魔理沙は気合十分だなあと俺は口をポカーンと開けてみえた。

そう眺めていると画者のまわりじっじきんちやくの玉がじっじきに

現れた、弾幕ごっこってそのまんまだな…。

弾幕ごっこが開始してから3分が経った。

「そろそろいくぜー！」

と魔理沙がいい何かを宣言する。

「恋符『マスタースパーク』！」

なんかでっかい光の束が霊夢に向かっていく。

「そんな一直線のやつじゃ私には当たらないわよー魔理沙」

「くっそー！流石霊夢だぜ」

何分経ったかは知らんが魔理沙が負けたようだ。

それにしても、綺麗だったなーやる側じゃなくて観戦専門でもいい気がする、と俺は思っていた。

「すげーなあ、俺もできるよつになるのか？」

と聞いてみる。

「ええ、できるわよ。隼はセンスありそうだしすぐに出来るわよでも

まずは靈力弾を出す練習ね」

「分かったーやってみる」

……それから1週間ずっと靈力弾を出す練習をしていた。

最初は出すのに時間がかかったが慣れていくうちに量は多くなり撃てるようになったが途中に靈夢から「隼は弾幕をはるんじゃないくて刀を活用すればいいのよ」

と言われその通りにやるとかなりうまくいった、俺のスタイルはこれだ！と決めた瞬間でもあった。

それからまた1週間が経ち、刀の扱いにも慣れ弾幕ごっこを一通りやれるくらいにはなった。

「ふう、こんなもんかな？」

「やっぱり隼は上達が早いわね、もう慣れ切ってるもの」

「そんなことはないよ、まだまだ未熟だよ」

「そう？でも十分に私は強いと思うけどね」

「そいつはさんきゅ」

俺も早く弾幕じっしやってみたいなーなんて心の中で思っていた
...

第5話「深く考え過ぎ…か」

弾幕ごつこのことを知ってから1カ月は経っただろうか、俺は現在寝っ転がりながらスペカの考案をしている、因みに夕方。霊夢に「弾幕ごつこするならスペルカードは必須だから！」と言われたので考えてる最中なのだ。

「あー、思い浮かばねえ…」

俺は思いつけばそれを実行しやってみるのだがどうも気に入らないものばかりでまだ試行錯誤段階ということである。

「どーしたの？まだ考えてるの？スペカ」

「霊夢か、そーだよ？全く浮かばないからな」

「攻撃することばかり考えてない？自己強化というか、刀に霊力を込める形にすればいいんじゃないかしら？」

「そう簡単にいうけどさ、中々難しいんだよ」

「そうかしら？隼なら思いつけばすぐに出来るわよ」

『隼なら』という言葉に疑問を抱いたがそこは聞かなかつた、そして俺はまた考え始めた。

考えているだけで時間はすぐに過ぎ去っていく…。

また30分が過ぎた…。

「あー！なんも思いつかねえ…駄目だ、もう」

「まだ考えてたの？焦りすぎじゃない？」

「焦ってなんかないさ、ただ…」

「ただ？」

「いや、なんでもない。すまん」

「別にいいわよ、けど隼がそんな悩んでるのって1カ月の間になかったからね」

「そうかなー？俺って考えなしに見えんのか…w」

「そうは言ってないわよただ単に深く考え過ぎなの」

「深く考え過ぎか…」

「じゃ、私はいくわ夕飯の支度があるから」

「あいよ」

くっそー…、どうしたらいいかな？

誰かに知恵を借りるか？

いや、誰も思い浮かばん…、いやこの刀を使うんだから鍛冶屋のおっちゃんか？

「よし！そうなれば明日はまた人里に行くぞっ!!!」

と大きな声で叫ぶ。

「とりあえず今日は終了か…また明日」

霊夢の声が聞こえる

「隼ー！出来たわよー」

早いな、おい…w

「はいよー今行くわ」

と返事する。

「深く考え過ぎね…ね」

と咳き中に入っていく。

そして今日が終わった…。

次の日。

「よっし、行くか」

「隼？今日は何処へ」

「ちよつと里にな」

「分かったわ、いってらっしゃい」

「あと魔理沙来るから相手してあげて帰ってきてからでいいから」

「いや、でも俺はまだスペカが…」

「大丈夫、帰ってくる頃には」

「？どういう意味だ？」

「まあ、帰ってくれば分かるわ」

「そうか、じゃあいつてくる！」

「ええ、いってらっしゃい」

また気になるな、帰ってくる頃には…。

まあ、分かるって言ってたし深くは考えないでおこう。

「ていうか、前は霊夢たちが一緒だったけど、一人だから妖怪とかに出会ったら俺どーすんだ？」

「それは流石に困るな…普通に抜けられたらいいんだが、少しくらい戦闘練習はしてたから軽いのなら大丈夫なんだが」

そんなことを言いつつ、歩いていく。

「心配だな、情けないことだが抜けるまでならついてきてもらえば良かった…」後悔

そんなこんな言いつつ、歩き始めてからまだ5分しないうちに恐れていたことが来てしまった…!!

「おお？こんなところに人間がいるとはなあ食っちまおうかなー」

え…？あ、これまさか遭遇しちゃったパターンですか？

ヤバイヤバイ心の準備出来てないよ（汗

冷静に対処とか出来ねえわ、とりあえずスルーする訳にもいかなさそつだし話してみる？

「あの…食われたら困るんですが？」

「グハハハ！面白いことをいう人間だなあ靈力もそこそこあるじゃねえか食う価値はあるな」

笑い方気持ち悪いな、オイ。

「自分、里にいきただけなんで食うならその後にしてくださいな？」

「そりゃ無理な要件だなあ、折角出会った人間だあ食わなきゃ損だろおがあ!!!」

「こっちも損するから止めてください」

いやあ、しっかし本当に出くわすとはな、まあ闘つ状況になったら

刀は抜こう。

「お前は損していいんだよ、人間風情がよぉ！」

「じゃあ、貴方も私を食い損ねて損してください」

と微笑んだ

「うるせえ！人間如きが調子に乗ってじゃねえよ!!!」

と襲いかかってくる

やっぱりこうなるかこんな挑発に乗るとか無能すぎる……。
某ステルスゲーの敵兵さんだな、こりゃ。

「はぁ……」うもなんで血が頭に昇りやすいかなあ……」

と言いつつ、胸の前で手を翳す。

「?!」

妖怪はビククリしているようだね、いきなり刀なんか出たら……自分でもビククリしたもん最初。

「グへへへ、てめえは一味違う人間みてえだなあ」

「それは褒め言葉として受け止めていいのかな？妖怪さんよぉ」

「グへへ、そう思えるのも今のうちだぜえ！」

といきなり戦闘が開始した。

今更だが、俺は機動力には自信がある、だから並の攻撃。いやそれ以上の攻撃は避けれるかは知らないがそれ以下は簡単に避けれる、1カ月の間で機動力を高める練習的なのもしていた。頭に血が昇ってる妖怪なんざ相手じゃない。

「……ふう、こんなもんか？」

「たかが、人間如きに……グハッ」

妖怪は気を失ったようだ。

刀使つといて殺さないのかって？ そんな残酷な事は考えん、みねうちといったところかな？

「人間という言葉で舐めてもらっては困るな強い奴だっていることだ、じゃあな」

と一言だけ気を失った妖怪に言いすぐ歩き始める。

「初めての实战だったが中々思うように使えたんじゃないかな？正直自分でもビックリだけど」

のほほんとしながら里に向かった。

流石に里につくまでもう1度妖怪に出会うなんてことはない。

「やっとか、戦ってたから時間かったな。まっ鍛冶屋に向かいますか」

歩いてると、魔理沙を発見した。

「おっ、魔理沙じゃんどうしたんだ？こんなところで」

「隼じゃないか、ん？いやちょっとな」

と笑ってみせた。

「そっか…、あっそっだちょっとあそこ寄っていいか？」

あそこと指を指したのはつい最近いった団子屋であった。

「え？なんで団子屋？」

「この前行ったときに気に入ってな、魔理沙に奢ってやるって」

「ありがとなっ！隼」

「いや、いいんだ別に。気が向いたっつーか気分だよ、気分」

「気分がよっ！」

といった後に小さな声で「友達という仲でかと思ったぜ…」と呟いた。

いきなり下を向いた魔理沙に俺は少々心配したが、すぐ前を向いたので大丈夫だなと思った。

「行くっぜ、隼」

「ん？ああ、いっつか」

と行って中に入っていく。

「いっつかしゃーい……あらこの間の」

と目を丸くし驚いている。

「あ、覚えてくれてたんですか？嬉しいな」

「そりゃついでこの間じゃない忘れる方が可笑しいわよ」

と笑いながら言う。

俺はついこの間は1カ月でもなんだ…と思いつつ椅子に腰をかける

「何にする？食べれるだけで食べたってね」

かなり親しい関係みたいになってるなw2回目なのに、まあ新境地で知り合いを増やすのは損ではないがな。

「じゃあ、みたらし団子と三色団子で。魔理沙は？」

「んー、隼と同じものでっ!」

「みたらしと三色2つずつね、ちょっとお茶でも飲んで待っててね」

「そういえば隼は今日なんで里に来たんだ？用事か？」

「鍛冶屋にちよつとな」

「へえ…あつ！分かったぜ、スペカの事でまだ悩んでるんだろ？」

見事に言い当てられたので俯くしかない。

「凶星だな、隼は分かりやすいな」

「しょうがないだろ、何も思い浮かばないんだよ…」

「深く考え過ぎなんだよ、隼は」

「皆同じことを言っただな」

「そうしか言いようないじゃないか、スペカなんて挑戦してみてなんぼなんだぜ？」

「？魔理沙もそうだったのか？」

「あまり人には言わないがずっと魔法の事毎日のように調べてたんだ」

「魔理沙らしいな」

「私らしい？何処が」

「なんかそう前に突っ走ってる感じってどうかチャレンジ精神が凄いよ」

と話していると注文したものが来た。

「はい、みたらしと三色2つずつー」

「ありがとう、おばちゃん」

そうして、団子を食べ終わり……。

「美味しかったよ、おばちゃん！また来るね」

「うん、1つちこそありがとうね！隼くん」

と挨拶を交わし、店を出る。

「あ、隼。私やることあるから一足先に帰らせてもらっぜ」

「ああ付き合ってくれてありがとうとな、また今度奢ってやるよ友達としての仲でなー」

魔理沙は先程思ったことが的中したので、何も言わずすぐに去って行った。

「最後の一言は余計だったかな？まっいいかなー」

その頃空を飛んでる魔理沙はというと。

「くそっ、隼のくせだ…」

と顔を赤くしながら呟いていた。

里の奥のほうまで歩き、ようやくついた。

「1カ月ぶり…か」

と中に足を踏み入れていく。

「いんにちわー、誰かいますかー？」

と大きな声で言う。

そしたら奥のほうから人がでてきた

「お久しぶりです」

と一礼。

「ん？あんたはこの前博麗の巫女と一緒にいた…」

「覚えてくれるなんて嬉しいですね、それで今日は相談がありました」

と単刀直入に話を本題にきりだす。

「相談？刀の事か？戦闘に関しての事か？スペカの事か？」

「最後のスペカについてです」

「そうか、なら何故俺に聞く？」

「あなたがこの刀を鍛え直した本人だからですね」

「だから来たのか、まあ博麗の巫女はなんでも叩けるみたいなの口ぶりで言ったらしいが」

俺は叩けるものしか叩けない、意味は分かるな？」

「はい、分かっています。でもヒントがあるんじゃないかなと思います…」

「……じゃあな、俺は1度しか言わん、ようく聞いとけよ。」

お前は刀を使って戦うんだ刀を使えば全ては分かる」

「…？それはヒントなんですか？」

「その刀を使ってるお前なら分かる、絶対にな…納得したなら行けお前が求めているものが必ず見つかるはずだ、これ以上のヒントは与えられんからな」

あとは自分を信じて進むしかない、分かったな？」

「ありがとうございます、じゃ俺行きますね」

「また困ったら来い、俺が出来ることなら手伝ってやる、じゃあな隼」

最後は名前で呼んでくれたので嬉しかった、そして俺は急いで博麗神社まで向った。

森を抜ける、途中妖怪と出会ったが一斬りで済ませた、何度も言うが殺しはしない残酷すぎるのでな、まあ甘く見過ぎと言われそうだがそれでいいんだそれが俺のやり方だからな。

神社まである長い石階段を2段飛ばしで勢いに任せ上っていく。

「あら、隼？どうしたのそんな苦しい顔をして」

「いや、ここまで全力で走ってきたからな少し汗掻いただけさ

それより、魔理沙を呼んでくれないか？話したい事があるんだ、勿論霊夢にもな」

「分かったわ、それじゃあ少し待ってて」

「ああ」

それから10分後くらいに霊夢が帰ってきた。

「はい、連れて来たわよ」

「なんだ、話って?」

「俺と弾幕ごっこしてくれ!頼む!」

「え?隼と?でも1まだスペカが完成してないんじゃない?」

と魔理沙は言いながら霊夢の方を見た、だが霊夢は賛成してるようで口には出さず片目を瞑って魔理沙にみせた。

「分かったぜ!隼!やるからには私も全力で行くぜっ!」

「当たり前だ、本気じゃない勝負なんて面白みがない行くぞ!魔理沙っ」

こうして隼と魔理沙の対決が始まった。

第6話「VS魔理沙」

「隼ってそういえば実戦って初めてなのよね？」

と戦ってる俺に声をかけてくる、返す余裕のないのに話しかけてくるとはけしからん！

「ああ、そーだよ…ってあぶねっ！」

弾幕が飛び交う…。

俺は刀から弾幕をだしている、張るのとは少し違うかな、隙を窺って攻撃してんだ

「隼…どうしたんだ？もっと楽しもうぜ」

相変わらず魔理沙はハイテンションだ。

「分かってんよ、そろそろいくかな…」

「光剣『雷光一閃斬』！」

俺は思いっきり加速し、魔理沙の目の前まで一瞬にして近づくと、刀を振る。

そして光のような一杯でできた弾幕が魔理沙に向かって飛び交う。

「光?!私と似てるなっ」

と…いつつ避けてくる。

(流石にこれだけでは終わらんか…分かった事だけど正直辛いな)

「光ねえ、このスペカだけだよ俺はもつと他にもある」

「へえ、それは面白いな！今度は私の番だ」

「恋符『マスタースパーク』」

魔理沙のスペカ宣言がされた。

(1回やってみたかったんだよなあ！この技)

「幻影『シャドードデュアル影の2刀流』」

影が実体となりもう1つの刀がでてきた。

「?!なんだそれ、ずるくないか？」

「ずるかねーよ、おらっ…」

とあのでっかい光の束を斬った。

「斬れんのかよ、マスタースパークって…」

と魔理沙は驚いている。

「みてーだな、斬れなかったら終わってたけど」

とまた弾幕を放ち始める。

あれからずっと戦ってるが決着がつかない、霊夢は欠伸をしてつまんなさそうに見ている。

「そろそろ、決着つけたいな、魔理沙！」

「そうだな、隼！じゃあ私からいくぜっ」

「魔符『スターダストレヴァリエ』!!!」

「影技『幻の世界』」

魔理沙は弾幕を飛ばしてきたが、俺は違つ。相手の視界を一瞬奪うだけで十分だ。

「終わりにしようか」

「剣技『疾風の刃』！」

刀をおもい斬り振り風を纏った弾幕を飛ばす。

魔理沙は声のするほうを向いたがもう遅い、弾幕は魔理沙にあたり落ちていった。

「……まさか初めてやる相手に負けるとは思わなかったぜ。

ていうか、あの『幻の世界』ってなんだ？使えるのは刀を使ったことしかないと思ってたのに」

「ああ、あれか森をみてたら思いついたんだ」

「森？それだけかよ」

「ああ、そうだけど？」

「まさか隼が勝つなんて思わなかったわ」

と霊夢が寄ってくる。

「期待されてなかったのかよ…」

「嘘よ、嘘。でも魔理沙も強いんだけどね」

「まあ、いいじゃないか霊夢、私が負けただけだ」

「魔理沙の割には素直に負けを認めるじゃない」

「隼だからなっ、霊夢だと気に入らないっていうか負けたくないんだよ」

「へえ、魔理沙にも対抗心あんだな！」

と俺がこじと

「私は戦うのは好きだぜ、特に強い奴はなっ！」

「魔理沙は負けず嫌いだからねー」

「うるさいぞ、霊夢！」

「はいはい、分かったわよ」

と会話を聞いていて、俺は思った。「やっぱり二人は仲いいんだな」と

あえて口には出さなかった。

「はあ、面白かった！またやろうぜ隼、んじゃ私は魔法の森に帰るぜ」

「ああ、またな魔理沙」

とピューンとすぐに飛び去って行った。

俺は行ったのを見て縁側に置いてある新聞を手に取った

「そういえば、隼。あなた最近よく新聞呼んでるけどどうかしたの？」

「ん？いや内容よりこの新聞書いてるのって誰かなーって思ってたさ」

「ああ、それならたまにだけどここに来るわよ」

「え？まじで？超会いたいんだけど!!」

「え…ええ、明日くらいに来るんじゃないかしら？知らないけど」

「おー、そうかそうか、楽しみだなその新聞を書いている人ってどんな人なんだ？」

「人…ねえ、隼が想像してる『人』とは全然違つかもねー」

と苦笑しつついった。

「なんで「人」を強調してんだよ、もったいぶらないで教えてくれよ」

「明日、会えると思うからそれまでの我慢ね」

「霊夢の意地悪と思ったが、明日会えるならそれでいいやと思いつつ、問うのを諦めた。」

「あとあなたが魔理沙と戦ってるときに思ったんだけど、どうやってあんな短時間で」

「3つも考えたの？」

「ん？自分を信じた結果…かな？」

「自分を信じる？何それ」

「鍛冶屋のおっちゃんかね、ヒントくれたんだよ。自分を信じてるってね」

「それがヒント？ヒントには見えないんだけど」

「言い換えれば、自分がやれることだけやれってこと」

「それじゃあ、もっと分かんないわよ」

「えー、まあこの考え方は自分を信じた人にしか分かんねえかもな！」

と笑いながら言った。

「ほら、遅いけど昼飯の準備だぞ」

「なんか気に食わないけどしょうがないわね」

と中に入っていった。

第7話「どうも、文屋です！」

俺は現在、昼飯の準備をしているところだ。

魔理沙と弹幕ごっこをしていたからもうすぐ13時を回る。

「おーい、霊夢そろそろ出来るぞー」

と俺が霊夢に声をかける。

「よっと、こんなもんか」

「あら、随分早いわね」

「冷蔵庫に全然ものないんだ、しょうがないね」

「ああ、そこら辺は隼に任せてたつもりだから」

「…え？そうなの？あ、いただきます」

「そつよっ」

口を動かしながら食べている。

「食べるか喋るかどっちかにしろよな」

「まあ、家事は隼に任せるから宜しく」

と片手を挙げてパタパタと手を振る。

「はあ…これはバイトみたいのしなきゃ駄目だろうな」

「いいじゃない、生活費余ったら自由に使ったらいいじゃない」

「どうも、文屋です」

と違う声が聞こえてきた

「ふえっ、なんだ文か…もうビックリさせないでよ」

「ん？霊夢さん、こちらの方は？」

「え？文の事なら知ってると思ってるにだからあえて教えなかったんだけど」

「全然、知りませんでしたよ最近神社に来なかった罰かな…」

と言ってうんうん唸りだした。

「あの…どなたですか？」

「おっと失礼、私はこの新聞を書いている射命丸文です」

「え？マジで、俺は尾神隼よろしくな」

「隼さんですか、よろしくおねがいします」

といたらカメラを取り出しシャッターを押しだした。

「よしこれはBIGニュースですね、ではさようならー」

と一瞬で消え去ってしまった。

(ポカーン…。)

「ああ、気にしないであれが文だから」

「お、おっ…」

「それにしても昼から暇ねー」

といつの間にか食事を終わっていた霊夢が言う。

「ああ、そうだな何かすることがあればいいんだけど」

「そうね、そうだと私と弾幕ごっこしてみない？」

「霊夢と？んーあーいいけど勝てる自信ないわ…」

「いいじゃない、3時くらいでいいかしら？」

「ああ、いいよ」

といつて俺は外に出していつとする。

「何処行くの？3時なんてすぐよ？」

「大丈夫すぐ戻ってくるから」

(…なんだなんか分からんけど里が危ない？)

俺は全力で里まで走り出した。

そして俺はようやく里についた。

「なんだこれ…なんで妖怪が暴れてんだよ、里では暴れてはいけないルールがあったはずだが
なんで暴走している」

俺は妖怪に近づいていく。

「おい、何やってんだよお前らが暴れる場所はここじゃねえだろ」

「ああ？…うるせえよ人間が!!!」

「…自分をコントロール出来てねえ占い師じゃない俺でも分かる。」

「おいおい暴れるなら俺が相手になるだからもう里では暴れないでくれ」

「人間が調子に乗ってんじゃねえよ!!」

と飛びかかってきた。

それを俺は軽く避ける。

「ほら、どうしたそんな攻撃じゃ俺には当たらないぞ」

と俺はあえて挑発する。

「てめえ本当に殺られたいようだな…このまま地獄送りにしてやるぜ」

「!」

「はあ…しょうがねえホラついてこい、いくぞ!!」

と俺は森のほうへ誘導する。

里でこのまま戦ったらひとたまりもねえからな。

森のほうに誘導したら俺は刀を取り出した。

(サクッと終わらせるか…)

「影技『幻の世界』」

あたりが一瞬にして何もみえなくなる、その間にいつきに加速し妖怪の裏まで寄っていく。

「光剣『雷光一閃斬』!!」

と裏ではなつた弾幕が妖怪に向かって飛んでいく。

(終わりだな…)

と思っていたら妖怪は手でその弾幕を斬り裂いた。

「なっ?!」

「俺様がこのまま終わると思ったかよ人間がああ!!」

と俺の近くまで一瞬にして寄り腹を殴りつけられた。

「つつー!カハツ…」

俺は飛ばされ木に叩きつけられた。

「ククク、たかが人間これで終わっただろう…」

「はあ…? まだ終わっちゃいねえよ!」

(なんだこいつ…、遥かに俺より強いこれはヤバイ)

「まだ刃向うか人間!これで終わりにしてやるぜ!」

やべえ足が動かねえ…さっきの衝撃でかなり痛みが…

「俺様に関わったことを後悔させてやるよ!」

と加速し拳を構え殴りかかってきた。

「このままじゃ俺がやられる…くっそ！」

「おしまいだぜ人間！」

「くっ…これは使いたくなかったんだがな」

霊夢に初めて使ったつもりだったがこればかりはしょうがない…。

「いくぜ！妖怪さんよお」

第8話「VS霊夢」

「越技『こくえんのざんれつ獄焰の斬裂』」

とてつもなく多い炎の弾幕が俺と妖怪の周りに張られる。

その弾幕からまた一つの弾幕がでてきて異常な数の弾幕が出来あがった。

「本当は殺したくはないんだがな…こればかりはしょうがない、じゃあな妖怪さんよ」

このスペカを使った理由は相手の行動を制限するためだけに使った。

今回ばかりはみねうちなんては言ってられないからな。

俺は炎の一部を刀に纏わせ、そして一気に加速し一斬りで決めた。

妖怪は完全に焼け死んでいる。

「あーあ、だから使いたくなかったんだよ…全く」

みると俺がいる位置から半径10mだろうかそれくらいは軽く燃えていた。

「こりゃ後でお説教か…」

「この森どつなんだろ、修復出来んのかな。」

俺は反省しつつ神社に帰った。

「ちょっと隼…これはどういつことなの？なんで森が燃えてるの！」

やっぱり流石妖怪退治を専門とするだけあってこういうことに関しては耳に入るの早いな。

俺が正座しながら頭をペコペコ下げていると魔理沙がやってきた。

「おーい霊夢、なんかあったのか？」

「何かあったのか？じゃないレベルよ！隼？どうやってたらこんなことになるわけ?!

ちゃんと説明してくれるんでしょっね

と真剣に霊夢は怒っている、少し殺気も混じっていた…（汗

「え…いや…その…」

俺は萎むしかない。

「おい隼、こればかりは説明してくれよ里の奴らが大混乱してんだ」

「昼飯が終わった後に俺出掛けたじゃん？なんか嫌な感じがしてさ
それで里にいったらその予感が当たってて、妖怪が暴れてたもんで

それを止めようよ

森までおびき寄せて、戦ってて相手は完全に自分をコントロール出
来ない暴走状態で

一回、やられかけてそんで俺がスペカ使ったの（弾幕ごっこよう
じゃありません）そしたら

森がかなり焼けてて…すみませんでした」

「はあ……どんなの使ったの？焼けるんだから炎系の技？」

「ハイ…ソウデス」

俺は悲しそうにうずうず小さくなった。

「ちょっと紫、でてきなさい境界貸してもらおうわ」

「あら、久々の登場にしては扱いが酷くない？」

おい、そこメタいぞー！

「？そんなことはいいからちょっと貸しなさいよ」

「はいはい、分かったわ。あ、因みにあの技使うとき私みてたけどかな
りのものだったわよ」

と言って俺達を境界に落とした。

「隼、どんななんだ？私ワクワクするぜ！」

「魔理沙、今はそういうときじゃないの分かってるの？」

「分かってるぜ？でも隼がそんな技使えるなんて凄いいじゃないかよ

「！」

「隼、やってみて」

「うう…ハイ」

「越技『獄焔の斬裂』！」

としよぼくれながらもめい一杯言った。

すると俺たちの周りに

「なんだこれ?! そりゃあ森を焼けちまうぜ」

「隼…ここまでしてやるなんてちょっと行き過ぎよ」

「その技使ってるときの隼、もの凄く殺気立ってたわよ」

といきなり紫がでてきて面白そうに言った。

「あんたは黙ってて」

「はいはい、それじゃあ返してあげるわ」

と神社に戻った。

「いやあ、凄かったぜ! まあ弾幕ごっこには使えないな紫が準備してくれるなら別だけどー」

魔理沙はニヤニヤと笑いながら言った。

「はあ…しょうがないわね今回の件に関しては許してあげるわ、ただし今後一切絶対に使わないこと！分かったわね？」

「はい…」

「許してあげるから気を取り直しなさい、そんな弱気じゃ私には勝てないわよ？」

「え…？俺と弾幕「っ」してくれるの？」

「当たり前じゃない、約束だからね。その前にその服どうにかしなさいよおね」

「え…あ、うん」

良かった、許してくれるみたい。つつ顔に出しちゃ駄目だ…危ない
(汗)

本堂の中に入っていく、俺の部屋にいき服を着替える。

「うわ、傷ついてんじゃん全然気付かなかった…かなりヤバかったんだな」

俺はさっさと服を着替え、外に出る。

「来たわね、それじゃやりましょうか」

「折角だから私も観戦していくぜ」

「お手柔らかに」

いつもの顔つきに戻ったわねと霊夢は少し笑みを浮かべこう言った

「それじゃあ見せてもらおうよ、本当の実力」

「じゃあ俺からいくぜ、本当に実力をみせてやるよ」

「幻影『影の2刀流』」

「でたわね、2刀流…魔理沙との戦いでみてたけど中々厄介そうね」

「いきますかー」

やっぱり中々決着がつかなく時間がそれなりに経ち始めた。

「やっぱり隼は強いわね、でもそろそろ勝負に終わりを着けないとね」

「ああ、そうだな」

「霊符『夢想封印』！」

結果が俺の周りに張り巡らされる。

「なあ、霊夢この技には致命的な弱点がある…困んだと思ってないか」
「？」

「?どういう意味それは」

「まあ、みれば分かるわ俺の番だな、いくぞ！」

「神技『ファスト・ライジング』」

普通にいつも通り加速するより何倍も速い、誰も一瞬にして裏をとったなんて気付かないだろう。

「決めるか…楽しかったぜ霊夢！」

「奥義『ギリースカイ』!!」

「これまた無駄に弾幕が多くて速いのが霊夢に向かって飛んでいく。見事に霊夢に命中した。」

「いたた…」

「わりい霊夢、大丈夫か？」

と俺は手を貸す。

「負けたわ、隼。本当の実力を見せてもらったわ」

「そりゃ、ぶーも」

「隼！凄いな、あれ全然見えなかったぜ」

「そうね、どうやってあの結界を避けたのかしら」

「んー、速く動いた。それだけだ」

「あのとキスペカ宣言したよな？どうやってたらあんな速く移動できるんだよ」

「さあ、俺にも原理は分からん。足に霊力を溜めるっつーか、放つんだよね、うん」

「へえ、そんな使い方もあるのね」

「はあ、とにかく今日は楽しかったぜー！じゃあな」

「ああ、じゃあな」

「ええ、またね魔理沙」

挨拶を交わすと安定の筈でピューンと帰っていった。

ああ、今日はすげえ楽しかったなずっとこんな生活でいい、このままの暮らしがしたいな。

「どうしたの？そんなポーっとして」

「あ、いやなんでもない」

今日は楽しかった、色んなこともあったけどずっとこのままでもいい。

第9話「魔法の森」

霊夢との初めての弾幕ごっこをした次の日。

「いててて…まだ傷が痛むな、診療所って幻想郷にあるのかな？」

とあの騒動のときの傷に悩ませながらも起きる。

「あ、霊夢おはよう」

「隼おはよう、昨日はすぐ寝たから記憶ないでしょ」

と笑いつつ言った。

「え、俺ってそんなすぐに寝たの？本当に記憶ないわ」

「相当疲れてたんでしょうね、寝顔面白かったわよ」

「……え？ちよつ霊夢なんで人の部屋に入ったんだよ！」

「隼が私の部屋で倒れこむように寝たからじゃない、部屋まで連れて行ってあげたのに、酷い」

本当になんにも思い出せないの顔だけが赤くなってテーブルに頭を打ちつける。

「いたっ…」

「朝食置いといたからちゃんと食べなさいよ」

「あ、うん」

朝食を食べてるときにも寝顔の事を思い出し恥ずかしくなってくる。

俺の寝顔ってどんなんだろ…気になる。

顔を無駄にグリグリして触ったりして変なことを考えてしまう…。

「あー！もう気になるー！」

「何がですか？隼さん？」

「え…？うおっ、文がビックリさせんなよ…まったく」

「いえ、ちょっと隼さんのことで今日は取材してきました」

「へえ…なんで俺に？」

「昨日の森の火事に決まってるじゃないですか」

流石新聞を書いているだけあってお耳が早い事で。

「ああ…そのことがあんまい思い出じゃないんだが折角の取材なんだ断りはしない」

「ありがとうございます、では早速取材を」

あれから色々な質問をされ1つ1つちゃんと返してあげた。

「これで隼さんの記事が2連続ですよ。」とどこ機嫌に帰って行った。

「正直、疲れたな答えるの…まあいいや光を浴びたいから外にいこ」

そとに出ると丁度魔理沙がやってきた。

「よっ隼！ 霊夢みてないか？」

「いや、朝食置いておいてくれたきり見てないけど里にでもいったんじゃないか？」

「あの霊夢がそうそう里に何回も下りるかよいつ参拝客が来るかも分かんないのに」

「魔理沙さんソレハサスガニナイデスヨ」

「ですね、隼さん」

ふたりでおおいに笑っていると殺気を込めた霊夢の声が聞こえてきた

「いつ参拝客が来ないって決まったのかしら？ 隼に魔理沙…？」

つい喉の奥から「ひいっ」という声が漏れてしまった。

「霊夢今日は天気がいいな！ こんな日にはきつと参拝客も…」

「すみませんでしたっ！」

と勢いに任せて俺と魔理沙はその場で土下座して謝った。

「分かればいいのよ、分かればいいこれからそんなことを…」（ry

と長々話している霊夢に対し俺と魔理沙は

（な、魔理沙お前ってどんどころに住んでるんだ？）

（魔法の森だぜ！）

（へえ…何があるの？）

（茸…かな？）

（茸かよしいこうぜ魔理沙！霊夢の説教聞くのは飽きたんだこっそり
行っちゃおう）

（分かったぜ隼、じゃあ私の箒に乗ってしっかりつかまっとけよ？）

（ああ、っじゃ行くぞ）

と行って強行突破を試みた。

「ね？」この神社は段々参拝客も人気もでてくるの！分かった？…っ
てあれ？隼と魔理沙は？」

やっと俺と魔理沙がないのに気付いて霊夢は大きな声で

「隼ー！魔理沙　！後で覚えておきなさいよー！！絶対に許さないんだからー！！」

その頃俺と魔理沙はというところ…。

「いやー冷や冷やしたけどなんとか脱出成功だぜ」

「だな、魔法の森かー楽しみだなー」

「ああ楽しいところだぜ？色んなものがあるしな」

「例えば？」

「茸だぜ」

「それさっきも聞いたよ…」

そうだったけ？と舌をペロッと出し謝った。

魔理沙がやると微妙だ…なんでもありません。

箒の上で揺らされやっとな魔法の森についた。

「よつと、到着」

「へー」こが魔法の森ねー」

里や神社とは全然違った場所で俺は周りをキョロキョロ窺っている。

「そんなに珍しいのか？魔法の森って」

「魔理沙はここに住んでるからいいけどよ、俺は初めて来たんだいいじゃないか」

「まあそんなものなのかとりあえず私の家に入れよ」

「ああ、うん」

中に入ったら本がいっぱい散らばっていた。

「なんだこれ？本か？」

ぶつといなこの本…魔理沙ってこんな読むんだ。

「本というか魔道書？かな」

「へえ、買ったの？」

「いや、私が作った」

飲み物をだしてくれた

「お、さんきゅ。自分で作ったって？」

「んーなんとというか色々研究して失敗しても成功してもそこに書き込んだだけだな」

魔理沙ってそんなことするんだー！

俺は普段神社でひなたぼっこするか霊夢と話すか里に下りるかだけの生活だったから

新しいことを知れたのかもしれない。

それから色んなところを回ってみた。楽しい1日であった。

「今日は楽しかったぜ、魔理沙」

「おう、それはいいけど。道分かるのか？」

「分からないけど」

と自信満々にいっつ。

「それは張るといっつじゃないぜ隼」

流石の魔理沙も苦笑する。

「じゃあ送っていくぜ」

「ありがとう」

出口まで連れて行ってもらった、あと帰り道を教えてもらって無事に帰った。

第10話「霧の湖」

魔理沙と魔法の森にいつてからまた1カ月が経った。

今は、神社の縁側で霊夢と会話している。

「なあ、やけに暑くないか？」

「そう？ 私はそう暑くは感じないけど」

「霊夢は服装的に暑くなさそうじゃん」

「隼…その服装はね」

と霊夢も苦笑するしかない。

なぜなら、俺は大半が長袖と七分ズボンという格好をしているからだ、理由？ 気分かな

「んーそう言われてもなあ…半袖あったっけか」

俺がうんうん唸りながら考えていると魔理沙がやってきた。

「よっ、霊夢。相変わらず夏は暑いねえ」

「あら、魔理沙いらっしやい。そうね夏は特にね」

そっぴいこっぴいも霊夢は涼しげにしている。

「いいよな、その巫女の服。涼しそうだが」

魔理沙はなんか目をキラキラ輝かせて霊夢をみている。

「はあ魔理沙ってそういうときだけ人を敬つ目でみるわね」

「いいじゃないか、別に。なあ？隼」

「ん？ああ、そうだな」

「隼の服装見てたらこっちが暑くなりそうだぜ」

「そうか？ちょい服探してこようかな、やっぱり衣替えてやつか」

といい俺は中に入っていく。

「なあ、霊夢。暇なんだし弾幕ごっこしようぜ」

「嫌よ、こんな炎天下にでるなんて」

「はあ？なんだそれ。っじゃ隼に相手してもらおうかな？」

「隼も嫌がるんじゃない？」

「流石にそれはないぜ！今日こそリベンジするんだからな」

「へえ、応援してるわ魔理沙」

期待してないけどね といった顔で台詞を言う。

「おう、今日こそは隼に勝つ」

魔理沙はグッと手に力を込め気合いばっちりなようだ

「俺がなんだって？魔理沙」

「ん？おおなんか涼しそうになったな隼」

「ああ、なんとかね」

俺はそういつてまた座る。

「魔理沙がね、隼と戦いたいっていうのよ、やるの？」

「ああ、別にいいけど新しいスペ力使いたかったからな丁度やらせ
もらおう」

「じゃあ、私が勝ったらなんか隼奢れよな！」

「はあ？なんでそうなんだよ、まあいいけど

じゃあ俺が勝ったら涼しい場所紹介しろよ」

「じゃあ交渉成立だな。じゃいくぜ」

といつて箒に跨り空に飛び始める。

「じゃあ、いっちょやりますか」

といつて俺は刀を取り出し戦闘態勢に入る。

それを窺った魔理沙は弾幕を放ち始める、前より弾幕が厚くなつて
気がするんだが、気のせいだろう。

「隼！もつとガツツリ攻めてもいいんだぜ？」

「言われなくてもそうするよ」

「幻影『影の2刀流』」

「またそれかよ、正直それ辛いんだぜ」

「じゃあ、いきますか」

「神技『神剣一閃』！」

「この技は雷光一閃斬りの弾幕を更に厚くしたもので更に避けにくく考えたスペカである。」

「くっ、流石に辛いぜ」

「恋符『マスタースパーク』！」

弾幕に弾幕をあてる気が、そうはさせぬ。

「神技『ファスト・ライジング』」

俺はマスパ目掛けて突っ込んで、それを斬る。

「いやあ、弾幕斬る時って超楽しいんだけど!!他の人には味わえない楽しみ方だね、これ。」

「?!また斬られちゃったぜ、だが今回の私はそれじゃあ終わらないぜ」

「?まだなんかあるのか」

「まっ見てるって」

と喋ってまた弾幕を放ち始める。

俺はそれを避けつつ、魔理沙との距離を測る。因みに、俺は飛べないので大体の移動が脚になる。

勿論弾幕ごっこのときもこっちは地上で応戦している
攻撃するときは魔理沙までカクカクシカジカで近くまでいき攻撃する。

「んー、あの技避けられるとは思わなかったな、まあファイクもなしに入れたらそんなものか」

「じゃあ、こっちからいくぜ」

魔理沙は宝物？の八卦炉を後ろにかざし八卦炉に溜まっていたやつを発射し、箒と魔理沙ごと突進してきた。

「?!猪かっつーのー当たって砕けろってやつか」

いきなりこられたので避ける大勢には入っていなかったなので、危ないかと思っただがまだ余裕を持っている。

「影技『幻の世界』」

「っ!!のわっ」

魔理沙は不意をついて突進したから必ず当たると思ってたのか知らんがなんか大勢を崩したようだ

「不意をつかれてもスペカ宣言くらい出来るっつーの」

「じゃあ、これはお土産な」

「氷技『アイス・エッジ』！」

俺は氷を纏った刀を振るう、弾幕の数は多く、しかもブーメランのように1回当たってもまた戻ってきてあたるといいう仕様です。

「うわぁ……！」

ドサンという音とともに魔理沙が落ちてきた。

「俺の勝ちだな、魔理沙」

「いててて…また負けたよ、畜生」

「じゃあ、約束通りお願いね」

「うう、しょうがないぜ」

「じゃあ、ちょっと魔理沙に案内してもらってくるから」

「分かったわ、いってらっしやい隼。魔理沙もまたね」

「ああ、またなんだぜ」

なあ、よく思うんだが箒と一緒に乗るってかなり抵抗あるっつーか、恥ずかしい…。

いや2回目なんだけどね？どっつも慣れない。

「それで魔理沙、何処にいくんだ？」

「魔法の森より少し奥くらいなんだぜ、というか私の家からすぐ後ろ
ぐらう。」

「へえ、そうなのか？」

「そういえば、前から聞きたかったんだが隼のあの神技ってなんだ？
神の力借りてるわけじゃないだろ？」

「ん？ああただの3種の神器ってやつだよ、俺が持つスペカで最強の
3種類を考えてるんだ。」

「じゃあ後1つは？」

「考え中。」

と素直にまだ決まっていなことを言う。

「じゃあ出来たら私に一番最初お披露目ってことでいいよな？」

「んー、どうだろう。まあ出来たらな。」

「楽しみにしてるぜ。」

とニクニク笑って返してくれた。

やっぱり普通にかわい……ゲフンゲフン

「お、着いたぜ。」

「なんだここ、湖？」

「湖以外に何だと思ったんだ？」

と話していると氷塊がいきなり飛んできた。

第1話「私のナイフを受け止められる？」

「お、着いたぜ」

「なんだここ、湖？」

「湖以外に何だと思っただ？」

と話していると氷塊がいきなり飛んできた！

「ちよっ魔理沙！前、前！」

「ん？えっ、なにあれ。」

ああ、もっとうすればいい

と、とりあえず刀を！

でも、魔理沙が前にいるから振れねえ、糞！頼む。俺たちを守ってくれ

するといきなり刀が光りだし、そして閃光を放った。

「のわっ、なんだいきなり」

光が収まり目を開けると飛んできていた氷塊が俺たちの方ではなく来た方に帰っている。

「は…？何が起ったんだ」

「隼なんだアレ！凄かったぞ、よく見えなかったけど！」

俺はポカーンと口を開けたまま、氷塊が飛んでいくのを見ている。すると遠くの方から「いたっ」という声が聞こえて俺はハッとすると、

「やべ、誰かに当たった？」

俺は魔理沙に声がしたところに行くように言うと、すぐに向った。

湖の近くに降りると声がしたところを探した。

「おーい、大丈夫かー？」

歩いてると何かに当たった気がする。

「ん？なんだ…、えんこいつ？」

「ああこいつか自称天才の妖精さんだよ」

「へー、自称…ね」

俺はクスッと笑った、すると

「誰だ、今笑ったやつ！あたいは本当に天才なんだぞ！」

「え？こいつ喋れんの？」

「そりゃ、喋れるだろ」

魔理沙とそんなことを話していた。

「この妖精さんは無視している、あたいの話を聞けー！」とかなんとか言っているが気にしない。

「チルノちゃん、何処？」

とまたなんか新たな声が聞こえてきた。

「んあ？あ君は？」

「あ、私ですか？私は大妖精と言います、チルノちゃんがまた迷惑をかけてしまいましたね」

「いや、いいよ全然気にしてないし」

「こっちの妖精はいい子だな。」

それにしてもこっちの氷の妖精は天才という名のバカだな、これは

「あ、俺は尾神隼。よろしくな」

「はい、宜しくお願ひします」

「そついや、魔理沙はさっきから何みてんだ？」

「ん？ああ、いやちょっとあの紅い館が気になってな」

「ああ、あれか。俺も正直気になってたんだ」

「いってみるか？」

「いいんじゃない？いってみようぜ」

また筈に跨ると大妖精とチルノに挨拶を済ませて出発した。

「珍しい建造物が建つてるとなんかワクワクすんだよな」

「俺もそうだよ」

「よっし、ついた。んじゃま探索しますか」

「だな、ていうか近くでみるともの凄くでかいよな、これ」

「まあ入ってみようや」

大きな扉を開け、中に入っていく。

「お邪魔しまーすって流石に廊下には誰もいないか」

「隼！何処行く？真っ直ぐ進む？」

「まあ、それでいいだろ」

廊下を歩いていく、ていうか本当に赤いものだからけど。でも内装はしっかりしてるなあ。

とが思いつつ歩いていく。

「うわぁ、でっかいな扉。神社にもこれくらいな派手さあってもいいのかな?」

「だな、よし行くか」

ゆっくり扉を開ける。

すると中にはメイド1匹、羽生えた奴が1匹、中国?が1匹、魔法使いが1匹。

「ん?貴方は誰?この紅魔館に何の用かしら」

とメイド服を着たのが聞いてくる。

「用はないね、ただの暇つぶし」

「なら帰って頂戴、今は忙しいの」

「おいおい来客に対して随分冷たいじゃないか」

「そうかしら?客に対してのおもてなしくらい出来るわよ?」

「そうかい、じゃあこの主は?」

「私だけど?」

と小さい羽が生えたお子様?が言った。

「え?お前?嘘、お子様じゃん」

「お子様じゃない、吸血鬼だ」

「へー。吸血鬼なのは分かったから次の質問」

「あの地下に続く道は何？」

全員の顔つきが変わったな、やっぱり何かあるのか

「……！あなた気付いてたのね、でも貴方が行ってどうかなる問題じゃないから」

「へえ、じゃあ何がいる？お前みたいな吸血鬼？人間？それとも物か」
「？」

「それを聞いてどうするの？」

「行ってみる、駄目か？」

んー、やっぱり相当ななんかがあるんだろうな。

まあ拘るけどな。

「じゃあ、「どうしよう誰か代表で出てきて弾幕」ってしよつね

これで俺が勝ったら地下に行く、俺が負けたら素直に帰るぞ。これ
どうしよっ」

「……………分かったわ、咲夜貴方が行きなさい」

ん？あのメイドか。

主は出てこないんだな、まあいつか。

「御意」

「さて、貴方は私のナイフを受け止められる？」

「じゃあ、お前は俺の刀を受け止められるかな？」

俺は刀を取り出し、メイド服のやつと視線が絡み合う。

「じゃあ、始めようか」

「そうね、始めましょう」

といたそばからナイフが投げてきた。

「え？嘘、あれって実物？当たったら痛いよね？ね？」

といつつも避ける。

そついや相手の能力ってなんだろう。

ていうか、ナイフの量が半端じゃないんだが、どこに隠し持ってた。

正直、当たると痛そうだから頑張って避けてるけど攻撃スピードが尋常じゃなく速い…。

「奇術『ミスディレクション』」

おお、なんかナイフが飛んできたと思ったら今度は相手が後ろに回ってナイフが飛んでくる。

瞬間移動か…？そんなの人間業じゃねえだろ、まあ幻想郷の民は皆そうだが。

「…つぶね、当たったら死んじゃうぞ？俺」

「知らないわよ、そんなの運のないやつがそうなるの」

「そうかい、そうかい」

相手の能力が分からないからこっちから攻撃のしようがないじゃないか。

んでもまあ、瞬間移動的なことしてるんだしまあそういう能力だったら攻撃の方法はある。

「んじゃまあ、ちょっとくら仕掛けてみますか」

第12話「…え？」

「ちょっとくら仕掛けてみますか」

俺は霊力弾を放ち始める、勿論当たらない。
ていうか、動きが速すぎる。

「これならどうだ？影技『幻の世界』！」

一瞬にして視界が暗くなるが暗くなるのは相手だけだ。

あ、使ったのはいいけど後のこと考えてなかったわ…。

まあ、いいけど。これで当たらなかったらほぼ能力確定だな。

「神技『神剣一閃』！」

2枚目のスペカを宣言をした。

「そんなほうからっ?!でも当たらないわよ」

やっぱり当たらないか、でも確定したな。

「なあ、瞬間移動出来るんだろ？お前」

「…ええ、そうね。瞬間移動のイリュージョン」

？さっきの間はなんだ、やっぱり瞬間移動じゃなくて時…とかか？
結局は人間業じゃないけどな…。

んー。あのスペカ以外相手に勝つ方法なさそうだなあ。

「じゃあちよっくら移動してもらいますか。」

「ちよっところここで使つとアレなんで移動してもらつわ」

「移動？」

「ああ、移動」

紫直伝60秒しかもたない無限空間方法

といつても霊力が多い奴はもつと時間保てるんだろうけど俺の霊力じゃ60秒が限界みたい。

「よっし、やるか」

俺は目を閉じて霊力を込める。

すると、何も無い空間が生まれた。

「…これは？」

「俺が霊力で作った空間60秒しか保てないからさっさと終わらせた
いんだ」

「私も舐められたものね」

「舐めてなんかないさ、さっさと地下の謎が知りたいだけ」

「そんなに知りたいの？」

「ああ、知りたいな1回気になったら分かるまで引かないんで」

「あら、そう。なら私も容赦しないわ」

「メイド秘技『殺人ドール』」

またもの凄い量のナイフだな。

でもま、この空間で出来るんだし、関係ないか。

「越技『獄焔の斬裂』!!」

俺の周りから炎が飛び散る、飛んできたナイフを全て溶かす。

そして相手ごと飲み込む。

「終わりだな」

「ええ、そうね。完全に私の負けだわ」

空間が元に戻る。

「ふう、疲れた」

「隼……どうだった？勝負は？」

と魔理沙が駆け寄ってくる

「ああ、勝ったよ」

「すみません、お嬢様負けてしまいました」

「しょうがないわね、貴方隼とかいったっけ？地下に行くのは許す」

「ありがと、で地下には何がいるの？」

「私の妹…フラン。フランドール・スカーレットがいる」

「で？何、俺はどうすればいいわけ？」

「出来れば、助けてほしい…。あの子を」

「ふーん、まあ出来ればやるけど無理だったらどうなる？」

「さあ、そこまでは分からないけど十中八九死ぬわ」

「あら？死ぬのは嫌だな。まあやってみるよ」

そう言うってから部屋から出ていってしまう。

「あ、そうだ。お前ら名前は？」

「私はレミリア、こっちのメイドが十六夜咲夜、そしてパチエ、最後に中g…紅美鈴」

「ありがとう、じゃあ行ってくるわ」

「魔理沙はここで待ってて、すぐ戻るから」

「ああ、分かったぜ絶対戻って来いよ…隼！」

魔理沙たちと別れて廊下を歩いている。

「ていうか、湖の時のこの刀の光はなんだったんだ…？」

そう考えてるとまた刀が光りだした。

「のわっ！なんだ？」

そして更に刀が光りパツとその光が解き放たれる。

「…!!」

強い光が襲いしばらく目を閉じるしかなかった。

光が納まり、目を開ける。

するとそこには一人の赤髪の女の子が立っていた。

「…え？君…誰？」

「会うのは初めてだね、私はこの刀に宿る魂…なんだけど今はこの通り人間なの、宜しくね」

と笑って返してくれた。いや普通に可愛いな…おい

「うん…宜しく。それは分かったけどなんでうちの制服？」

出てきたときから気になってたが、赤いプリーツスカートにセーラー服。

「これ？一番親近感沸くのはこの格好だったんだけど…似合ってる？
言い忘れてたけど普段はこの姿ですっというから宜しく」

普通に似合ってる困る。うん、普通にタイプだわ…

ってさっきなんつった？普段はこの姿ってことは人間として横に
いてくれるの？

やったね、俺の人生神懸かってるわ。

「あ、そういえば湖で起きたあれってなんなの？」

「ん？あれね、私の能力！というかこの刀のね」

「へえ、どんななのなの？」

「相手が放った非殺傷弾、殺傷弾、物理攻撃でもなんでも相手にお返し
出来るの」

とニコニコしながら説明してくれた。

「お返してその弾幕ごと？一部じゃなくて？」

「弾幕ごとだよ？因みにお返し出来るのは2倍か4倍か8倍でランダ
ムなの」

2か4か8倍？え…とんでもない子なんじゃない？可愛くて強い
とか…

頼りになりそうだなーりゃ

「でも私にも霊力の限界があるから使う回数は限られてるよ？」

「え？それもそうか。俺に使いこなせんのそんなの」

「大丈夫だよ、隼なら」

と励ましてくれる。

俺もう負けるしないっすわ、というわけで勝利への方程式を組み立ててくたしあ。

(だが断る！というのは嘘で主人公補正で勝てるよん)

「あ、カグツチ…でいいんだよね？これから何処に行くか分かってる」
「？」

「分かってるよ、あの地下でしょ？話は全部聞いてたもん」

「じゃあ、いじっか」

「うん…」

「それより戦闘のときはどうすんの？」

「ちゃんと刀に戻るよ？じゃないと隼戦えないじゃん」

名前の呼び捨て具合がまたよ…じゃなくてやっぱり戻るのね

「じゃあ、ちょっともう戻っていきなり襲われたりしたら困るから」

「分かった、じゃあまた後でね」

うんと返事したらすぐに入って行った。

「よっし、入るか」

とゆっくり扉を開ける。

すると一人の少女が立っていた。

「君がフランドール・スカーレット？」

「あなたは？」

「俺か？俺は尾神隼よろしくな」

「うん、よろしくね」

出ていくときに咲夜に言われたがどういふことだ？狂気って…。

まあ、深くは考えないでおこう。

第13話「抜剣」

「君がフランドール・スカーレット？」

「あなたは？」

「俺か？俺は尾神隼よろしくな」

「うん、よろしくね！」

普通の子だな…狂気か、まだ引つかかるけどとりあえず話してたら分かるかな？

「君は一人なの？」

「うん……」ここから出してもらえないの

「なんで？」

「壊しちゃうから…全部」

壊す…？狂気のことを言ってるのか？

前にも森で暴れてた妖怪がいたけど、自分でコントロール出来なくなるのか？

「じゃあ、俺と遊ぼうよ。これ知ってる？」

と1つの霊力弾を見せた。

「隼、それで遊んでくれるの？私やりたい！」

「ああ、いくらでも遊んでやる！来い」

「じゃあ、行くよ？壊シテアゲル」

とといったと同時に大量の弾幕が部屋中に覆っていた。

「おいおい…マジかよ、冗談きついで」

「アハハ、隼は壊レル？壊レナイ？」

「イクヨ？禁忌「恋ノ迷路」！」

途切れ途切れになった弾幕その通り迷路の弾幕だはられる

「くっそ、俺じゃあ避けるので精一杯で攻撃出来ねえ」

いきなりカグツチの力借りて後半に響くようなことはしたくない
しな。

「アレ？避ケラレチャッタ」

「今度は俺の番だ」

「幻影『影の2刀流』！」

と違って影が実体となった刀を持つ。

「アハハ面白い技だね、デモソレデースルノ？」

「禁忌「フォーオブアカインド」！」

フランが4体になった?!でもカグツチの力借りればどうにかなるかな。

と考えている間にも弾幕を放ってくる。

1体でも密度濃いのに4体となると避けようがないな。

「カグツチ力借りるぜ」

とって刀に力を込めると光を放ち、フランが放っていた弾幕がすべて消えた。

「隼、全然攻撃シナイ面白クナイ！」

「じゃあ、攻撃しようかな？」

といった後にぼそっと「リバーズ開始」と呟いた。

フランが放っていた弾幕が2倍の数で俺の裏からフランに向かって放たれる。

「エ？」

完全に不意をつかれたフランは動けないでいる。

「ア、危ナイ」

羽に弾幕が当たる。

「凄イ！凄イ！隼トヤルト本当ニ楽シイヨ！」

「そうか、それは良かった。」

「デモ私負ナイヨ？禁忌「レーヴァテイン」!!」

フランがもの凄く大きい大剣を持っている。

「アハハハ！壊レチャエー！」

「じゃあ俺も…剣技『慈悲の剣』クルターナ」

蒼く光大きな大剣を俺は持つ。

レーヴァテインと慈悲の剣がぶつかりあう。

「ヤバい力負けする……………うおっ」

と俺はぶっ飛ばされ壁にぶつかる。

「かはっ……………」

「アレ？モウ壊レタノ？マアイイヤ」

と言ってレーヴァテイン振り下ろす。

ヤバい動けねえ、衝撃が強すぎる……………。意識がもつもたない。

くそ、約束したのに絶対戻るって。フランの正気も取り戻して助けるって…言ったのだ。

(…と……やと……隼！)

この声…カゲツチ？

(聞こえる？貴方なら出来る、私がレーヴァテインを能力で抑え込むから隼はフランちゃんを正気に戻して)

俺がフランを救う。

「封禁『被剣』」

そうハッキリというそして慈悲の剣は消え、代わりに細長い剣を左手に持つ。

レーヴァテインは襲ってこない、多分右手に持ってる刀…カゲツチが抑えてくれたんだろう。

そして俺は気力を振り絞って立つ

「アレ、マタ消エチャッタ」

「デモQED』495年の波紋』！」

「遅い…な、神技『ファスト・ライジング』」

「はあッ」

と思いきり被剣をフランの体目掛けて刺す。

「あッ………」

という言葉を発して倒れた。

そして

「隼…ありが、とじ…」

「ああ、「ちちら」そ」

糞、ぶっ倒れそうだけど報告しなきゃな…。

フランを抱っこして扉を開ける。

「隼！勝ったね！」

いつの間に出てきたのか人間姿のカグツチがいた。

「ああ、多分目が覚める頃には狂気はなくなってると思うんだけど…」

と廊下に戻り歩いていく。

「大丈夫？隼、私が持とつか？」

とカグツチが心配してくれる。

「んあ、大丈夫だよ」

とやっとレミリアたちのいる部屋に戻ってきた。

そしてゆっくりフランを抱えながら扉を開ける。

部屋の中には、霊夢と魔理沙、そして紅魔館の人たち全員集まっていた。

「やっと戻ってきたわね」

と霊夢が声をかけてくれる。

「ああ」

「フラン…フランはっ?!」

とレミリアが声を荒げて駆け寄ってくる。

「ん？ああ、はい」

といつてレミリアに渡してあげる

「今は眠ってるけど起きたらもう狂気は出てこないはずだ、この剣に封じ込めたからな」

「そう…ありがとう、感謝するわ」

「…んっ、っしん」

「お？妹様がお目覚めのようだぞ」

「ええ、分かってる」

「…？お姉様？」

「ああ、フラン！」

「お姉様！」

良かったな、じゃあ俺らはさっさと去りますか。

「さようなら」

「分かってる、帰りましょつか。どうせ宴会開くことになるんだろっし」

「お、宴会か久しぶりな気もするな！」

と魔理沙が言う。

俺らが去ろうとすると、フランが

「隼！ありがとう、また来てくれるよね？」

「正気には戻ったな？勿論また遊びに来る、じゃあな」

「うん！またね」

と手を振ってくれた。

俺達は紅魔館を出て博麗神社へと戻ってきた。

「いやあ、疲れたぜ！久しぶりの異変だったからな」

「魔理沙は何もやってないじゃない」

「まあ、いいじゃんか異変解決したんだし」

「まあ、そうね」

「そうだな」

「なあ、隼さつきから気になってたんだがその子誰？」

「ん？カグツチのことか？」

「カグツチって刀の名前じゃ…？」

「えっとね、その刀に宿る精霊…的な？」

「隼、精霊的って酷くない？」

とカグツチが頬を膨らませ怒る。

「ああ、すまんすまん。そういうことだから普段はこの姿でいるだと
な」

「ていうかカグツチその服装からなんか替えようよ」

「えー？まあ、いいけど。隼女の子の服なんて持ってるの？」

「うん、あるよ」の異変が始まるちょっと前に紫がきて置いていったんだ」

本当についてこの前のことだ、俺が部屋でちょっと新聞読んでたらいきなり紫が来て

「私出番少ないからこれからのためにコレあげる！」といって服を置いて去って行ったのだ。

俺はこれからのため？出番？とか思っていたんだが服をそのままタンスに入れたんだ。

「ふーん、じゃあそれにしようとな隼の部屋にあるんだよね？」

「そうだけど」

「じゃあ着替えてくる！」

と行って中に入って行った。

「なあ、霊夢。あの調子だとカグツチもこの神社で寝泊まりしそうなんだが部屋…ある？」

「そんなのないわよ、だから隼と同じ部屋でいいんじゃない？」

「私もそれがいいと思うぜ」

「え…？」

「いや、え…？じゃなくて。同じ部屋でいいんじゃない？」

「ええええ、なんでそうなの？普通に考えたら霊夢の部屋じゃない

の？女子同士」

「私の部屋、隼の部屋より小さいのに2人もいれるわけないじゃない
隼の部屋なら広いしまだスペースあるでしょ？全然余裕じゃない
」？
「」

「あーもう分かったよ！そうしますよ、でも一応カグツチに聞いてか
らな！」

「んーでも聞いたところで結果は変わらないと思っけどなあ」

なんでこうなるんだ…いや、確かにあんな可愛い子と一緒にいられ
るのは勿論嬉しい。

でもな、女子と相部屋とか初めてだよ？妹とかいない俺には初めて
の経験なんだよ。

そこら辺を理解してもらいたいけど、霊夢にそれ以上言ったって通
じないから諦めるけどさ

「ほら帰って来たわよ」

「隼！どうこれ？似合ってる？」

緑色のパーカーにデニムのショートパンツの格好だった。

「ああ、うん」

ヤバイヤバイ普通に可愛い、いやあ本当にこんな子がいてくれてよ
かった。

もう相部屋のほづがむしろいいよ。

「なあカグツチ普段その格好でいるってことはこの神社で過ごすんだ

よね？

俺もここに泊めてもらってるし」

「うん、そうだよ」

「それは分かった、んで次、空いてる部屋ないんだよ」この神社どこの部屋に泊まる」

「隼の部屋に決まってるじゃん？」

何が決まってるんだよ…」。

「ほら、結果は変わんないって」

「あーはいはい、分かりましたよーだ。ていうかもう今夜宴会だろ？準備は？」

「ああっ!!忘れてた!隼これ買ってきて」

え?なにそのメモいつ書いたんだよ。

「ああ、宴会すっかり忘れてたぜ。じゃあ私は準備が…」

「魔理沙?今回はあんたも手伝いなさい」

「ひっ、は…はい」

「じゃあ、里までいってくるよ。カグツチも来る？」

「もち…」

「そういえば、宴会のことは皆に伝えなくていいのか？」

「文が新聞配つてると思うから大丈夫だと思うけど、結局は片づけは私だから嫌なのよね」

「霊夢、まさかそんなんで異変解決嫌とか言ったりしないよな？」

「大丈夫よ、異変解決くらいちゃんとやるわよ」

無事、異変を解決した隼たちは夜の宴会に向けて準備するのであった。

第14話「やっぱり宴会っていいものだな」

俺は今、宴会に向けての買い出しを霊夢に頼まれ、カゲツチと一緒に里まで来ている。

「ねえ、隼！何買うの？」

「んあ？ええつとね、酒…かな？」

「酒？お酒かー飲めるの？」

「そりゃ飲めるだろ、宴会なんだし」

「へえ、私は宴会出来るだけで十分だけどね」

「俺もだよ」

買い物が一通り終わり、神社に戻ると霊夢と魔理沙が急いで準備していた。

「おーい、戻ったぜ」

「あ、隼おかえり」

「頼まれたもん買ってきたけど、どうすればいい？」

「隼の腕に任せるわ、隼はその食材で何かを作って」

「……うーん、何かこれで？」

食材をみて考えるしかない。

「なあ、カグツチ？」

「何？料理なら手伝つよ？」

「マジで？つか出来んのか」

「料理くらい出来るよ、そりゃ」

「じゃあ手伝って、この大量の食材を使って料理作るから」

「分かった、じゃあ中に入って作る」

と行って俺たちは中に入っていく。

そしてたくさん料理を作り、並べる。

「こんなもんかな？」

「うん、そうだね！じゃあ持っていこっか」

「ああ、だな。カグツチありがとうな」

「うん！隼を手伝えることならするよ」

と笑っていつてくれた。

そして、料理を持って行く。

「おーい、霊夢出来たぞー」

「随分、かかったわね…って多いわね」

「お前があんなに材料買って来いって言うからだろ？」

「でも、私そんなに…まあ、いいわ並べて」

「もうそろそろ始まるんだろ？」

「ああ、そうだけ」

いつの間に来たのか魔理沙がいた。

「はあ、宴会の準備面倒だったが始まったらそんなのすぐに忘れちゃ
うぜ」

「魔理沙はサボってた罰よ」

「うるさいなあ、しょうがないだろ」

「まあまあそろそろ始まるから人来るのかどれくらい来るの？」

「大勢来るわ」

大勢って大雑把過ぎるだろ。

まあ、それほどの人数が来るってことだろう。

時間が経ち、人がぞろぞろとやってきた。

「おお、こりゃ盛り上がるな」

「なあ隼、紅魔館の連中もお見えだぜ、挨拶でもしてきたらどうだ？」

「ああ、そうだな行ってくる」

俺はレミリア達のほつに歩いていく。

「よっ、レミリア全員揃ってきたのか？」

「隼か、ええそうよ。それもあなたのおかげね」

「隼！こんばんわ」

「お、フランか相変わらず元気だな」

「うん！隼のおかげ全部！」

「ありがとな、じゃあ宴会楽しんでくれ」

「うん！バイバイ隼」

お、あそこには紫か。誰と話してるんだ？

「おーい、紫。何してんだ？」

「あら隼、いえちょっとね話してただけよ」

「誰と？」

「私だ、八雲藍という。尾神隼だな？紫様が世話になってるな」

「ん？ああ。じゃあ俺はいくぜ？楽しんで行けよ」

「ええ、そうさせてもらっわ」

次は大妖精とチルノが相変わらずハチャメチャにしてんな。

「よう楽しんでるか？」

「あ、隼さん。私達まで招待させてもらってありがとうございます」

「いやいいよ、楽しんでいけよな」

「はい、ありがとうございます」

チルノはなんか言ってるけど安定の無視。

「通り回ったし、俺も一緒に混ざるか。」

「あら隼、挨拶はしてきたの？」

「ああ、これで俺もゆっくり出来るかな」

「そうね、隼も楽しんでいってよね」

「そうだね、隼！宴会は楽しくやらなきゃ駄目だぜ」

「分かってるよ。でも皆が楽しそうだから十分かなあ」

皆はお酒飲んだり、はしゃいだりと楽しそうにしてる。

ていうか、俺も酒って飲んでいいのかな？ちよいと一口。

「あら隼、未成年はお酒飲んだらいけないのよ？」

といきなり紫が話しかけてきた。

「のわっ、紫かよ。てかなんで外のルール知ってたんだ」

「ふふ、まあいいんだけどねここは幻想郷だから」

「じゃあ、そういうこと言うなよな」

「いいじゃない、からかづくくらい」

「ほんと趣味悪いわ」

「それでもないわよ？じゃあ行くわよ」

「ん？もう帰るのか？もっと楽しんで行けよな」

「疲れたし、もういいのよ」

「そうか、じゃあまたな」

「ええ」

そついやカグツチは何処にいったかな。

一応、顔みせといたほうがいいよな

その前に何処だろ。

と歩きながら探す。

「あ…こんなところにいたのか」

カグツチは寝ていた、ていつか寝顔可愛いなあ。

はあ…しょうがねえな部屋に連れて行ってやる。

と俺はカグツチを抱っこする。

「やべ、俺まで眠たくなってきた」

部屋まで歩いていきと俺はカグツチを布団の中に入れてあげる。
寝転がったところと思い、カグツチの横で腕枕をする。

「本当に眠たくなってきた、俺も寝ようかな」

と一人で呟く。

もついいや、寝ちゃおう。

そして夜が明けた。

第15話「でも私、隼のこと」

宴会が終わり、朝を迎えた。

「ん…。んあ…朝か」

俺は目を開けて横をみると

カグツチが俺の腕を持って寝ていた。

ええええええええええええええええええ!!!

いやいやなんでええええええええええええ?!!

俺そついうの耐性無いから!! 止めて、死ぬ! 死ぬ!

しかもなんか…柔らかいものがかすかに触れているような気が…。
駄目だ! 考えるな気にしたら理性吹っ飛びそつだから!

「おーい、ラブラブバカップルさん早く起きてよね」

と霊夢の声が聞こえる。

「誰がラブラブバカップルだ! こつちは被害者だぞ!!」

「知らないわよ、一緒にくつつついて寝てるんだから」

「くつつついてきたのはカグツチだぜ? なんで俺に言うんだよ」

「あれ? 隼くんは女の子に責任を押し付けるのー? 最低ね」

え…。何あのキャラとても複雑な心境。

「おーいカグツチいい加減起きろよ朝なんだけど」

と俺は肩を揺する。

「ん…ん、ふああ…あ、おはよう隼」

「うん、おはようなんだけど。なんでくっついてるの？」

「え？駄目？」

「いや、駄目とかそういうんじゃないけど。俺らそういう関係？」

「そういう関係って？」

あー察しの悪い子キター！でもそれがいい（キリッ
って何言ってたんだか。

「だからさ？俺とカグツチ付き合ってる訳じゃないんだからさ？」

「じゃあ付き合ってればいいの？」

「んーそういう問題じゃないかな？」

「でも私、隼のこと好きだよ？」

「…え？」

告白…だよな、こね。

「ん？聞こえなかった？もう一回言っておげよっか？」

「いや！聞こえてた、聞こえてたから！俺のこと好きなんだよね？」

「うん、そうだよー！」

「んーいきなり言われてもなあ…」

「隼は私のこと嫌いななの？」

「うーん、確かに可愛いし嫌いじゃないけどさ」

「なら付き合って？」

「分かったよ、もう。どうせ嫌って言ったって引かないだろうから」

「やったあ！隼大好き！」

と言って抱きついてくる。

「のわっ、そういうのいきなりは止めようよ」

「止めないー！」

ちよっ、止め…ああ。吹っ飛ぶ！

耐えねえよおおお!!

「ちよっと、人様の家でイチヤイチャしないでよね」

とまた霊夢が来た。

「いや、あのその…」これは…」

「いいじゃん別に！私達付き合ってるんだよ？」

「へえ…そうなんだ、隼」

「えっと、あの…その」

「さっさと朝食食いなさいよラブラブバカップルさん」

「うっせえよ」

「じゃ、じゃっく」

はあ…結局こうなるのね、いやま予想してたけど。

「ねねね、隼！今日の朝食は？」

「霊夢が作ってくれてるんじゃない？」

「そっかあ、一緒に食べよっか」

「ああ、うん」

俺たちが台所に向かうと、朝食と何かが書かれた紙があった。

「あ、朝食は流石に普通だったか…良かった」

「ねえ、この手紙何？」

「ん？これか？ええと、なににな」

ラブバカップル隼へ。

里まで降りて、買い物宜しく。

私は用事があるから今日1日いません。

隼ご自慢の彼女さんでも連れていってきなさい。

霊夢

「んだ、この文。嫌がらせかよ」

「ん？これって隼とデートってこと？やったー！」

何をどつちやったらその解釈に繋がるんだよ…。

「んまあ、そついでにたしとつつか」

「ちつちと食って里にいつつか」

「うん、そうだね」

朝食を食べ終え、霊夢に言われた通り里まで買い物に出かけることにした。

「はあ、正直面倒だなこれ」

「えーいいじゃん、デートだよデート」

「違うでしょ」これは

「違うのー？」

と頬を膨らませ言ってくるのでその頬を突っついてやった。

「あ、そうそうカグツチ？ちょっと寄りたいたいところあるんだけどいい？」

「別にいいよ、急ぐことじゃないし」

「ありがとう、っじゃいっつか」

「…っひい」

神社を出てやっと里についた。

「ふう、やっとか結構道長いんだよな」

「ねえ、隼さつき言ってた寄りたるところって何処？」

「ああ、ついてきて」

カグツチと一緒に並んで歩いてると里の人たちに変な目でみられるんだが、怖い…。

カグツチ普通に可愛いからなあ、こんな平々凡々な奴と一緒にいら

そう思われるのもしょうがないかな。

「しっしょ」

「何にこ、団子屋？」

「そだね、この店の人とちょっと仲が良くてね里に来るときはいつでも挨拶してるんだ」

「へえ」

「まあついでに団子食ってくか」

「うん」

「じんちわー」

「いらっしゃーい、って隼くんかいらっしゃい」

「ども、今日もいつものお願いします」

「はいよ、ちょっと待っててね」

「仲良いつてあの人？」

「そうだけど、どうかしたの？」

「ううん、なんでもない」

「あ、隠し事するんだ」

「違うよ、気になっただけ」

「ふーん、まっいいけどねーん」

しばらく待って…。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

「ところで隼くん、その子誰だい？見かけない子だけど」

「ふあ？んとね、俺の…」「隼の彼女です！」

といきなりカグツチが言います。

「へえ、隼くんもこんな可愛い子見つけたねえ、若い子っていいわね」

「んーそうかな？あはは、おばさんも若い頃はそうだったでしょ？」

「あたしはそんな彼氏なんていたもんじゃないよ」

「本当ですか？」

「本当だよ、でも隼くんはモテそうだからねえ」

「ははは、それこそないですよ」

とそんなことを楽しく話す。

「あ、そうそう。おばさん俺をここで雇ってほしいんだけど駄目かな」
「？」

「駄目なんかじゃないよ、大歓迎だよ。隼くんいれば百人力だからね」

「ありがとうございます、次いつ来たらいいですかね？」

「隼くんが時間空いてるときで全然いいよ」

「ありがとうございます、じゃあ俺まだ予定あるんでいきますね」

「分かったよ、また来てね」

「はい、っじゃカグツチいこっか」

「あ、うん」

と俺たちは店を出る。

「あの人優しかったね」

「うん、まあね」

「あ、怒ってるっ？」

「怒ってなんかないよ、でも仲良いな…って」

「俺たちは仲良くないの？」

「仲良いと思っ」

「大丈夫だって俺はカグツチのこと好きだよ？」

「本当？」

「本当だよ、だから心配するなって」

と頭を撫でてやる。

「えへへ、嬉しい」

なんかやっとな俺の素直な気持ち伝えられたと思う。
分かってくれたかな…？

「じゃあ、さっさと買い物して帰るか」

「うん…」

いつもの元気取り戻したかな？

絶対、泣いてる顔とかみたくないもんな。

その後買い物を終えた俺たちは神社に帰った。

「霊夢がない1日って案外暇だな…」

第16話「嫌だ」

「あーなんもすることねえ…いつもなら霊夢と話してるんだけどなあ」

と縁側で寝転がりながらそう呟く。

「どしたの？隼」

とカグツチが聞いてくる。

「いやさ、なんか暇だなあって思ってた」

「うーん、そだね。何かやることあればいいんだけど」

「よっと、じゃあ出掛けようかなー？」

「ん？何処に？」

「森…かな？」

茸しかなかったら驚くかな？

俺も実際驚いたしね、茸しかないんだもの

「森？私知ってるところ？」

「さあ、俺も分かんないかなカグツチが知ってるかは」

「そなの？」

「いや、知らんよ。まあいつか」

「うん…」

と歩き始める。

毎回思うのだがこの階段長すぎる…。

飛べると楽なんだろうけどなあ

と思っていたらいきなりカグツチが腕をとってくっつき始めた。

「ちよっ、何すんの」

「いいじゃん、二人きりなんだし」

「そういう問題じゃないか？」

「隼…暖かい」

はっ？えっ、ちよっいきなりそんなこと言われたら俺の理性がもたないからマジで。

でも、可愛いから許す…

「カグツチって甘えん坊か？」

「えっ？ち、違うもん！隼が好きなだけ」

「ほんとか？いやだってさ告白してから一気に甘え始めたからさ」

「そ…そう？そんなことないよ？」

「ま、いいけどねん。可愛い妹だと思えばそれくらい普通だもんね」

「私が、隼の妹？」

「そもそもカグツチが付き合ってる人っていう見方でいたいんならそれでもいいけど」

「私は、隼がそばにいてくれるだけで十分…だから何処にも行かないでよっ」

「大丈夫だよ、心配するなっていつまでもそばにいてあげるし守ってあげる」

「本当？」

「ほんとだよ、俺は何処にも行かないしカグツチのそばにいる」

「隼大好き!!」

とまた抱きついてくる。

いきなりこられたので体勢を崩してしまっ。

「だからいきなりは止めよ、離れて？」

「嫌だ」

「分かった、離れなくていいから起きあがらせて」

と起きあがる。

「ねえね、隼まだまだ先なの？」

「……………」

「隼？」

「しっ、誰か居る」

「え？妖怪？」

「分かんない、そこにいるのは確かなんだけど」

「なんでそんなの分かるの？」

「勘って言ったら？」

「信じる！」

「あ、信じちゃうのね。まあいいか」

と頬をポリポリかく。

「ちょっとカグツチいい？」

「何が？」

「ちょっとこころみせてもらおう？」

と無理矢理抱っこする。

「え？ちょっと隼？」

「妖怪だったら襲われそうだからカグツチを抱っこしてるんだけど、恥ずかしい？」

「ううん、嬉しい」

「言っと思った」

と行って笑ってみせる。

いつみても可愛いなあ……っと今はそんな場合じゃなかった。

「誰だ！なんで隠れてる、出て来いよ」

「ああ、なんだばれてたのか……つまんね。まあ、顔見られたら殺すしかないだろ！」

は？人間？いや違う、妖怪か？

これってまた理性コントロール出来ないタイプの子ですか。

最近、増えてるよなあそういうの

「ねえ、あいつ……」の前のフランちゃんに似てる

「そうなんだよ、最近増えててね困ってるの。原因も分からんし」

「隼なら勝てるよね？」

「もち

前でもかなりヤバかったんだけどね。

でも今回の俺は一味違うんだな、これが

「ねえ、君の目的は？」

「目的？すまんが俺はそついつの考えない主義でね、生憎」

「そーかい、なら邪魔しないでくれるか？俺ら行きたいところあるんでね」

「いいや、そつはいかねえ。でもその娘寄こしたらお前に傷つけはしねえ」

だが寄こさない場合は力づくで奪う！」

といきなり襲いかかってきた。

はあ、結局これが…まあカグツチは渡さないけどねん。

でも前の奴より一段と動きが速い、妖怪も成長するんだね

「私、刀に戻るつか？あいつ危険そつだし…」

「あれ？俺、守るって言ってなかったっけ？こんな奴相手にカグツチの力借りてるようつじゃ

情けないからね」

「分かった、頑張つてね隼」

「ああ」

「さっきから」チャ」チャとつっせえな！殺すぞ！」

「そついつのいいわ、こい封禁」被剣」

そついつと細長く光る剣を持った。

そしてそのまま突っ込んできたからそれを避け、一回距離をとつ

た。

「神技『ファスト・ライジング』」

とすぐに距離をつめる。

「…なっ!!人間如きgg…」

だが最後まで言わせず、わざと被らせて

「消えろ」

と呟いた。

その瞬間、その妖怪は音もなく消え去った

「ふう、中々扱いやすいなこの剣も」

「一瞬すぎて面白くないよー、もっとドンパチやんないとー」

「そう言ったってこの剣なかったらかなり危ない相手なんだからむしろ一瞬で終わった事に

感謝してるわ」

「そっかなあ?今のだったらもうちょっと焦らしても面白いと思っただけだな」

「無茶言っちなよな、まあ終わったしさっさと引っか」

と抱っこしていたカグツチを降ろそうとするとそれを拒むようにくっついてくる。

「腕つかんでいいからさ、降りよ？ね？」

と言ったら素直に降りてくれたが、やっぱり腕をつかまれた。
まあ俺が言ったんだが…。

「そついえばさ、なんでカグツチって俺が刀とったときからなんで出てこなかったわけ？」

「んとね、分かんない」

「分かんないってどゆことよ？」

「んー、多分霊力の問題なのかな？分からないけど」

「そんなものなのか」

と色々な話をして魔法の森まで歩いた。

「やっとついたかー、歩いていくの初めてだから中々遠かったな」

「苺ばかりだけど…」

「そだね、魔法の森ってとこなの茸しかないのね」

「なんでここに来ようと思ったの？」

「暇だったから…かな？面白い奴がここ森に住んでてさいいことないか聞きに来たんだけ」

「へえ…じゃあそへ行いじよー」

「今から行くんだけど何も言っていなかったから居るかな？」

少し歩くと家が見えてきた。

「お、着いた着いたここだよ」

「なんか…ううん、なんでもない」

やっぱりそういう反応になるよな…。

あえて最初は突っ込まなかったが、何度みても思っちゃうわ、うん。

何が？って聞かれても言わないけどね。

「おーい、魔理沙いるかー？」

.....

「んーいないのかな？せつかく人が遊びに来るときはいないんだもんなー」

「しょうがないよ、誰にだって予定はあるもんね」

「まあ、そうだな。無駄足になっちゃうけど帰るか」

その後また歩いて神社まで帰った。

だが、まだ霊夢は帰っていないく二人で晩飯も食べた、霊夢の分も置いていてやった

そして時間も11時を回り…。

「まだ霊夢帰ってこないのかよ」

「みたいだね、じゃあもう先に寝ちゃおう？」

「そうだな、じゃあやすみ」

「うん、おやすみ」

と電気を消し、布団に入る。

……深夜1時頃。

「ただいまー」

と小声に声で言う。

「おかえり、随分遅いおかえりじゃねえか」

「隼…まだ起きてたのね、カグツチを一人にしとくなんて酷いんじゃない？」

「ちゃんと寝かせといたからいいさ」

「でなに？用があるの？」

「いいや、別にない。ただ心配になっただけさ」

「そう…、それは感謝するわ」

「んで、何で紅魔館にいた？それもこんな時間まで」

「あーあ、やっぱりバレてたのね。隼に隠し事が通じないことは知ってたつもりなんだけど」

「ごめんね生憎そういうのには鋭いで、んで？」

「ただレミリアに呼ばれたから行ってただけよ、それだけ」

「嘘だな」

「嘘じゃないわよ、話をしていただけ」

「そっか、別に話したくないなら無理には聞かない。飯置いといたから愈っつけよ」

「……ありがとう」

「おやすみ」

「おやすみ」

はあ、なんか最近ため息増えたかなあ…幸せが逃げる逃げるって。

ちっちと寝るかあ

第17話「私からの話は終わった」

カグツチと二人きりの1日を過ごした次の日。

「うーん、結局やることないと暇になるのか」

「あら？そのいい方だと今までが暇じゃなかったみたいないい方ね」

「だってそうだろ？異変とか疲れることやってたし、縁側ですっと光浴びてること出来なかったし」

「いつも思うけど隼って植物よね」

「へ？何故に」

「だって光を浴びるって完全に光合成じゃない」

と笑いながらいう。

「うーん、そうかな？」

「そうよ」

まあ、確かにな…授業サボって屋上でずっと寝てるってというのが俺の普段の生活だったからな…。

今では全然違う生活を過ごしてるわけだが、でもここに来てまだ1年も経ってないからな

「植物呼ばわりされたからな、木になって二酸化炭素じゃなくて酸素出しなさいってか？」

「そうそう、環境にいいじゃない？」

「あはは、バカにされてるようにしか思えねえ…」

とまあ、こんな感じで「うちに来てからやることなかったら霊夢と縁側で話してるわけだが

魔理沙がたまあに来てなんかしていく、というパターンしかないのね。

「ほんと、何かすることないかな？」

「紅魔館にでもいって本でも読んでければ？」

「あそこって本あんの？」

「あるわよ？なんかパチュリーっていたでしょ？そいつが図書館みたいにいっぱい本がある

場所があつてね、魔理沙が目を輝かせてキョロキョロしてたのよ

「へえ、いってみるか。じゃあこれいいこと教えてくれたお礼」

と五千円札をひらひらみせると一瞬にして奪われてしまった。

「おおっありがとう隼！もうあなた神様だわ」

「お…おっ…じゃあ行ってくるぜ」

「いってらっしゃいって言いたいけどカグツチは連れて行かないの？」

「あ…忘れてた、ていうかカグツチ何してんだろ。俺の部屋にいたいんだけど」

「呼んでこようか？」

「あ、ありがとう」

と霊夢が中に入って行ってすぐに戻ってきた。

「え？早くね？」

「いやそれがね、全部言いきる前に先に答えられちゃった」

「…それはしょうがないね」

と行ってたら早速、カグツチが出てきた。

「隼、どっかいくの？」

「うん、そうだけど」

「行く…」

「言っと思ったけど、出掛ける時の服装考えてよっ」

「あ…着替えてくる…」

と…いったらまた中に入って行った。

「なんかあの子ってちょっとおっちゃんおっちゃんいなと…るあるわね」

「まあな」

そういうのがいいんだよ！とか言ったら霊夢に痛い眼でみられるから言わないけど

普通に可愛いじゃん？そういうの

でもやっぱり俺の人生ってこっちに来てから開花したよね、実際恵まれていると思うし。

「隼ってなんであんなにカグツチと仲いいの？この前じゃない出会ったの」

「うーん、なんでだろうね俺にも分かんないや」

「刀としてだったら5ヶ月とか前じゃない、でもそれまでは出てこなかったんでしょ？」

「そうだけど、話してるうちに勝手に仲が良くなった…のかな？というか霊夢とだってそうだよ？」

「そうだったかしら？覚えてないわそんなこと」

「またまたあ、いい方が白々しいんだよん」

「あ、バレた？でもほんとよねえ話していると勝手に友達くらい関係になってるんだもの

不思議だわ、それこそ」

「そうだね、俺でも不思議だよつと？そろそろ来そう」

「なんで分かるの？」

「勘って言ったら？」

「信じるかもね、隼の場合」

「皆そう言っただね」

と話していると予想通り出てきた。

俺があげたパーカーとショートパンツ…やっぱり可愛いな。うん
うん

「よし、じゃあ行ってくるわ」

「うん、うん、うん」

神社を出て紅魔館にたどり着いた。

「結構長かったなー」

「そうだね、でもなんでここに来たの？」

「本…かな？あそここの主に話しておきたい事がある」

「へえ、隼いこ？」

「あ、うん」

廊下を歩いてレミリアがいるところについた。
門番にはちゃんと承諾いただきましたよ

「よっどぶどーも」

「…ん？ああ、隼か今日はどっいった用で？」

「話したい事がある、フランを除く全員を集めてくれ」

「フランだけ？何故」

「いいから、はやく」

「分かった、咲夜？」

「御意」

数分後紅魔館の全員が集められた。

「よし、揃ったな。じゃあ本題に入るうか」

「ええ、話してちょうだい？」

「その前に、フランだけ除いたってことは大体分かってるだろ？」

「まあ、でも聞かなくちゃいけないでしょ？」

「まあな、でその本題なんだがこの剣」

と被剣をとりだす。

「この剣はフランの狂気を閉じ込めてあるんだ、んで壊れたりしたら勿論狂気がまた戻っちまう」

でもこの剣を使わないと乗り越えれない場合もあると思うんだ、だからわざわざ頼みに来たんだ」

「ふうん、ならパチエに頼んだらどうにかなるんじゃない？」

「そうか、なら頼む。これはお前らにとっても大事なことだろ？」

「そうね、じゃあパチエよろしく」

「分かったわ、レミィ。じゃあその剣を貸してくれる？」

「どうぞ、話がさくさく進んで助かるぜ、じゃあ後は任せた」

といったら何も言わずにパチエリーは部屋をでていった。

「じゃあ、わざわざ来てくれたお礼にいいことを教えてあげる

でもこっちも条件、そこのカグツチって子はちよつと出てくれる
」？」

「私？なんで？」

「まあ、カグツチちよつと出てくれ、先に咲夜に頼んで図書館の方行つてて？」

「隼がそこまでいうなら分かった、はやく来てね？」

「ああ、分かった。んじゃ咲夜よろしく」

「しょうがないわね、まあいいわ」

そしてまた部屋から咲夜とカグツチがいなくなった。

「それじゃあ話しましょうか、あ美鈴あなたはまた見張りしてて」

「はい、分かりました」

と戻ってまた出ていく。

「んで？話というのは？」

「ちっきのカグツチって子のじいじ」

「やっぱりか」

大体、予想してたけどやっぱりかあ…どんな内容なんだろう
カグツチのことについてだからデカい話になるのかな？

「霊夢にも一応話したんだけど、霊夢は言ってくれなかったみたいだ

から私から言っわ」

「ふむ、昨日霊夢がここに来てたのはそれが理由か」

「そう、ではあなたは分からないと思うけどあの子かなりの霊力を持つてるの」

「え？それだけ？」

「いえ、まさか。その量がね霊夢の霊力とは比べ物にならないほど多いのよ」

「は？それってどういうこと…？」

「それだけじゃない、普通じゃありえないと思うのだけれど同時に魔力も持ち合わせてるの」

「…は？霊力と魔力どっちも持ってるってこと？」

「そうなるわね、量的には霊力のほうが多いのだけれど魔力も可笑しいくらい持ち合わせてるらしいの」

「…それで？」

「それで昨日、私とパチエと霊夢で話してたのよ、何か奥にとんでもないものが

眠ってるんじゃないか？って多分霊夢はそれを言ったらあなたが傷つくって考えたんでしょうね

だから…」

「言ってくれなかったと？」

「そう、まああんまり気にしてないようで」

「まあな、大体こんなことだろうとは予想していたからな」

「…もし暴れられたらどうするの？」

「止めるだけだけど？」

「どうやって？」

「どうやってって…普通に被剣を使って」

「ふうん、まあいいわ私からの話は終わった。ここから出る前にその被剣とあの子を連れて帰ってよ」

「分かってるよ、じゃあな」

糞…霊力と魔力を持ち合わせてるのは分かった、だがなんだ最後の暴れたらどうするって

ああ、気になるじゃねえか!!結局はレミリアに聞いてもその答えは教えてくれないだろうけど…

とりあえず、カグツチのところいくか…。

第18話「不思議なことって?」

…カグツチのところいくのはいいんだけど、場所分かんねえ。
レミリアに聞く? いや、それは恥ずかしいから止めよう。

「ああ、くそっ!!」

「どうしたの? いきなり叫んで」

と裏から声が聞こえる、声的に咲夜だろう。

「んあ? ああ、なんだ咲夜か」

「で? どうしたの?」

「いやさ、さっきカグツチ連れて行ってもらったじゃん? これから帰
るうと思ってるんだけど」

場所が分かんなくてさ」

「…ふふ、しつてきて」

「? あ、ああ」

図書館に移動する。

「はい、着いたわよ」

「おお、本当に本だけだなあ…いくつか借りてこようかな？」

「本だけって失礼ね、ちゃんとテーブルとかもあるわよ」

「…それだけだろ？というかカグツチは？」

「そんなにあの子のことが心配？私が閉じ込めたって言ったなら？」

「……変な冗談言うなよな」

「あはは、悪かったわ。多分妹様と遊んでると思うんだけど？」

「探すの面倒だな…おい、カグツチー帰るぞー」

「あ、隼！来てたんだ、帰るの？」

「うん、そうだけど。フランは？」

「んつとね、疲れたみたいだから部屋に連れて行ってあげた」

「そっか、でも帰るつつてもパチエリー次第なんだけど…まだかな？」

「それなら、みてきたら？奥の部屋にいるから」

「そっか、じゃあ行ってこようかな」

「何処に行くの？」

とまた違う声が聞こえてきた。

ていうか、さっきからなんだ咲夜といいカグツチといい裏から声かけるの流行ってんの？

まあ、流行らないし流行らせない。

「んお？パチエリーか、終わった？」

「ええ、ちゃんとお返しするわ、はい」

と被剣を渡された。

「さんきゅ、じゃあ帰るわ。世話になったな」

「あ、ちょっと待って。これ渡しとく」

と渡されたのが勾玉だった。

「？これ勾玉だよね、何故に」

「それは魔力の代わりに霊力を込めることによってちょっと不思議なことが起きるの」

「不思議なことって？」

「使ってからの楽しみってみてよ」

「そーですか、ありがとな」

と受け取ったら2つあった。

「ん？」一つあるんだけど」

「勿論、その子にもね」

とパチエリーの目が向いてるのはカグツチだった。

「カグツチに？」

「ええ、そうよ」

「ふーん、じゃあカグツチ。はい、これ」

「あ、ありがと。早速つけていい？」

「うん、いいんじゃない？」

と口いたらカグツチは勾玉をつけはじめた。
言い忘れてたが、紐がつけられており首にかけれるようになっている。

「よし、じゃあ今度こそ帰るわ」

「分かったわ、またいつでも来てね」

「ああ、じゃあ」

と挨拶を交わしてから紅魔館をでた。

「これ隼とお揃いなんだよねっ」

「そうだけど？それがどうしたの？」

「ううん、隼と一緒にのものがつければ嬉しいなって思って」

「そっか、良かったな」

「ひん…」

と戻ったらまた抱きついてくる。

「ひおわっ、だからいきなりは止めてって」

「ううのー…」

はあ…しょうがないな、帰るまで離してくれそうにないし、ちっせと帰るか。

そして博麗神社（笑）へと帰っていった。

（ちょっと、後でたっぽん神社裏来いよ）

（この後予定あるんで「遠慮させていただきますーすー！）

第19話「急ぐと禿げるわよ？」

紅魔館へ行き、パチエリーから不思議な勾玉を買った次の日。

「うーん、これってどんな効果あるんだろ、気になるなあ……」

「じゃあ、試してみればいいんじゃない？」

と横にいた霊夢に言われる。

「まあそれが一番いいんだけども、ここぞっていう時に使ったほうが面白みがあるじゃん？」

「隼らしいわね、確かにそのほうが面白いかもね」

「だよな、ところでさっきからカグツチ何食ってた？」

「ん？境界の妖怪がくれたパン」

とカグツチが口に頬張ってるのは本当に普通のパンだった。

「何故に……」

「紫のことだから中になんか入ってたりしてねー」

と霊夢が言ってくる。

「バカ言つなよな、何も入ってないだろ多分」

「ふう、美味しかったー！隼にもあげればよかった」

「なあ、何も入ってなかったよな？」

「んー、チヨコ…かな？分からないけどとても甘かったよ？」

「チヨコか、紫にしては普通だったな」

「にしては余計よ、隼」

と何処からともなく声が聞こえてきた。
噂をすればなんとやらですわ

「紫か、盗み聞きとは感心しないな」

「ちょっとお、隼が大好きなカグツチちゃんに食べ物あげたのに、感謝しなさいよね」

「隼が大好きなは余計だ」

「え？好きじゃないの？カグツチのこと」

「ぐっ…」

くそお、いきなり変なこと言いだしやがって…。
ムカつくー！

「完全論破ね、まあ今日はそんなこと話に来たんじゃなくて」

「へ？じゃあさっさと本題に入れよ」

「急ぐと禿げるわよ？」

……ああ、「じいじまとも」に話すと疲れるわやっほ。

「はいはい、急がないから話してね紫さん」

「んーでも色々話すことあるのよね、何から話そうかしら」

「じゃあー番重要そうな話から」

「うん、じゃあ隼。あなたは今日里の鍛冶屋にいきなさい」

「え？鍛冶屋に？」

「そうそう、何でも隼に話があるらしいからね」

「ふうん、んじゃま行ってみますか」

「勿論、隼が大好きカグツチちゃんもね」

「あーはいはい」

ていつか最近色々出掛けすぎだよな

1日、2日ずっと休ませてくれてもいいんじゃない？

「じゃあそのほかの話は里から帰ってからね」

「あいよ、じゃあ行ってくるわ」

「ええ、行ってらっしゃい」

と挨拶を交わし里へ向う。

「それより話ってなんなんだろう、気になるな」

「やっぱり刀に関する事なんじゃないの？それ以外に話なんて」

「だよな、やっぱり刀のことか、まあ悪い話じゃなかったらいいかな」
「？」

「うーん、でもなんだろうね本当に」

「それも行ってみないと分からないからなあ、飛べたらもつと早くいけるんだろっけ」

「そっか、隼って飛べないんだっけ。だからいつも徒歩なんだ」

「今更言うことが、俺は普通の人間だぜ？飛べるわけねえっつーの」

飛べたら昨日の紅魔館行くときだって飛んでるよ…。

霊夢とか魔理沙は自由に飛べるからさいいよな、正直羨ましい

「この世界にいる時点で普通じゃない気がするんだけど…」

「それ言ったら駄目だよ、でも普通に死ぬるかも知れないのに」

「そうだね、でもちよっとした怪我なら私治せるけどね」

「え？マジで」

「うん、まあ骨とかは無理だけどね。そこは素直に病院なり行ってもらわないよ」

「だよ、切り傷くらいなら簡単に出来るんでしょ？」

「うん、10秒もかからないんじゃないかな」

「へえ、何それすっげえ便利じゃん」

何か関係ないんだけど、普通に真面目な話しているとカグツチってあんまり甘えてこないのか

面白いねやっぱり、可愛いのは変わらないけどー

「じゃあ、あつちと里に行きますかー」

「うん、だねー」

と二人は里にある鍛冶屋まで向うのであった。

第20話「ああ、そのことだが

「……………」

「用件は伝えましたよ、それでは」

「……………」

俺は今鍛冶屋に向かっている。

何故？紫に言われたからだ、そしてなんでか知らんがカグツチも同行するように言われた。

理由は知らんがな、とりあえず刀に関してのことだろうと予想はしている。

「ねえ、隼ー。まだつかないの？」

「ん？もうそろそろだけど」

紅魔館行くときはこんな文句は言わなかったんだけど…行く場所によるのか？

「よし、ついた」

「なんか古臭いね、」

「そういついと言っなって、じゃ入るぞ？」

「うん」

と入ろうとすると一人の男性が鍛冶屋の中から出てきた。

「…おっと、失礼」

「あ、すみません」

とすれちがうときにその男性がぼそつと呟いた。

(彼女には気をつけたほうがいいですよ…なんせ危険ですから)

「…?!」

「では、またいつか」

「何さっきの人、隼の知り合い？」

「いいや、知らないよ」

「そっか、それよりもさっさと用件済まして帰ろうよー!」

「分かった、分かった。じゃ今度こそ入ろうか」

「…ふふ、彼が尾神隼くんですか、面白そうな子ですね…ちょっと様子見しますか」

「どうした? いいことでもあったか?」

「いや、何も…」

とその男はいつつも口元が緩む。

「なーんか、そういうところがお前よく分かんねえわ、やっばり」

「そうですか？そのうち分かりますよ」

「へーへー、そうかよ」

「どーも、またまたお久しぶりです」

「お、やっと来たか。久しぶりだな」

「そういえば、さっき出てった人、知り合いですか？」

「会ったのか、まあちょっとな」

あんな表情読めない人と知り合いなのか…面白いな。

「それで、紫を跨いで俺に用ってのはなんですか？」

「ああ、そのことだがどうせ暇だろう？この際だ剣術でも叩きこんでやるつか？」

「んー、剣術つっても俺は弾幕ごっこしかやらないしな」

「それはそうなんだが、俺も暇してるんでな」

「いいんじゃない？隼！やるつよそれ」

「えー？本当に言ってるの？まあいいけどさ」

「おっと忘れるところだった、ちよいと刀見せてくれ」

「え？あ、はい」

と行って俺は手を前に出し、刀をとりだす。

「カグツチ」

と俺が刀を渡すと下を向き考え始めた。

「…何故、この刀の霊力とその子の霊力で反応し合ってる」

「え？その子ってカグツチのことっすか？」

「ほう…カグツチというのが、理由を聞かせてもらおうか？」

「まあ、後々話そうとは思ってたんですけどね」

「…立ち話もなんだから奥に行って座って話そうか」

「はい、お邪魔します」

と奥に行く。

「…さび、さびの話だが」

「分かっています。カグツチがでてきたのは紅魔館に行つてその途中に出てきたんです」

「ふむ、でもいきなり何故」

「それは俺にも分かりません……カグツチはその時のこと分かるか」
「？」

「んーでも私もよく分からなかったんだよね、その時は危なかったから勝手に隼を守らなきゃって

思つて」

「だそうですよ」

「…それは多分、霊力の問題じゃなくてその子の意思が強くなりすぎたんだな」

意思つて…：そんなにか。カグツチは霊力だつて言つてたけど。

やっぱり何か隠してんのかな？

そこを深く追い求めてもまだ無駄だからな

「なるほど、だから人間の姿と行き来出来るわけだ…」

「行き来まで出来るのか？」

「まあ、はい。これは俺がどうとかじゃなくて彼女自身で」

「そうか、じゃあ尚更だな。この話はもう終わりだ、ついて来い」

「？さっきの剣術のことですか？」

「まあな、じゃあ早速行きたいんだが、その子はどつするんだ？」

「カグツチどつする？神社まで帰るか？」

「ううん、ここにいる」

「そっか、なら待っててくれ」

「いいだろう、どつせ3、4時間程度で終わる」

「え？そんなに短くていいんすか？」

「それは1日やる分の時間に決まってるだろう」

「で、ですよね。甘く考えた俺がバカだった。
相当ハードだよな…絶対。

普段はおっちゃん結構冷静そうに話してるけど、戦うことに関連する事は結構五月蠅そう。

なんつーか、ギャップ？ちょっと違うかな？

「それじゃ、行くぞ」

「はい、じゃあちょっとの間だけの辛抱だカグツチ」

「うん、いつてらっしやい」

と言ったら、おっちゃんが何やら剣を持ち、力を込め始めた。
少し、すると変な空間が出来た。

「じおっ、すっげなんだ」

「…ただの空間だよ、これから毎日ここで鍛えてやる」

今思ったけど、動けんのか…？おっちゃんって

こんなところ用意するってことは結構派手にやるよな…絶対。

「へえ…大変なことになりそう」

「まあ、そうだな」

と言って中に入って行ったので、俺はその後を追いかけていった。

第21話「霊夢、朝食二人分宜しくね」

剣術を教わり始めてから、約2ヶ月が経ったある日…。

「うーん…これって本当に身についたと言えるのだろうか？」

「ふあにがー？」

霊夢だ、俺が作った団子を頬張りながら言ってきた。

「喋るか食つかどっちかにしろよな、下品だ」

「……あー美味しかった、それで何が？」

「剣術のことだよ、あれから2ヶ月くらい経ったっけ？おっちゃんに聞いてもなーんも

教えてくれないからさ」

「んーそう言われてもねえ…他に言われたことはないのー？」

「えとね、この剣術を使いこなすには特別な剣が必要って言われたよ
うな気がしなくもない」

「何その曖昧な感じは…もうちょっとハッキリしないの？」

「ていうか、霊夢はおっちゃんと昔からの仲なんだろ？なんか言ってくれよ」

「それは無理なお願いね、あの人は絶対に教えてくれない時は教えてくれないから」

「えー…俺これからどうすりゃいいの？また明日行かんなんのだから…」

「とりあえず終わるまでの辛抱ね、じゃないと何も分かりやしないうわよっ。」

本当にそんなものか…ていうか、いつまで剣術習い続ければいいんだろ

終わりが見えないって言ったたら大きくなりすぎだけど…いや予想外に辛いからなあ。

どうなんだろ、この先心配だな

「そうだなあ、じゃあそろそろ寝るかな」

「そうそう寝なさいさつさと、愛しい彼女さんが待ってるわよ？」

「それ前々から思ってたんだが、嫌がらせか？」

「別に？そんなことは一切思ってますが」

「あーそうかよ、じゃあやすみ」

「おやすみ」

と挨拶を交わし、隼は自分の部屋まで戻って行った。

「はあ…相変わらず人のところに入り込んでくるんだな、困ったな起こすのも失礼だしな」

んーどうする…選択肢はいくつかあるんだが実行するには勇気が

いる。

でもな自分の布団に返してあげるのが一番いい考えたと思うんだ
が

「よし、自分の布団にちゃんと入ってもらおう」

今、思ったけど…あっちにいた頃そんな女の子と関わりを持ってい
なかった印象が強く

とても女の子と話したりするのは抵抗あるんだけど意識しなければ
さうでもないという不思議人間

「よし、これでいいか。もう疲れた寝よう…」

翌日。

「ふああ…もう朝か」

最近、寝るのが遅くてやばいな。今日も行かなきゃならんのに…
ん？そういえばカグツチは今日いかないのかな？

「あ、いない…どこいったし」

とりあえず、朝飯を食わなければいけんな。
誰がいるかな？

「あら、隼おはよう」

「ん？おはようだけど、カグツチは？」

「え？いないけど、一緒に寝てたんじゃないの？」

「いや、起きたらいなくてさ何処いったんだろ」

「そうね、どうしようかしら」

「俺、探してこようかな」

「朝食はどうするの？」

「後で食う」

んー勢いそのまま飛び出てきたけど、行きそうな場所がないな…。

「あ、隼！おはよう」

と何処からか声が聞こえる。

「え？カグツチ？何処よ」

「上だよ、上」

上？まさか屋根にでも登ってるわけではなからうに

「…？」

と90度グルっと方向を変えると予想的中というか屋根にいるカグツチを見つけた。

「え、なんでそんなところにいるの？」

「んとね、ちょっと今日早く起きちゃってさ、隼起「すわけにもいかな
いし

暇だったからここに登って時間潰してたの」

「…、どうやって登ったんだそ」。

でもいいかもそ、縁側に続く新たな日向ぼっこする場所2号

「うん、それは分かったから朝食食べよ」。

「うん！今行く！」

「んっどうやって降りんだ？」

「え？こっやって」

へ、飛んでる…あ俺ずっと飛べない子だと思ってた。
飛べない勢一人になりました、わーパチパチ

「カグツチって飛べるっけ？」

「言っただけでなかったっけ？」

と首を傾げる。

皆飛べちゃうなんてずるいよ、俺も飛びたい！

誰か俺に飛べる何かを用意してください。

「まあ、いいや。中に入ろっか」

「うん、そだね」

なんか今日はいつも以上にニコニコしてんな…気のせいかな？

まあ、楽しそうなのはいいんだけど…

中に入る。

「霊夢、朝食二人分宜しくね」

と俺が声をかけてから気の無い返事が返ってきた。

「はあ…なんでこの家の主がこき使われてんのよ、普通立場的には反対なんだけど」

「五月蠅くしない、文句を言わない、さっさとやる。これこれからの3ヶ条ね」

「何その嫌な3ヶ条絶対を守りたくないんだけど」

「いいんじゃない？それ面白そうじゃない」

「カグツチねー意味分かってそれ言ってるなら本気で殴りたい」

「分かってなかったら言ってますんよ、霊夢さん」

とニコニコしながら言っている。

案外、Sキヤ「…いや流石にねえアハハハ

」よし、ちょっと一回表に出なさい」

「私に勝てると思ってるんですか？」

「「え…？」」

と霊夢と隼の声が綺麗に重なり合った。

「なーんてね、冗談、冗談」

…いや、今のは本気が冗談か分からなかった。恐ろしや

朝飯モグモグなう。

「ふう、ごちそうさまでした。じゃあまた今日もいってくつから

「分かったわ、いってらっしゃい隼」

「おう、行ってきます」

とまた剣術を習う日々が続くのであった。

第22話「じゃあ隣にいてあげる」

「こんちわー」

「ん？お、やっと来たか。じゃあ早速やるか」

「はい、お願いします」

「といつも通りの空間に行く。」

「今日は実戦形式でやるか」

「分かりました」

「今日はいないみたいだな、何を使うんだ？」

「そうですね…じゃあこうします」

「とって俺は左手をかざす」

『『慈悲の剣』…短く鋭い短剣となれ』

慈悲の剣は元々大剣だけどこれは自分で作ったものコントロール
することで形を変えてみたり。

「ふむ、大分上手く使いこなせるようになったみたいだな」

「はい、おかげさまで。自分は持つなら軽いものがいいですからね」

「じゃあいくぞ」

と言ったと同時に踏み込んで隼のほうに向かってくる。

「…ふっふ」

とそれを受け流す。

すると、すぐに後方に下がった。

「中々やるようになったな…でもまだまだだな」

「へっへっ、これだけだと思われちゃ困りますね。今度はこちらから行きますよっ」

すぐに空いた距離を縮め斬りかかる。

「はあっ！」

力を込め全力で振るっ。

「…無駄な動作が多い、これでは俺に勝てんぞ、はっ！」

攻撃を受け止めたら、刀に霊力を込める。

(何をやる気だ…？油断はしちゃいけないけどまともに戦うのは初めてだからな)

「この刀を受け止められるか？」

霊力が込められた紅く煌めく刀が振り落とされる。

「…くっ、ぐあっ…」

慈悲の剣で受け止めにかかったが軽く飛ばされる。

「はあ…はあ…え？嘘だろ」

剣を持っていた血が真っ赤に染まっていた

「ほお、まさか血を流すだけで済むとはな…だがこれ以上やると危険だぞ、まだやるか？」

「いえ…まだやります」

「左手は使えるのか？」

「はい、まだなんとか出来ます」

「なら容赦はせんぞ…早く立て」

ゆっくりと立ちあがるとまた戦闘態勢に入る。

「じゃあいきますよっ？」

「ふん、どこからでも来い」

…またやり始めてから10分程経過し決着がついた。

「はぁ…はぁ…も、う…駄目…だ」

とそこで意識が途絶えた。

「よくあれから30分もよく耐え抜いたな…もう既に超えてるかも知れないな…」

あの刀が託せそうだ…じゃあ、神社まで送っというてやるか」

と隼を抱え、神社までの空間を繋げた。

…博麗神社…

「ちゅっ、ちゅっ…」

「お、丁度いいところに来た。ちょっと隼寝かせてやってくれ、心配しなくていいからな」

「ただ気を失ってるだけだ」

「え…？それは分かったけど何してたの？」

「何って…実践形式でちょっとやってたんだそれがどうかしたか？」

「まさか本気で戦ってないでしょうね？」

「当たり前だろう、本気でやってたら今頃あいつは生きていない」

「どこまで力使ったの？」

「靈力込めると」「…」「やりすぎ」

「まあ、いいだろ。とりあえず隼に落ちついたらまた来いって伝えといてくれ話がある…」とな

「あれ…渡すの？」

「まあな、もうあいつは十分戦えるし靈力も使いこなせる…俺から教えることもない」

「そうね。あなたも越えてるんじゃない？」

「それならば負けてられんな…」

「若者に対抗心張ったら駄目でしょ」

と苦笑する。

「それよりも早く布団まで運んでやったらどうだ？風邪引いたらいけないからな

いい姉になりたいんだろ？」

「そうね…なれたら、ね」

「頑張れよ、じゃまた」

「ええ、さよなら」

と挨拶を交わすと鍛冶屋まで帰って行った。

「誰か来てたの？」

「カグツチ…どうしたの？」

「ううん、誰か来たみたいだったから」

「なんでもない、さっ早く入りましょ寒いでしょ？」

「うん、それはいいけど隼どうかしたの？」

「大丈夫、疲れてるだけよ。昼食済ませちゃいましょ」

「うん、今日はもう隼どこかに行かない？」

「ええ」

「じゃあ隣にいてあげる」

「それだったら隼も安心して寝てられるわね」

「うん、そうだね！でも霊夢さんも一緒にいたげて？」

「そうね…今日くらいはそばにいてあげようかな」

（ちょっとした時間だけどこかで恩返し出来たらいいかな…？）

第23話「もう笑っちゃうでしょ」

「…ふああ、朝か」

「朝かじゃないわよ、あんた丸二日眠りっぱなしだったんだから」

「え…？嘘」

「まあ寝てる側としては信じられないわよね、それに飲まず食わずじゃ死んじゃうわよ？」

「そうだったんだ…」

「最初はカグツチがずっとそばにいたんだけど途中で一緒に寝だしてね、もう笑っちゃうでしょ」

と笑いながら言う。

「…そうだね」

と横で寝ているカグツチの頭を撫でてやる。

「とりあえずなんか食わなきゃ死にそう…」

「じゃあ、ちょっと用意するから待ってて」

「お、珍しく優しいじゃん。ちょっとは心配してくれるんだ」

「そうかもね」

と言い部屋を出ていった。

「うーん、動いてなかったから体固くなったかな？無理に動かすのもあれだしな…」

「…すう、…すう」

しかし、本当に気持ちよそそつに寝てるな。

用意してくれるまで横にいようかな？

そういえば、前にもこんなあったっけ？

こんなことしてたらまた霊夢に言われそうだけど…まあいいや

「まーた変態染みたことしてるし…あほ？」

「誰があほだ！」

「五月蠅くしない、これ3ヶ条でしょ？」

「ぐっ…」

「あはは、やっぱり隼って面白いわね。まあ用意出来たから行きましょ」

「<い<い>」

「あ、そういえば鍛冶屋のが落ちついたら来いってさ渡したいものが

あるだとか」

「ふーん、じゃあ行ってみますか」

渡したいもの…？なんだろう、この前言ってたアレかなあ？

「すぐに行けってことじゃないわよ？疲れくらいとらないと」

「そうなんだけど、渡すもの気になるしな」

「それよりも二日ぶりの朝食はどうかしら？」

「あー、うん。普通に美味しいよ、ありがとう」

「どういたしまして」

「んー、でもやっぱ鍛冶屋に今日行くのかな？」

「本当に大丈夫？」

「…心配症かつっの、お母さんか」

「あーあ、じゃあ心配して損した。もう好き勝手にしなさいよ」

「ごめんね、言い出したら途中で止めたくないんで」

「でも無茶はだめよ？」

「分かってるって、それとカグツチは連れてかないからそのままにしよこしめげん」

「了解、じゃあつちと食って行ってきなさい」

「ほいほーい」

それにしても今日の飯ほんとに美味しいな…。

二日間の上に達したか…ってなわけないか、元々普通に上手だったしね

「よう、しゅちそつちなままでした。じゃいってきます」

「はいはい、ほんと落ちつかないわね。いってらっしやい」

…移動中…

よし、着いた。

霊夢いわく二日寝てたんだから二日ぶり？いや、三日ぶりか？分かるん。

「いんちわー」

……………シーン……………

「ん？もしかしていないのかな、じゃお邪魔しまーす」

ほんとにいないのか？じゃあ出直そうかな。

あー、気になる!!けどいないならしょうがないもんな

「また明日になるか…帰ろっ」と

なんで今日ほんとにいないんだろ、いつもならそこに座ってるんだけど…。

一応、このことも霊夢に伝えといた方がよさそうかな？

第24話「どこかのサンタさんのおかげでね」

「……よっと」

ん。今日何日だっけ…？

23か、ということはアレがあるな。明日

「じゃあちゃんと用意してあげなくちゃな…でも何だったら気に入ってくれるかな？」

霊夢とカグツチに似合いそうなもの…あ、魔理沙もか。

んー、分かんないなあ。誰かに女子が好みそうなもの聞くか…？

と考えつつ、部屋を出る。

「あ…、おはよう」

「おはよう」

「相変わらず早起きだな…たまには朝食作るの代わろうか？」

「いいのいいの、朝食くらい私に任せて」

「…？大丈夫だったらいいんだけど無理するなよ？」

「分かったわ」

「あ、そうだった。今日里に買い物しにいくんだけど」

「へえ…珍しいわね。いつもなら団子屋か鍛冶屋なのに」

俺ってそのどちらかのイメージだったんだ…、確かにいくけども。

「そーゆーことだから」

「昼から？」

「そうだよん」

「なんか今日はずいぶん機嫌いいんじゃない？」

「え？何それ。俺っていつつも機嫌悪そうにしてるか？」

「さあね」

「どっちだよー！」

「そういえば、カグツチは起こさなくていいの？」

あ、こいつ無視しやがった。

くそおゝなんか最近、霊夢のペースに合わせられてる気がする

「うん、別に好きな時に起きればいいかなーって思ってたわ」

「ならいいんだけど…」

「心配なのか？カグツチのこと」

「なーに？心配してほしいの？」

「はは、出来ればね。じゃ、いってこようかな？」

「いってらっしゃい」

「あ、カグツチ起きたら出掛けてるって伝えといて」

「はいはい」

…里…

うーん、何がいいかなあ。気に入りそうなもの
首飾りはもう買ったでしょ？何がいいかなー

「指輪？ピアス？それとももっと冬らしいものか？」

そっ 생각해込みながら歩いてると団子屋の近くまで来た、すると…

「あら、隼くんどうしたの？そんなに唸っちゃって」

と声をかけてきたのは団子屋のおばちゃんだった

「ん…？ああ、おばちゃんかおはようございます」

「おはよう。それでどうかしたの？」

「いえ、少しクリスマスプレゼントで何あげようか迷ってて」

「カグツチちゃんに？」

「はい、それと霊夢にもあげようと思ってますね」

「へえ博麗のとこにもねえ…やっぱり冬なんだしマフラーや手袋とかでいいんじゃない？」

「マフラー、手袋…。ありがとうございます」

「ちょっとやりたいことあるんで店の奥貸してもらっていいですか」

「いいわよ、自由に使ってね」

「ありがとうございます」

「…じゃあ、とりあえず必要な物買ってきますか。」

…久しぶりだな、作るの出来るかなあ？
手編みとか自分でも思ったけどガチすぎでしょ。

「でも案外、気に入ってくれたりしてね」

「…はあ、やっと完成した！やっぱり時間かかっちゃったな」

朝に出たのに、もう昼だよ。おばちゃんに頼んだら団子出してくれっかな？

「おばちゃん、いるー？」

「お？あまりにも集中してたから声かけなかったけど食べ物欲しいんでしょ？」

「よくお分かりで」

と席に座る。

「ちょっと、今更こんな話するけど隼くんがここに来てくれてからお客の入りがよくなってね

本当に感謝してるのよ」

「いえいえ、こっちは雇ってもらってる身なんですから精一杯働かないと失礼ですからね」

「隼くんは人を呼び寄せる効果でもあったりするのかもね」

「褒めても何も出ませんよ？」

とそんな会話をしていると誰かが店に入ってきた。

「じんじちわー」

「はい、いらっしやい。適当に座ってください」

「親切にどうも」

「何食べます？」

「じゃあ、三色団子をー」

「はいよ、ちょっと待ってね」

ふうん…初めてみる顔だな。いや、俺が覚えてないだけかな？
ま、さっさとカグツチへのプレゼント決めて帰るとしますか

「…よっ、おばちゃんここに代金置いてくね」

「あ、もう帰るのね。分かったわまた来てね」

「はい、ありがとうございます」

と…って店を出る。

「さて、霊夢へのプレゼントは決めれたし後はカグツチか…」

なんかやっぱリアクセサリー系統しか思いつかないな…。
プレスレットとかよさそうだね、そうしようかな？

「じゃあ、どんなのがいいかな？色々あるんだけど…ちやちやっと
決めますか」

…博麗神社…

「…ただいま」

「おかえり…だけど、ずいぶん長い買い物ね」

「ちょっと途中で厄介事に巻き込まれてね…あはは」

「ふうん、朝に出かけたのに全然帰ってこないからカグツチ心配してたわよ？」

「あら。それはちょっと不味いかなあ…？」

「様子見に行ってきたよ、隼の部屋にいるだろうし」

「りょーかい」

とびつて部屋まで向い戸をあける。

「カグツチ…いる？」

「隼のバカ！何処行ってたの！」

とびつていきなり抱きついてきたので体勢を崩しその場に尻もちをつく。

「ごめんごめん、ちょっと急な用事でさ…」

「いいけど…そんなに急ぎの用だったの？」

「明日になれば分かるよ」

そしてその夜…。

「寝てるかな…？」

とカグツチが寝ているのを確認し布団から出る。
そして綺麗に箱に包んであるのをそっと置いといてやる。

「次は霊夢のときか…」

「すう…すう…すう…」

ちゃんと寝てるな…。じゃ、置いといてやるか。
手編みのマフラー&手袋を置いといてやった。

「おやあみ…」

と…って部屋を出た。

…次の日の朝。

「朝か……ん？」

とふと横をみるとカグツチがいなかった。
不思議に思いながら部屋を出る。

「おはよう、カグツチは？」

「カグツチなら屋根にいるんじゃない？箱を持ってなんか飛び出していったから」

「ふうん、喜んでた？」

「もの凄くね、どこかのサンタさんのおかげでね」

「へえ。サンタねえ…霊夢にも届いてたか？プレゼントは」と白々しく言っちゃった。

「そうね届いてたわよ」

「良かったじゃん、日頃の行いが良かったってことだな」

「一言多い。でも、ありがとね」

「え？」

「なんでもない、カグツチ呼んできなさい。朝食にするわよ」

「ほいほい」

「じつして無事、プレゼントを渡せた雫は心の中でホッとしていた。

第25話「凄く似合ってるよ」

「……………」

冬だなあ…そろそろ1年目が終わるのか…。
長いようで短かったな。

「どうしたの？」

「ん？ああ、カグツチか…？そういえば、昨日のプレゼント何が入ってた
」？」

「綺麗なブレスレットが入ってたよ！」

「そっか、良かったな」

「うん！それでつけてみたんだけど似合ってる？」

とそれを見せる。

「凄く似合ってるよ、カグツチにピッタリ」

「ほんと？ありがと隼！」

とまた抱きついてくる。

「うおっ…ほんと抱きつくの好きだよね」

「好きだから…隼のこと」

「うへっ、そういついと言われるの慣れないなあ…でも俺も好きだよ」
「？」

「うん、ありがとう…嬉しい」

と笑ってみせてくれた。

「さてと、今日はするともないからどうしようかな？」

正直、俺の体力が持たんからなこんな空気だと…。

「私は隼がいればいいかなー」

「あはは、そうだね。今日くらいはゆっくり過そうか」

とそんな話をしていると霊夢が入ってきた。

「…まーたいちゃついでるのね。あ、これみかん置いとくから」

「ん？ああ、了解。またどっか行くの？」

「ちょっと鍛冶屋に…彼と話あるから」

「はいよー、いつてらっしやい」

とだけ言い残して部屋を出ていった。

「よく寒いのに外に出ようなんて思っよね」

「まあ色々事情あるんだろ？それよりもみかんだけ置いてかれてもねえなんか面白いものないのか」

「そうだねー、隙間のにでも頼めば適当になんか出してくれるんじゃない?」

「そうだね…」「呼んだ?」

「お、紫か。暇なんだけどさ何かないかな?」

「そうね…表に連れて行きたいんだけどこっちの都合でね生憎無理でして」

「そっか、ならカードでもなんでもいいや」

「じゃあ、これね…」

とってなんかゴソゴソとしました。

「あつたあつた…これよ、これ」

「へ?カードか、じゃ真剣衰弱程度ならいけるかな?」

「じゃ、私は帰るわね。二人きりの時間を邪魔して悪かったわ」

「…でも、助かったよ。ありがとう」

「ええ、さよなら」

それから俺は1からルールを教え、それからずっと楽しんだ。
一緒に笑い、時間を過ごした。

「うーん！楽しかったー！ちょうどいい時間帯だし飯にすっか」

「そうだね、じゃ私待ってるよ」

「うん分かった」

俺は部屋を出て台所まで行く。

「さて…と、作りますか」

カグツチ何が食べたいだろ、まあ食材が限られてくるがな。

料理中…。

「よし、出来た！呼んでくるか」

とカグツチがいる部屋に向かっていく。

「おーい、カグツチできー…って寝てるし」

「すう…すう…」

こんな短時間でよく寝れたな。折角作ったんだけど、霊夢に置いてやるのかな？

「布団まで連れていこつと…」

とカグツチを抱っこして連れていく。

「じゃ、あとは作ったやつか…紙にでも書いとくか」

と一旦部屋を出て、紙に書いてまた戻ってくる。

「びじじよ、霊魂が帰ってくるまで起きよ」じじいかな？いやいっか

と隼も布団にいたのだった。

第26話「やっぱりカグツチちゃんって」

「…ん、ん？」

なんか動きづらい…、背中がもの凄く温かい気がする。

「すう…すう…」

かすかに首に吐息がかかりくすぐったい。

まさか…カグツチか？とりあえずこの状況から脱出せねば…

そして動こうとすると、手をもたれ立ち上がれない。

「ちょカグツチ？朝だって離れよ？ね？」

と声をかけるが全く反応しない。

体の向きもかえれないし手ももたれているので自分から離すことも出来なかった。

「隼ー、今日団子屋にいかなきゃいけないん…って何してるの？」

「いや、動けなくてさ…あははは…は」

「はあ…何やってんだか、まあ好きな時に行きなさいよ」

「え？ちょっと待って！助けてくんないの?！」

「助けてほしいの?？」

「当たり前だよ!!こっちもっ本当にやばいから!」

「えー、折角カグツチがくつついてくれてるのに?嬉しくないの?隼は」

「んーまあ嬉しいちゃ嬉しいけど…って何言わせてんの!」

「自分で言ったんでしょ…じゃあ頑張っつてね」

と笑って部屋をでていった。

「すう…すう…」

「おーい、カグツチー起きようぜ朝だつて」

「…ふああ…はや、と?」

「やっと起きた、そろそろ離れてくんない?」

「え?あ…」

と離れてはくれたが下を向き顔を赤くしていた。

流石に無意識でやったことは恥ずかしいか…。

「ほら、行こ?朝食食わないと腹へるだろ?」

「うん」

朝食を済ませる。

「よし、じゃちょっと遅れたけどさっさと行きますか」

「え？どこか行くの？」

「うん？そうだけど…あ、寂しいんですよ」

「うん…」

「あら？やけに素直だなあ…一緒に行く？」

「え、いいの？」

「いいよ勿論。だって団子屋にだって仕事するだけだし、おばちゃんも歓迎してくれるだろ」

「やったー！隼ありがとー！」

「あははほんと素直でいいよねーカグツチは」

「え？」

「いや、なんでもない。じゃ行っつか」

素直なのはいいんだけど、明るいとときと暗いとときがハッキリしてる
な今思えば

でもそこがいいのかな？それが可愛いっていうか、なんとというか…
好きなんだよね。

……里…

「どーも、おばちゃん」

「あら隼くん、そつか今日は来るんだっただかしら」

「ですね、それと今日カグツチもいるんで俺の分終わるまで、奥貸してくんないすか？」

と横にいたカグツチの頭を撫でながら言っつ。

「全然いいわよ、隼くんの大事な子だもの歓迎するわ」

「ありがとうございます、じゃカグツチまた後でな。昼には行くから」

「うん、また後でね」

そして奥に入ってしまった。

「よし、じゃあ始めますか」

とりかかり始める。

「やっぱりカグツチちゃんって可愛いわよね」

「ん？おばちゃんいたんすか…それよりいきなり何故それを」

「いやね、初めてカグツチちゃんここに連れて来たとき思ったのよ」

「何がっすか？」

「これが隼くんの将来のお嫁さんかーってね」

「……………へ？いやいやいや流石に…ねえ？」

「でも分からないわよ？」

「そうかなあ……」

「私は信じてるわよ？」

「ははは、期待されてもなあ。まあ頑張りますよなんつってね」

と会話しつつも着々と手を動かす。

すると、戸が開く音がした。

「ん？あ、いらっしやい……っておっちゃん?!どうしたんすか」

「ああ、隼か。お前がここで働いてるって博麗の巫女に聞いてな……この前来てくれた」

らしいが

「はい、霊夢からなんか渡したいものがあるって言ってたんで」

「…それはまた今度だ、今日は息抜きに来ただけだからな」

「そっすか、じゃ何がいいすか？」

「…っ色団子で」

「了解です」

わざわざこんなところに来るなんて珍しいな……。
話がないのは嘘じゃないのかな？
知らんけどね

第27話「寝ながら出来る芸当じゃないだろ、これ」

「…3色団子で」

「了解です、おばちゃん3色団子1つ」

「隼くん」

「はい？どうかしたんですか」

「折角のお客だし隼くんが作ってみない？」

「え？…でも」

「いいのいいの、隼くんなら出来るって」

「んーじゃあやってみます」

「よっし、出来た」

今まで、なんとなく作るのは避けてたから心配だったけど
なんとか出来たな……。

「うん。いい出来だよ、さあ早く持って行ってあげて」

「はい」

と作られた団子を持ちそれを持って行く。

「どうぞ、三色団子です」

「ほお…これ作ったのか」

「まあ、一応…味は知りませんがね」

「俺が頼んだんだ勿論食う…」

「ありがとうございます」

それから頑張って仕事をやりそして昼を迎えた。

「はああ…やっと昼だー！疲れたなー」

「お疲れ、隼くん。今日はもう終わりでいいよ」

「え？でも、まだ午後から」

「大丈夫よ、大丈夫」

「本当に大丈夫ですか？」

「心配しないで、大丈夫だから」

「んーじゃあ、お言葉に甘えさせていただきます。じゃとりあえず奥行きますね」

「はいはい、行ってらっしゃい」

カグツチ何してっかな…とりあえず顔みせとかないとな。

「おーい、カグツチ。いるー？」

「んにゃ？あ、隼…おかえり」

「この様子だとまた寝てたよね？」

「えへへ、そうみたい」

「よく寝れるよね、いつも思うけど」

「隼は眠たくないの？」

「んー眠たいけど、結構生活変わったからなあ…今は思わなくなったかな？」

「そっか、元々この人じゃないもんね」

「そうだね、じゃ帰りますか」

「え？もう帰るの？午後からはないの？」

「うん、なんかおばちゃんが今日は上がっていいって言われたから」

「へえー、珍しいね午前中だけで終わるなんて」

「今まではずっと1日だったからね。よし、帰ろっか」

「うん…」

と奥の部屋から出る。

「じゃ、おばちゃん帰るね」

「はいはい。あ、後言い忘れてたけどもつすぐお正月でしょ？だから

一旦お店閉じるから」

明日からは来なくても大丈夫よ」

「了解です、お疲れした」

「じゃあね、隼さんとカグツチちゃん」

と挨拶を交わし店を出る。

「ふう、寄り道なしの一直線で帰りますか」

…博麗神社…

「たっだいまー」

「ん？隼じゃない、早いお帰りで」

「色々ありましてね」

「うん、今も色々あるわよね？」

「え？あ…このこと？」

とカゲツチを指し示す。

「当たり前じゃない、それ以外に何があるっていうのよ」

「んーどう説明すればいいのかな？じゃあ簡潔にカゲツチが腕もって
きた？終わり」

「そうなんだろうけど、見てるこっち側としてはとても不愉快ったら
ありゃしない」

ええ…何それ知らないよ。その言い振りだと羨ましいって言うてるようなもんだぞ

んーこのまま霊夢が不機嫌なのも嫌だし離れてもらおうかな？

「カグツチ？もう着いたんだし離れよっか」

というところ何も言わずに更にくっついてくる…

うん？俺が言ったことと全く反対の行動をしているのだが。

「いじめん霊夢、無理みたい」

「はああ…しょうがないわね」

「ほんといじめんね、じゃさっさと部屋行くからな」

そう言っって部屋に向かう。

「ふう…：…やっぱりここがなんか落ち着くな。なあカグツチ？」

と横を見ると寝ているカグツチがいた。

「ええ…：…いつの間寝てんの…：…っておわっ」

いきなり畳についていた手を引っ張られ体勢を崩す。

「ちょ、カグツチ？いきなりは止めようよ」

だが返事はない。

「寝ながら出来る芸当じゃないだろ、これ」

そして起きあがり、敷いてあった布団に入れてあげる。

「一段落したし、風呂行こうかな…昼に入るのは久しぶりだなあ」

部屋を出て廊下を歩いてると霊夢に会った。

「ん？隼じゃないどっしたの？こんなところだ」

「いや、風呂にいこうと思ってた」

「そう…カグツチは寝てるのね」

「よくお分かりで、じゃ」

「でんぞいっせいく」

「でんせ」

と風呂まで歩いていく。

寒いなあ…」

冬とかなったら1時間とか平気で入るけど、流石にそんなことはないわ。

「わっわと温まって上がらひ…」

入り始めてから30分が経過した。

「……………」

そろそろ上がるのかな？

なーんか全然体の疲れとれないし…。最悪だなあ
いいけどさ、どうせ何もすることないし

と風呂から上がり服を着る。

「ちっちと寝ようっ」と

自分の部屋まで戻る。

「まだカグツチ寝てんのね…寝る前に霊夢に一回言っとくか…」

一回部屋を出て霊夢がいるところまで行く。

「霊夢、俺疲れたから一回寝るね。時間になったら起してよ？」

「あーはいはい、どっどっ勝手に」

「どっも」

また自分の部屋に戻る。

「おせすおせす…」

それから4時間後…。

「……ん、ん、……せーしー」

「……ふあめ」

とゆっくり体を起す。

「どんだけ寝てんのよ、あなたよ時間になったら起こさせて言ったの
カグウチはもう起きてるわよ」

「あれ？俺ってばそんなに寝てたかな…」

「そうよ、いい加減にしてよねほんとに」

「あはは、ごめんごめん」

と部屋を出て食卓へと足を運ぶ。

「ほんっと、苦労するわね。隼起こすだけで」

「へへっ苦労してなんぼだろ」

「五月蠅い、今度から絶対に起こしたげない」

「うへえ…それは勘弁」

「こうしてまだ平和な日々が続いてるのであった。

第28話「そんな軽々しく言えるねえほんと」

「はあ、なんでこうなるかなあ……」

俺が起きたらまたカグツチが抱きついてるといふ変な状況。

最近これが定着してるんじゃないか？っていうくらい毎朝これが続いている。

「誰もみてないからいいんだけど恥ずかしいんだよな、これ。だから止めようよカグツチ？」

「うん？隼が起きないから……」

「俺が起きないからくつついてんの？意味分かんねー」

「うーんじゃあ、隼が好きだから？」

「うへっ、そんな軽々しく言えるねえほんと」

と腕を掴まれたまま立ち上がり部屋を出る。

「おはよ、隼」

「……ああ、隼ね。おはよ」

となんか機嫌悪そうに言う。

「あらら？またこのこと言ってんの？」

「今日は違う」

『は』ってなんだ。

やっぱりいつもくっついていてという解釈に繋がりそうなんだが
…その発言

「ふうん、それでどうかしたの？」

「魔理沙のやつがね、いきなり来たと思ったたら…」

「なんだ、そんなことが聞いて損した」

「そんなことって酷い！ていうか最後まで話聞いてないでしょ」

「魔理沙のことだ盗まれたら一生帰ってこないぞ？」

「そうだけど…なんか悔しいわね」

「じゃ、取り返せばいいじゃん」

「そう言ってもねえ簡単に上手く出来ないから困ってるの」

「困ってないじゃん、怒ってんじゃん。カルシウム不足か？」

と笑って言う。

「もうしょうがないから魔理沙追いかけてくる」

「おおお疲れ様、冬なのによく働くね褒め称えるよ」

「私が帰るまでに昼食の用意よろしく」

「はいはい、いつてらっしゃい」

と「ニ」「ニ」「しながら言つと何も言わず出ていった。

「霊夢行っちゃったけど、なんか取り返せずに戻ってきそつだよね」

「あ、隼も思ってたの？私も考えてたんだー無駄なんじゃないかって」

カグツチも思ってたのね…。

「結局、二人だけになるんだね。暇だなあ他に行くところもないし」

「そつだねえどうする？」

「俺、もっかい寝ようかな」

「昼食どうするの？」

「昼までに起きれば大丈夫っしょ」

「大丈夫かな？心配なんだけど…」

「平気、平気」

と「こっつ部屋まで回つ。

「じゃ、おやすみ」

「おやすみ」

そして12時前…。

「ん…ふああ。もう時間かな…？」

「すう…すう…」

カグツチはまだ寝てるのか……寝顔可愛いな。

「じゃなくって！飯作らなきゃいけないんだっけ」

と部屋を出る。

「とういかなんで霊夢いないんだっけ…」

と思いつつ、適当に作り始める。

10分後…。

「よし、出来た。テーブルに置いとけば分かるだろ。一回部屋戻ろっと」

とまた部屋に戻る。

「おっと、まだ寝てんのか。起こさないようにしないとな…」

静かに横に座り新聞を手取る。

『冬の特大号!!』

と大きく書かれたのを見る。

「やっぱり文の新聞みてると色々ツッコミたくなるんだが」

と一人で笑う。

それから新聞を見ているよ…。

「んっ…ふぁぁ」

「お、やっと起きたか。おはよ」

「うん、おはよう」

「結局、カグツチのほうが長く寝てるんだよねえ」

「えへへ」

と少し頬を赤くする。

「いいけどさ、昼食作ったけど言った本人は帰ってこないし…何やってんだか」

「それはいいけど、私まだ眠たいかも…」

「どんだけ寝たら気が済むの…流石に寝すぎだね」

「んーじゃあ、隼も寝ようよー」

「流石にそれはちょっと…っておわっ」

といきなり抱きついてきた。

顔を上げるとかなり顔が近かった。

「…っ」

「顔赤いよ？」

と言われつい顔を隠してしまっ。

「あはは、恥ずかしいの？」

「そりゃ、あんなに顔が近いんだもん…恥ずかしいよ」

「そういう隼も好きだよ！」

と更に抱きついてくる。

「おいおい、霊夢が帰ってきてこんな見られたらまた大変なことになるって…」

「大丈夫だよ」

と話していると戸が開く音がした。

「あーほら、一回離れよ？ね？」

しかしカグツチは離れてくれない。

「はあ…仕方ない。いっつと」

と…って部屋を出る。

「おかえり、霊夢。奪われた物はとり返した？」

「くうく！魔理沙め！絶対に許さないんだから!!」

「あらら、この様子だと取り返せなかったようで。昼飯作つたか
ら食べ入って落ちつきなよ」

「そんな格好で言われてもねえ……」

「あはは、まあ気取り直せって」

「なんか悔しいけどそうするわ」

「じいじ、おじいちゃん」

とびついで部屋を出ていった。

第29話「何その高校生が言いそうなセリフ…」

「ふああ…眠たいな」

と鏡の前で欠伸をしながら言う。

「もう少しで一年の締めくくりなんだけど、もうちょっとそのだらしない格好どうにかしてくれないかしら？」

「そうだったねえすっかり忘れてたわ…」

「別にいいんだけど…隼ってなんかどつかのネジが緩い気がする…」

「そうかな？いいじゃんのんびり暮せてるんだし」

「それはそうね、でも異変とかあったりしたら体鈍ってそうよね全然弾幕^{ゴッ}っ^ゴしてないから」

「あはは、じゃ今からやる？」

「勘弁してよね、こんな寒い中絶対にやりたくないわよ」

「俺もだけどねん」

と朝食を食べるために移動する。

「そういえば、カグツチは？」

「寒いからまだ寝るだとな」

「そっちはそっちでマイペースねえ」

「そだね、別に早起きを強制してるわけじゃないんだから寝ててもいいんだけど」

「いや、あれは寝すぎよね…」

「寝る子は育つってね、いい言葉だわ」

「そのまんまね…」

「俺に言葉を求めてはいけない」

理由？詳しいことはよく分からないからだ。

勉強が出来ないわけではない、しなだけなのだ

「朝食食うのはいいんだけど、カグツチは寝させたままでいいの？」

「心配なら起こしてきてね、貴方の彼女さんを」

「何その言い方、嫌みか」

と行って俺の部屋で寝ているカグツチを起こしに行く。

「おーいいい加減起きようぜ」

「うーん、あとちょっと…」

「何その高校生が言いそうなセリフ…」

と言いながら近くにしゃがみ込む。

「布団にちゃんと入れないから寒いだろ。起きてたほうが温かいって」

「……………」

「無視かよ、それに臍出てんぞかっこ悪いぞ」

「えっ……？」

と、いつて起きあがる。

「お、起きた起きた。ほらいくぞ」

「……」

と頬が赤くなっている。

「見られなくなかったら起きろよな……」

「流石に隼でも恥ずかしいよう……」

「あはは、見られるの嫌なんだ。俺も見る趣味なんてないけどな」

と、いつて部屋を出る。

「起きてきたよ」

「案外早かったわね。てつきりもうちょっとかかるかと思ったんだけど」

「ん」

「そう思っただったら霊夢が起こしにいけよ」

「嫌よ」

「うっわ、最低だ。こっちは苦労してんのに」

「はいはいそうですか」

と簡単に流される。

「はあ…なんかため息多くなった気がするんだけど」

「気のせいじゃない？」

「そうかなあ…」

と話しているとカゲツチが来た。

「やっと来た、ちっちと食入よっせ」

「んっ」

そして朝食を済ませる。

「」「」「」「」「」「」

と俺はその場から立つ。

「ちて、と…今日はどうすっかな」

「何もすることないわね…掃除でもするかしら」

「ん？頑張るじゃん」

「何言ってるの？隼もよ」

「え……マジ？」

「当たり前よ、一人でするわけないじゃない」

「ですよねえ……」

「じゃあ、隼とカグツチは倉庫の整理よろしく」

「了解。じゃ、行こうぜ」

「ん」

外に出て倉庫まで移動する。

「久しぶりだな、ここに入ったの。ここでこいつと出会ったんだぜ？」

と、刀を取り出す。

「そうだったんだ…」

「まあね、さっさと片付けて終わりにしよう」

「うん。そうだね」

それから4時間後…。

「はあ…?! どんだけだよ、物多すぎだろ！ 殺す気が」

「そうだね、でも後ちょっとだよ頑張る？」

「終わりがやっと見えてきた感じだな… 年末の掃除ってこんな忙しかったっけ」

そう話しつつも手を動かす。

「ていうか、カグツチ何もしてなくない？」

「私、重いもの持つのが苦手だから」

「お嬢様か?!」

「えへへ、頑張ってるね隼。応援してるよ」

くそう… 結局俺一人でやってるじゃんかよ、いいけどな。

女子に任せるとか男として最低だろう？ そこの入んの常識くらい備わってるよ

「や、やった…終わった!」

あれから30分経ちやっと終わることが出来た。

「お疲れ隼。結構時間かかったね」

「そ、そうだね…」

普通に昼越えちゃったよ、さっさと中に入って温まるっ。

「おーい、霊夢ー。終わったぞー」

「あ…隼の存在完全に忘れてた、昼食作ってないや」

え?あれ、耳おかしくなったかな?もう一回聞こっ

「え、え…?ん?ちょっとよく聞こえなかったもう一回」

「だから、隼の存在を完全に忘れていた、昼食を作っておりません」

「はあああああああああ?!」

「ちよつといきなり大声あげないでよ耳痛い…」

「いやいやいや、俺頑張ったのに忘れてたって…嘘だろ」

「ごめんね、カグツチは自分から来て作ってって言ってきたから作っ

「ただけど」

「カグツチ何1つ手伝ってないですけど…?」

「女子にも持たせるのは…ねえ?」

と霊夢は横目でカグツチを見る。

するとカグツチは首だけ縦に振って頷く。

「いや、そりゃそうだけどさ…流石n」

「いつまでも終わったことを引きずってるんじゃないわよ」

あ…なんか怒られた。意味分からん

いいけどさああ!腹減った…。

「もついい、俺が作るから…」

あーあ、折角頑張ったのに忘れてたって…マジ酷いわ…。
と一日中呟き続ける隼であった。

第30話「どんなに強力なデコピンだよ」

12月30日午後6時…。

「こたつって最高だわ」

「そだね」

とこたつの中に潜っていたカグツチが顔を出す。

「もう俺ここで寝ていいかも…」

「駄目に決まってるでしょ」

と鍋を持った霊夢が入ってきた。

「おお、鍋ですか。冬にはピッタリだね。早速いただくとしよう」

と箸を持ち具をとろつとすると箸を箸でもたれた。

「ちょいませ」

「うお、箸使いうまいねー」

「それはいいとして、食べる前に言っとくけど食べ終わった後に寝ないでよねー」

「心配なくてもいいって大丈夫だから」

「その大丈夫が不安なんだけど…」

「じゃっいっただっきまーす」

「聞いてないし…」

「」「」「ちそうさまでした」「」

「あー美味しかった。もう寝れそう」

「絶対にここで寝ないでね？」

「はいはい、大丈夫ですよーっと」

「じゃ、片づけてくるからちょっと待ってて」

「ういー」

と霊夢が部屋から出て行った直後、倒れこむ。

「なーんか、やっぱり眠たくなってきた…少しだけ横になろっとな…」

「えー隼寝るの？」

「ん？ちょっとだけだって」

それから10分後…。

「はーやっと終わったわ、これでやっと休める…ってあれ？」

と違和感を感じ下を見る。

「結局、寝てるじゃないの…お仕置きね。ふふ」

とちよっとした悪意を持った笑い声が聞こえるが、勿論隼には聞こえない。

「zzz……………zzz」

ズビシッ

「おはようございます、尾神隼くん？」

「つううう……………どんなに強力なデコピンだよ」

とまた寝ようとするが…

「あら、またくراいたいの？とんだMね」

「つう…じゃ寝ないからこたつに入らせて」

「懲りないわね、いいけどね」

「というかカグツチだけ寝させるってずるくない？」

「隼が寝るときに連れて行ってあげれば？」

「いや、そういうことじゃなくてだな…」

「うん？」

「駄目だ、通じてない…」

「そういえば、彼の渡し物って受け取った？」

「ん？ああ、まだ貰ってないね」

なんかさり気なく話題変えられた。

「そう。新年についてこれば？挨拶ついでに」

「いい考えだね、そうしようかな」

それから3時間ほど雑談した。

「ふああ……ああ、眠たいな。なんでだろまだ9時なのに……」

と大きな欠伸をしてから言う。

「そんなに眠たいなら寝ればいいのに…」

「霊夢が起こしたんだろ？」

「そうだったかしら？」

と白々しく誤魔化す。

「はあ、別にいいけどさ。それよりさっきから気になっているのじつは
なんだけど…」

と自分の太ももあたりを示す。

「なんで枕代わりにされてんの？これ」

「いいんじゃない？気持ちよさそうに寝てるし」

「そんなだったら俺も寝させてよ…ほんとに」

「だから自分の部屋にいつて寝てきなさいよ」

「あー、じゃあそうしようかな？」

「おやすみ」

「うん、おやすみ」

とカグツチを抱き部屋まで戻る。

「うわ、さむっ。やっぱりこたつに戻るのかな…？」

…でもまたなんか霊夢にギャーギャー言われるだけだしな、素直に寝よう。

「おやすみ、カグツチ…」

第31話 「新年あけましておめでと〜いざいます
す」

「新年明けましておめでと〜いざいます」

「どうしたの？いきなりそんな改まって…」

「変だったかな？折角の新年だったからちょっとは…ねえ？」

「うん、そうだね」

とカグツチと顔を合わせそう言う。

「どう考えても変よ…あんたたち起きるの遅くてもう皆いるわよ？」

「え？マジで。つか、正月って皆集まってやるもんなの？」

確かにもう時刻的には昼を過ぎていた。

「魔理沙と文がね…色々あったのよ」

「あ…それはしょうがないね。ちょっと皆に挨拶済ませてこようかな？」

とこっそり皆のいるエリアに行く。

「なんかちょっとづるさかったのはそれか…」

「ねえねえ、誰が来てるの？」

「ん？ああ、さあね。見てみないと分かんないや」

と皆がいる部屋につき戸をあける。

「お？隼か、あけおめなんだぜ！」

「魔理沙か久しぶり。相変わらずテンション高いねえ」

「おう！紅魔館の連中もいるぜ？」

「レミリアにフランに咲夜…それにパチエリーもいるのか」

「明けましておめでとう。夏には世話になったわ」

と咲夜が代表として言う。

「ん？ああ、別に構わないよ。楽しかったしな」

「隼！久しぶり！元気にしてた？」

手を振り、フランがそう言う。

「フランも元気そうだな、俺は勿論元気だよ」

「どうも！文屋です」

「ん？今度は文か、やけに今日は人多くないか？」

「私の新聞効果は絶大だったようですね」

と一人で変な笑みを浮かべている。

「あゝ…はいはい、そうですねー」

と適当に流しておく。

「ねえ、隼。まだなのー？」

「え？ああ、霊夢まだ来ないな」

そついいながらとりあえず席につく。

皆はなんか話したりしてワイワイやってる。

しばらくすると霊夢が来た。

「出来たわよー」

「お、待ってました。いただきましょつか」

「皆席についたわね」

「そつだぜ、さっさと食おうぜ霊夢」

「魔理沙はいちいちうるさいわね待つってことg…」

「いただきまーすー！」

「聞いてないし…いいけど。じゃ私達もいただきましょ？」

「そつだな」

それから皆でワイワイガヤガヤと話しあったり笑ったりして楽しんだ。

そして5時間程が経った。

「はー楽しかったー！こんなに食べたりしたのって宴会以来じゃないかな？」

「だね、私も凄く楽しかった！」

「ほんと、正月とは思えないほどの騒ぎっぷりよね」

「たまにはこういうのもいいんじゃない？」

「そうね」

と周りをみながら言う。

「片づけが大変ねこんなにあつたら」

「それくらい手伝ってやるよ」

「あ、珍しい。自分から言うなんて」

「そうか？まあ気にするなってそんなこと」

「そう言っって立ち上がる。」

「そういえば、魔理沙ってば潰れてるけどどいつするの？」

「置いとけばその内目覚めますだろ」

「それもそうね」

「また新しい年か…。」

「今年も平和な生活が送れますように。」

第32話「これ大事にするね」

…里…

今日は新年の挨拶で鍛冶屋へ行く。

そしてそのついでに前々から言われてた渡したいものを受け取りに行く。

「…あーそつだ。帰りに団子屋行って挨拶済ませとくか、ねえカグツチ？ってあれ？いない…」

さっきまで横にいたはずのカグツチを探す。

「何処いったし…」

と通ってきた道を引き返すとカグツチがいた。

「あーいたいた、何やってんの？」

そつ言って頭に手を乗せる。

「あ、隼」

「あ。じゃないよ、もう。何見てたの？」

「この髪留め綺麗だなんて思ってたさ」

「そんなことか…。おっちゃんこれ1つ頂戴」

と置いて金を置く。

「毎度あり〜。優しいねえ彼女さんのために買ってあげるなんて」

「ははは、そうですか？」

「そうだよ。はい、どうも」

「ありがとう」

とこいつは髪留めを受け取る。

「カグツチい」

「うん、ありがとうね。隼」

「いねくらに買ってやるって。俺のこと信じてくれてるんでしょ？俺もカグツチのこと信じてるから」

「うん、ありがとう…これ大事にするね」

「ああ」

そう言っただけでまた歩きだした。

…鍛冶屋…

「こんちわー」

「ん？お、隼か。おめでとさん」

「あ、おめでとつございます」

「わざわざ来てくれたんか」

「ええ、ちょっとね。挨拶ついでに渡したいものを…ね」

「ああ。そのことか…前に俺の教えた剣術には特別な剣が必要って言っただろ？それを渡そうと思ってな…」

「渡したいものってそれっすか？」

「まあな…。しかし使うかどうかはお前次第だ。弾幕ごっこに取り入れるのも一つだからな」

「それは面白そうっすね」

「じゃあ、ちょっと待ってる」

「あ、はい」

返事すると奥に入ってしまった。

「剣ってどんなのだろ…」

「でっかい大剣だったりしてね？」

「何それ…変なこと言わないで」

「あはは、冗談だよ」

「いやでも本当にそうだったら嫌だなあ…」

と話していると戻ってきた。

「ほれ、これだ」

と口を差し出した。

「これって剣というより刀っすよね？また持つんすか」

「まあいいから、持ってみる」

と口を渡されたので持ってみる。

「へえ…結構思ってたより軽いですね、振りやすい」

と軽く振る。

「その刀はお前の空間に入れておくんじゃないかと、腰のあたりにでもぶら下げてっす」

「なんでですか？」

「最大限生かすためだ…」

「へえ、じゃあそつしよつかな？といてもやぶらばら上げるの…」わ

「こいつをやる肌身離さず持つとけ」

「はい、分かりました」

と、いって受け取り早速つけてみる。

「横だとなんか違和感あるから裏にしよ…」と

「ふん、大分似合ってるぞ」

「そすか？でもこれで里歩くのはなんか抵抗あんな」

「大丈夫だ」

「おっちゃんがそついうならいいか…」

「じゃあ、俺からの渡すものは終わりだ」

「はい。ありがとつございました…では」

と、いって鍛冶屋をあとにした……。

第33話「嘘つきの下手くそだよね」

現在5月。

「うう…寒いね。もう5月だよ？」

「んあ？そだね…これって異変なんじゃねえの？」

「そんな訳ないわよ…今年は春が遅いだけ」

「いやいやいや！どう考えても遅すぎるでしょ！今までそれを聞いて従ってたけどさあ…」

「…五月蠅い」

「はあ、駄目だ。もういいほらこたつ大好き巫女いくぞ」

と…といって襟を掴んでこたつから引っ張り出す。

「止めてー！私は自分が好きな時に動く主義なの!!」

「黙れ！お前の言うことを聞いてたら絶対に損するからな！」

「…損なんてしないわよ！たくさんいいことあるわよ？」

「じゃあ例として歩きながら言えよ？」

「なんでそうなるのよ！こたつでいいじゃない！」

「絶対にその要求は呑まん！あ、ちよっとカグツチ霊夢の左腕持って」

「うん。分かった！」

「ちょ、なんでカグツチ言うこと聞いてるの?！」

「だって隼がいった事だし」

「そういうことだ！いくぞ！」

と戸をあけようとしたら勝手に戸が開いたと思ったたら咲夜が立っていた。

「ん？紅魔館の…：どうした？今から訪ねようと思ってたところなんだ」

「そう、今回の異変のこと？」

「ああそうだ、何かあの図書館の管理人に聞いたら分かるかも知れないと思ったからな」

「それは分かったけど…：どうしたの？ヘタレ巫女も一緒に連れてくんだ」

「誰がヘタレ巫女よ！」

「だって…：ねえ？」

と目線を咲夜に振る。

「なんで私に振るの？」

「いんや、なんでもない。よしいざ紅魔館へ！」

…移動中…

「よし。じゃあさつさと聞きだしますか」

「それはいいんだけど…簡単に教えてくれるのかしら？」

「おいおい、こちとらこの主の妹様を救い出した奴だぞ？」

なんで今回の異変についての質問を拒まれなきゃいけないのかな

「？」

「まあ、それはそうだけど…。好きにすればいいわ」

「べんせ」

その言っている中に歩くところへ。

…図書館…

「…ここに何の用かしら」

「あはは、嘘が下手くそだよな。分かってる癖して」

「はあ…今回の件についてでしょ？」

「やっぱ分かってるんだね、まあ話しが早くていいけど」

「あなたと話していると疲れるわね」

「酷いなあ…」

「あつそ。で？何が聞きたいの」

「何処にいけばいい？」

と素直に聞きたい事を聞く。

「ほんといきなりね…まあ教えないつもりはないけどね」

「出来れば早く教えてほしいんだけどなあ」

「急ぐと禿げるわよ？」

あ…いつぞかのネタだ…。

「………使い回しはいいよ」

「はいはい。じゃああなたの勾玉に聞きなさい」

「は？それがこの能力？」

「違うわよ、能力は他にある」

「じゃあ、どうしろと？」

「ちょっと待ってて…光が指し示す方向へ向かえばいいわ、これの。でも今回限定だけだね」

「ほう…っじゃありがと、話はこれだけ。じゃあ行くわ情報提供感謝するよ」

「急ぎますね…」

「ほんっとありがとー！じゃあ」

と行ってすぐに紅魔館を飛び出した。

第34話「全てを貫き無に帰せ」 + キャラ紹介

パチエリーからヒントを得て紅魔館を出た直後…。

「そういえば、この勾玉が道示してくれるんだっけ？」

勾玉を見つめる。

すると、1本の淡い光が直線に伸びる

「へえ、これが…ってこの光完璧に空に向かって伸びてね？」

「そうみたいだね、じゃあ私に任せて」

そうカグツチが言う。

「んっどっすんの？」

と俺が問うと何も答えずにカグツチは手を掴んだ。

「ちよっ…いきなりどうしたの」

「飛ぶ方法がこれしかないけど、別にいいよね」

笑顔でこちらに言ってくる。

飛べるのはいいが、もう少しマシな手段はなかったんだろうか…と
考えていると

いきなり体が軽くなった感じがした。

「っ…何っね浮いてるの？」

「浮いてるんじゃないよ、もう隼は自由に飛べるよ。まあ、限界はあるけどね」

「へえ…。じゃあこれであつと向える訳ですか。サクッと終わりにしたいな」

と俺が行くつとすると、呼びとめられた。

「あ、隼？ 霊夢さんは？」

「へ？ あ、忘れてた！ ンーどうしよう探すのが面倒だし先に行くか」

「いいの？ 放つとして」

「あいつって何だかんだいって最終的に来るからいいんだよ、さっ行け」

と言つと今度はこそ飛び出し、光の線がある方向に進んでいく。

…ずっと光の線に沿って進んでからしばらく経った。

「まだ続いてんのか？ これ、いい加減飽きたな…っど？ そつでもない

な

と少し笑いながら言う。

すると、前方に見えるかなり不気味な所まで来た。

「ここがやっと門だね、今回も頑張ろっか！」

カゲツチがこっちを向いて笑顔で言ってくれた。

やっぱり可愛いよな…普通に、やべえテンション上がったきた。

「だな、サクッとやってこの異変も終了させようか」

そう意気込み、不気味で気持ち悪そうなところに入っていった。

……冗談きついで、まじ。こんな長い階段があつてたまるかよ。
神社の階段より数倍長いな、絶対これ
ため息しか出ない…な、こりゃ。

その心の中で愚痴をこぼしつつ、階段を上って行くのであった。

…階段を上り終え、前をみると2本の刀を背負った子から声をかけられた。

「…人間が何故ここに来るのですか？」

「んー…興味が30%、異変解決40%、寒いから30%…かな？」

「……………」

目の前にいる子は何も話さない。

「あー嘘だって、嘘。異変解決90%、寒いから10%だって」

「……………」

何も話さない。

(あれ？あの子、最初の一言以外何も喋らないんだけど…カグツチ？)

(呆れてるんじゃない？私には関係ないけど)

(…嘘だっつってんのに)

とカグツチと小さな声で話しているとやっと目の前の子が口を開いた。

「異変解決は博麗の巫女が来ると聞いていますが」

「あいつはいいとことりしかしないから、先鋒には興味がないんだよ、大将にしか目がないから」

「…じゃあ、まずはあなたからやるとしましょう」

そう言うと刀をとりだした。

「いいね、でも俺もそんな簡単にやられる訳にはいかないんだな」

俺も刀をとりだす。

「カグツチ？頑張ろっぜ」

「うん…」

とカグツチは返事すると中に入っていった。

「では、魂魄妖夢いきます」

「俺は尾神隼！よろしくな」

と俺が名乗り終わると妖夢は弾幕を放ってきた。

…へえ、俺と同じスタイルか…面白れえ

弾幕を避けつつ、距離を縮め斬りかかる。

「あなたは弾幕は使わないのですか？」

「いいや、使うよ？折角の刀を使うもの同士だ、剣術だけで戦うってのも面白いとは思わないか？」

「ほう…それはいい提案ですねっ！」

返事を貰うと、妖夢が今度は斬りかかってきた。

俺はそれを刀で受け止め、受け流し距離をとる…が妖夢は追い打ちをかけるように更に更に斬りかかる。

「うお…っ、あぶねえ。っーか速いな、じゃあ俺も早くなるっかな…」

「…？どっ？どっ？という意味ですかそれは、自分の意思で速くなるということですか？」

「まあ、正解っちゃあ正解。でも不正解」

と妖夢の問いに答え、一回また距離をとる。

「実戦では使うのは初めてだけど、一回こっさり使ったんだよね」

そう言い勾玉を握り、霊力を込める。

「なんですか？それは…」

「この勾玉は例えば速くなりたいと思い、霊力を込めると速くなるような仕組み。因みに生命力でも力でもなんでも強化できる優れものだ」

「でも、それくらいでは負けませんよ！」

「はっ！それはどうかな？」

妖夢はこちらに突っ込んでくる…が俺は一気に加速し裏に回り込みそして斬りかかる。

体感的には今までの3倍以上は早く感じるのではないだろうか…？

だが妖夢はそれを受け止めはじき返す。

「おいおい、まじかよ…」

「言いましたよね、そう簡単には負けないと」

「そうこなくっちゃ」

今度は両方一気に距離を縮め、刀同士でぶつかり合う。

「幻想郷に来てから一番楽しいわ、この戦い！やっぱり同じ武器を使うもの同士全力でやらなくちゃな！」

「そうですね…」

と妖夢は一気に力を込め、斬りにかかる。
俺はそれを刀で受け止めたが、押し負け刀を手放してしまった。

「やべっ…！」

ちよつと焦りを隠せなく刀をとりにいこうとしたがそれより先に妖夢が刀の元に行き
更に奥にやり、取りにいけなくする。

「さあどつあなたはここから戦いますか？それとも戦わずに降参しますか？」

「降参する訳ねえだろ…！」

と言いきり、腰にかけてあるもう一つの刀に触れる。
すると、触れた瞬間自然と言葉が出てきた。

『零式』よ、全てを貫き無に帰せ」

そう言うつと『零式』が取りだされる。

「そうですね、じゃあ私も本気でいきますよ！あなたがまだ本気じゃなかったのは分かってるんです！」

そう言うつとまた斬りかかるため距離を詰めてくる。

…が、俺は少し力を入れ刀を振るう

すると地面は一直線に砕け散り周りに破片が飛ぶ

妖夢は横に避ける…が呆気にとられてすぐには攻撃はしてこなかった。

「なんだ、「こないのか？じゃあ俺からいくぞー」

俺は一気に加速し妖夢との距離を縮め上から全力で振り下ろす。
妖夢はそれを刀で受け止めようとするがその刀ごと斬った

「きゃあー」

妖夢は吹っ飛び壁に激突する。

「この勝負俺の勝利だな、面白かったぜ」

「私の完全に負けです…隼さんと言いましたね、ありがとうございます
ました」

「ああ、「ちら」そありがとう」

と妖夢を起こし、握手を交わした…。

本編をみてくださりありがとうございます！

ここからはキャラ紹介になります。興味がある方は是非みていつてね！

大雑把にしか書いてないけど…ではどうぞ！

名前：尾神隼（おがみはやと）

剣刃録の主人公！

元々は元の世界で普通に日常を送っていた高校生。
訳あり幻想郷に来た。

身長：174cm

体重：60kg

好きな物：飴（特にリンゴ飴は大好物）

嫌いな物：虫全般

特技：剣道

能力：剣や刀を自由自在に操れる程度の能力

性格：基本的にマイペースで、でもやることはしっかりこなす。

容姿

黒髪でショートカット、黒目で普通な感じ。

口や鼻の形は普通。

パチエリーから貰った勾玉やその他諸々色々身につけている。

能力の細かい説明。

『剣や刀を自由自在に操れる程度の能力』は基本的に剣や刀なら扱えないものはない。

なのでチート武器とか持たせたら可笑しい強さになる気がする……。
まあでもカグツチ一筋ですし、おすし。

さあさあでは、次。

名前：カグツチ

隼くんと大概一緒にいる子。
オリキヤラです^^

身長：159cm

体重：???

好きな物：甘いもの

嫌いな物：なし

特技：???

能力：不明

性格：結構のんびりした感じ。

容姿

髪型はミディアムで赤い髪。瞳も紅。

少し身長は小さいがスタイルはOK

凄くなんか穏やかで優しいような目をしている。

カグツチも隼から貰った物を色々身につけている。

第35話「……………1枚目」

俺は妖夢と握手を交わした後、自分の刀カグツチに近づいて地面に刺さっているのを抜く。

「よっと…まさか力負けするとはなあ…ちょっと甘く見過ぎかな？」

そつ独り言をしているとカグツチが出てきた。

「はあくビックリしたよ、ほんと」

「ん？ああ、ごめんごめん。俺も正直ビックリしてたからさ」

などと言っておく。

「まあ、いいけど。次はいよいよボスだね！」

「なあカグツチ？ボスって言葉誰から聞いた？」

「あのスキマの妖怪から」

ようし、この異変終わってから覚悟しろよ、紫！

最近、無駄にカグツチに入れ知恵してるらしいからな…

「まあいいや、さっさと倒して帰る」

「だね！次も頑張っつてね隼！」

「当たり前だろ？」

「そうだね、じゃまた後でね」

「ああ」

短いやり取りをしたらカグツチはまた戻っていった。

「さあて、行きますか」

「そうね、行きますか」

と意気込んでいたら裏から声がしたので振りかえると霊夢がいた。

「なんだ、ヒーローは遅れてやってくるってか？」

「そうよ？私だって春が来なくて辛い思いしてるのよ！」

「ただ寒いのが嫌なんだろうが」

とハッキリというと霊夢はギクツとした。

完全に凶星である

「まあ寒いのは俺もだけど」

「そう…じゃあささっさと終わらせましょ」

霊夢はそう一言いって歩きだす、俺はその後をついていく。

しばらく歩いていると前方に大きな桜が見えてきた。

「へえ、これが妖夢の言ってた奴ね」

「これが春が来ない原因ね、じゃあさっさと散らせちゃいませよ」

「その前に邪魔する輩がいるんだけど…」

と空中にいる奴をみて言う。

「邪魔する輩って失礼ね」

「そんなことよりお前も半人半霊か？それとも亡霊？」

「後者でいいわ」

「じゃあ亡霊さんお名前は？」

「私は西行寺幽々子よ。散らす前にまず私をとめることね！行くわよ」
「？」

そう言いつついきなり弾幕を放ち始めた。

「うお…っと、いきなり放ってくんよな」

愚痴を言っているが確実に避けていく。

「じゃあ、こっちも！霊夢合わせろよ！影技『幻の世界』！」

「分かってるわ！霊符『夢想封印 集』!!」

幻の世界で一瞬視界を惑わせ、霊夢の夢想封印 集で攻撃する。

「えっ?!なんでこんなところにも…でも、当たらないわよ」

そう幽々子は断言し、全部避けていく。

「くっ、流石にこれじゃあ勝てないわよね」

「まあ予想を超えてる訳じゃないし?全然余裕でしょ」

「…来ないなら私から行くわよ亡舞『生者必滅の理 死蝶』」

「……一枚目」

と幽々子がスペカ宣言した後に俺は『一枚目』と少し笑みを交えて小さく呟いた。

それに霊夢は聞こえていない、勿論対峙している幽々子も聞こえていない

その後に霊夢に近づきこっち言った。

(なるべく相手にスペカ使わせろ、4回攻撃系統が来ればいい)

「??びびび」とそれ

「いいから、まずは目の前の弾幕を利用する。…カグツチいける?」

返事は返ってこないが刀が光り目の前が弾幕が全て消え幽々子はそれに驚いているようだった。

これを見て霊夢は察したのかこっちをみて頷いた。

「じゃあドンドン攻めていいわけね?」

「そういうこと、理解するのが早くて助かるよ」

「霊符『夢想封印 散』!!」

と霊夢が2枚目を使う。

「言ってるでしょう?それくらいでは当たらないって」

「まあそつだよな…でもお前の弾幕も俺らには当たらない」

「それはどうかしら?亡舞『生者必滅の理 毒蛾』」

「……2枚目」

「私は何もしないから隼任せたわよ」

「あいよ。カグツチ2個目だ、まだまだいけるよな?」

そういつともう一度刀が光り、その光が消えた時には同時に弾幕もなくなっていた。

2回も弾幕が全て消え幽々子は戸惑っている。

「どうなってるのよ、それ…なんで私の弾幕が消えるの？」

「さあね。じゃあ今度はこっちが行くぜ幻影『影の2刀流』」

刀がもう1本出てきて2刀流になる。

「神技『ファスト・ライジング』！」

そう言つとももの凄いスピードで距離を詰める。

「次！神技『神剣一閃』!!」

近づいて、放つたのだが見事にそれは避けられてしまった。

「くっ、大分厚くしたほうなんだけどなあ…まあ今は関係ないか」

「そんなちっぽけな弾幕で勝とうなんて大したことね。華霊『ゴーストバタフライ』」

「……………3枚目」

とまたボソッと呟く。こんなに密度の高い弾幕を何個も放つてくれるんだ

こっちにとっては好都合すぎて顔が少しにやけてしまう。

「隼？私も攻撃していいかしら？」

「全然いいよ、どう考えてもこっちが優勢だろ？」

「そうね、次のスペカまでずっと私がやっついていい？」

「お好きにどうぞ。……カグツチこれ入れて後2枚だ我慢してくれっ」

そう呼びかける。

するとまた刀が光る、そして光が明けるとまた弾幕は全て消えていた。

「俺もこの量の弾幕保っているの正直きついんだって、もっとポンポン撃ってくれた方が楽」

「そういつところ隼らしいわね、そろそろ私も使おうかしら？ 霊符『夢想封印』!!」

「今日は夢想封印だらけだな……」

「うるさい。細かいこと気にしないの」

「あーはいはい、続けて下さい」

と適当に流しておいた。

あれから霊夢と幽々子は未だに弾幕を撃ちあっている。
お互い凄まじい集中力で戦っている

「あー隼、私そろそろ限界。代わって」

「はいはいっと。じゃあ早速剣技『慈悲の剣』ッ!!」

と宣言すると蒼く輝く大剣が出てきた。

「行くぞっ！」

そう言つと首にかけている勾玉に靈力を込め足を強化する。

「無謀に突っ込んでくるのね。いいわ亡郷『亡我郷　さまよえる魂

』！」

「あーなんだよ！素直に撃つてくれんじやんか！さあラストだカグツチ!!」

そう大声で言い、刀に力を込める。

込めたと同時に光がまた弾幕を全て消す。

「よし、これくらいしないと当たらないんじゃないかと思って溜めさせてもらった！リバーズ開始！」

高らかに宣言した。

すると自分の背後から今まで幽々子が放ってきた弾幕が全て4倍になって帰っていく。

「ふう…やっと終りね。長かったわ…」

「そうだな」

「あーあ、負けちゃったか。でもいいかな？」

そう幽々子は最後に言い光りに包まれた。

幽々子に勝利してからしばらくして帰るつもりと...

「ちょっと待って、この白玉楼は死を齎すのよ？このまま放置してていいの？」

「んあ？あーそんなことがあるんだっけ？じゃあ2種類の内1種類どっちか選ばせてやる。

1つ目、二つ目と吹っ飛ばす。2つ目、この白玉楼を封印し俺に負担をかけさせるか...選べ」

幽々子は迷った末答えを出した。

「.....後者で」

「まあそっちのほうがお前らにとっては安全かもな。別に俺に負担がかかったって知ったことじゃねえもんね」

「そうね」

と短く答えた。

「まあいいや。霊夢？どうせ宴会だろうし、先に準備してこいよ。カグツチもいいか？」

「別に私は構わないよ、隼もすぐ来てね！」

「分かってる、じゃあ霊夢宜しく」

「了解。色んな事で準備長引くかもしれないから勘弁してね」

霊夢の顔は笑顔だったが言葉ではもの凄く怒っていた。

何があった…あ、魔理沙か。なるほど

「じゃあ幽々子さっさと行こうぜ、俺疲れてっから」

「それはお互い様でしょ？」

第36話 「後でかまってくれらって言ったよね？」

「…改めてこの大きさと俺の身が持たないんだけど…」

改めて白桜楼を見つめるが正直な話こんな大きさと面倒なんだけど…

「何、ぶつぶつ言ってるの？早くしなさいよ」

「あのなあ、お前がこれやっというて何その無責任な発言」

「うるさい。さっさと早くやるの！分かった？」

「あー、分かりましたよ。でも本当に封印出来る量じゃないから吹き飛ばす」

「ええー！なんでそうなるのよ。一回やってみなさいよ」

「俺、死ぬぞ」

「知ったこっちゃないわ、でもその勾玉で強化出来るんじゃないの？」

「んー確かにそうなんだけど…流石にそれやったら人間じゃないといつか…」

「気づくの遅いわね」

「うるせえ、っじゃ始めるから離れてろよ」

「はいはい」

封印することに納得したのか機嫌良さそうに離れていく。あいつ、もうちよっとコテンパンにしてやれば良かった4枚じゃなくて全部スペカで返してやっても良かったぞ

隼は幽々子への怒りが段々MAXに近づいていた…

「封禁『被剣』」

そう呟くと1本の鋭く細い刀身の剣が出てきた。

「何ソレ、そんなちっぽけな刃物で封印する気？バカバカしい」

「こっち封印する前にお前を封印してやるつか？おい」

顔は笑顔だったが言葉は完全に怒りに満ちていた。

「あーごめんなさい、ごめんなさい。早く封印してください！お願いします」

「分かればよろしい」

白桜楼の方に体をクルリと回し向きなおし、剣を構えた。

「ふう…被剣よ悪とするものを全て封じ消せ」

そう言い、白桜楼に被剣を刺し込む。

だが、隼は一瞬で察知した、霊力が持たない。この量を全部封じるには霊力が足りない

「ああ、くそっ！だから壊す方が楽だったってのに！霊力の増幅……っ」

勾玉にその意思を込め、霊力を増加させた。

「……はあっ、はあっ……やっと、終わった……かな？戦い以上に苦戦したんだけど……」

「やっと終わったのね、退屈だったから寝ちゃってた、ふああ」

「よし、目閉じて歯喰いしばって正座しろ！俺が1発殴ってやる」

「べ、別に寝るくらいいいじゃない！貴方が封印するのに手間かけるからでしょ……」

「……………」

隼は呆れて何も言わなかった。

すれ違い様に頭をグーで思いつき殴ってから帰っていった。

「乙女を殴るなんて最低!!」

幽々子はそう叫ぶが隼は聞いていない。

だが、自分のことをこ女というのには無理があるんじゃないか？と本音を漏らしていた。

…博麗神社

「おっ、すっかり春になってんじゃない。戻るの速いのな」

そう言いながら中が上がっていくと、カグツチに霊夢、魔理沙はせっせと準備をしていた。

「隼！おかえり！」

いち早く隼に気づき、飛びついてくる。

「ああ、ただいま。っと霊夢、俺何すればいい？」

「ん？ああ、じゃあそこに並べてある奴全部運んでって」

「了解。ってカグツチ？離れてくれないと運べないんだけど」

隼がそう言ったがカグツチは笑顔で返すだけで動こうとしない。

「分かった、後でかまってあげるから！今は準備に集中しよ？ね？」

「うん…」

カグツチを動かすのって一番苦労すんな…。

可愛い子が近くに来てくれるのは嬉しいことなんだけどね。

それと俺は今の服装にツッコミを入れるべきなんだろうか…？

ダボツダボの長袖Tシャツにいつも通りのショートパンツ…

これはカグツチなりのポケなのか？素なのか？…ああ、分かんね!!!

「止めだ、止め。考えるのは止め。さっさと準備しよう」

考えるのは諦めさっさと準備を進めた。

そして…

「『』できたー!!」

「後は文次第なんだけど…まあそれに関しての心配は無用か」

「ひゃあ〜もう私動くの無理だぜ…なんか食べ物くれよ」

「魔理沙?っじゃあ、私がいい物あげるわ。ちょっと待っててね」

と霊夢はニコニコしながら台所へ戻っていった。

「なんか、もの凄い嫌な感じがするぜ…ってあれ?体が動かないんだぜ」

そう言っただけで足元を見ると、お札で足がキツチリとガードされていた。

モタモタしていると霊夢が何かを持って帰ってきた。

「あ、隼とカゲツチ?ちょっと外に出てくれない?危険だから」

「りよ、了解」

そう言っただけで隼とカゲツチは部屋から出ていく。

「霊夢の持ってた奴ってなんだったんだ?」

「やあ?」

外に出てしばらくしてから叫び声が聞こえてきた。

「いぎゃあああああああああああああああああああつ!!!」

ピチューン

「うおっ、なんだ今の。魔理沙の悲鳴が聞こえたんだけど…」

「これって気にしたら負け…だよな？」

「ひん」

なんやかんやありながらも段々人が集まってきたおり
大分賑やかになってきた。

「そういえばさ、前の宴会で思ったんだけどなんでこの宴会は主犯も来るの？」

「知らないわよ、文が勝手に配るからでしょ」

「そんなことばどつでもいいぜー花見だー花見だー！」

いつの間にか復活した魔理沙がギャーギャー騒いでる。

それからまた時間が経ち、更に人数が多くなってきた。

「そろそろいい頃合いじゃない？隼が開始の音頭とってこれば？」

「あーよ」

そう言つと隼はガヤガヤしている皆の前に立った。

「えーと、今回も無事異変解決しまして、俺たちの春が帰ってきました！今日は存分に楽しんでください！」

宴会開始の合図を送ると更にガヤガヤし始め、楽しくなってきた。

「あら、隼じゃない。今回もお疲れ様、2回異変解決ということでご褒美を用意したわ！」

そう言つて勝手に話を進めているのは紫だった。

「…竹刀？あ、そうか。お前ってDMだったのか、よあし。最近お前やたらカグツチに入れ知恵してるらしいからな、3発で済ませてやる」

「えっ？違つー違つー！誤解だつてば、隼!!」

「何が違つんだよ!!無駄な事教えんなつつの！」

そう言って紫の頭を竹刀で思いきり叩いた。
流石にそれは横にいた藍も

「紫様、それは流石に自業自得ですね」

と言っていた。

次に発見したのが半人半霊に亡霊。妖夢と幽々子だ

「やあ、主犯」

「何その言い方。私だってやりたくてやってるんじゃないわよ」

「なあ、妖夢？あいつっていつつもあんな感じなのか？」

「え？あ、まあそうですね……」

「ねえ！無視?!」

「あ、そつだ。隼さん、紫様から聞きましたが『けんどう』というもの
やっていたらしいですね。出来れば私にも教えてくださいますか
?」

「え？は？剣道？いやいや、俺そんな上手くないし」

隼は自分自身ではそついつてるが、外の世界にいた時には大会で全
国を経験している

「お願いしますー!」

頭を深く下げ必死にお願いしている妖夢をみていると断りきれなくなつた。

「分かつた、分かつたから！」

「ありがとうございます…！」

「んじゃ、まあ好きな時に来てくれたらいいよ」

「はい…！」

「じゃあな、ゆっくりしていけよ」

宴会が始つてから1時間程経過したが皆は飽きずにガヤガヤしている。
いる。

それもその筈、また大量すぎる料理を作ってしまったから全然減つ

ていない。

そんな中、隼は縁側で一人座っていた。

「…幸せそうだね」

「はーやとー」

といきなり裏からカグツチに抱きつかれる。

「うおっ、カグツチか。どうした？」

するとカグツチは何も言わずに押し倒してきた。
そして馬乗り状態になる

「ちょ、何してんの？「こんな見られたら無事じゃ済まんって」

「後でかまってくれらって言ったよね？」

後でかまらなくてさっしいう意味ちゃうー！ちゃうー！

「…隼やっぱり温かい」

な、何い言ってるの「の子はっ?!」

そして段々カグツチの顔が近くなってくる。

「今、隼ドキドキしてるでしょ」

そう言われ頬を赤らめてしまっ。

しばらくその状態が続いてつい…

キスをされた。

「…んん」

パシヤッ。

突然、カメラのシャッター音が鳴り響いた。

「これは幻想郷の民歓喜のネタですね、失礼します！」

そして、このことは後日、文々。新聞で晒されたという…。

第37話 「おーやってる、やってる。さて何から見ていこうか」

ある夏の日の夜……。

隼は縁側で霊夢とカグツチの準備が終わるのを待っていた。

何の準備ってか？今日はなんか夏祭りがあるというので浴衣に着替えて待っている

「まだかな？結構待たされてるんだけど…」

二人も浴衣に着替えているのでそれなりの時間は要する。

と思っていたのだが、予想以上に早く出てきた

「お待たせ、じゃ行きましょ」

先に出てきたのいつもの巫女服ではなく浴衣姿の霊夢だった。

「巫女服じゃないと新鮮味があっていいな、いつそ巫女服止めれば？」

「ダメに決まってるじゃない」

「まあ、それは分かりきってるけど」

「分かってるなら、聞くな」

そう話しているとカグツチが出てきた。

赤色の浴衣に花の模様が散りばめられている、それに手には巾着を持っていた。

「どう？隼、似合ってる？」

クルッと一回転して見せアピールをした。

「うん、似合ってるよ」

「そう？ありがとー」

「…っじゃ、早く行きましょ？もう始まっているぜよ」

「そっか、カグツチ行こ」

「うんー」

カグツチは草履を履くと隼の腕を掴んできた。

「ちょ、ちょい。今日、浴衣だし動きにくいから止めよ？」

「嫌だ？」

なっ…動きづらいのは確かだけど…嫌じゃないんだけど…ああっ
…どうしたらいいんだよっ！

「これはいつも通り諦めるしかないのか？」

「ああ、しょうがねえ…分かったよ。そうやっていいから」

「ん。嬉しい癖に？」

うっ……。そりゃこんな可愛い子が一緒に居てくれる訳だ
嬉しくない奴なんて絶対にいないだろ？

「…………別に」

「あ、怒った？」

「んな訳あるか」

そう言って空いてる右手で頬を突っついてやった。

…人里

ここ人里ではかなり賑やかになっていた。
夜店もかなり並んでおり、皆楽しげだった

「おーやってる、やってる。さて何から見ているのか」

「ふうん、結構前からやってたらしいけど来るのは初めてなのよね」

「恥ずかしかったから？」

「んー、そうそう…。ってなんでよ!!」

「自分で言ったんだろ…」

霊夢の綺麗なノリツッコミが炸裂した瞬間だった。

「ねえねえ、隼。あれ何？」

とカグツチが指差したのはわたあめだった。

「あれか？食べる？」

「うん…」

わたあめを売ってる所へ行く。

「わたあめ1つ」

「はいよ」

そう頼むとわたあめを作り始めた。

幻想郷になんでわたあめ作る機械とか置いてんの…

いや、ここの事についてはツッコんだら負けだし、気にしない。

「はい、お待たせ」

「ありがとう…ってなんで2つ？」

「二十という年頃だと青春って奴だろう？大事にしてあげなよ」

「は…はあ」

そつわたあめ屋を後にした。

「隼、これ美味しいね」

カグツチがわたあめを頬張りながらそつ言う。

「そうだね。ていうか、カグツチちょっとわたあめついてるし」

「ん？あ、ほんとだ」

少し恥ずかしそつに言った。

先に進んだら的当てがあり、霊夢がそこで暴れていた？

「おいおい、霊夢。何やってんだ？」

「見ての通りよ」

「ふむ、苦戦していると…ちょい貸してみ」

「出来るわけないでしょ、全然当たらないもの」

「まあまあ見ててみ」

そつ言って霊夢が持っていた銃を借りる。

「あとこれ、何発入ってんの？」

「2発…かな？」

「カグツチ何か欲しいものある？」

そつカグツチに尋ねると…

「あのお面がいい」

あのお面と言って指差したのは気味の悪いお面だった。

「ほんとにあれでいいの？」

「うん」

カグツチが良いっていうなら別に文句は言わんが…

「じゃあ、俺はどれにしようかな？」

「え、そこは私が選んでくれるんじゃないの？」

「な訳あるか」

「それこそな訳あるか!!」

「あはは、嘘だつて。じゃあ霊夢、どれがいい？」

「んーじゃあ…木刀かな？」

「へ？木刀？」

木刀？んなもん置いてあんの？！！」の的当て。

「そうそう、奥にあるじゃない？よく寝坊する誰かさんを叩き起すのには丁度いいかなーって」

「お、おう…気を付ける」

「あら？隼とは言っていないけど？」

「ういうい、とりあえず取ればいいんだろ？」

「理解が早くて助かるわ」

どっしりよう、木刀なんて絶対に霊夢に持たせたら危険だろ…
わざと外すか？いや、外しても怒鳴られる運命か。

と長考しているじい…

「ちょっと早くしてくれない？」

「お前は祭りくらい楽しめないのかよ」

霊夢が少し怒っている感じがした。

「うるさいわね、ちょっと早くくらい楽しんでるわよ」

「あー、そうですね」

隼はそう言ってから、集中して的確を狙う。

因みに銃を持っている手は利き手の逆、右手で構えている。

「あれ？隼って左利きじゃなかったっけ？」

「これくらい右でも行けるよ」

そう言うってから、カグツチと霊夢が行ってた奴を狙い連続で当たった。

「よし、こんなもんだろ」

「なんでアレ当たるのよ、絶対おかしいわ」

「おかしくないだろ！」

その後、3人で他にも色々な所を回り楽しんだ。

途中で、魔理沙に出会い、一緒に行動した、魔理沙はこの祭りがあ
る場合は絶対に来るようだった

夜遅くまで楽しんでいたので帰り道でカグツチが寝る始末。

霊夢に言われ、おぶってやることに…どうしてこうなった

第38話 「いや、知らん」

「はあっ！」

「おっと。」

刀をギリギリの所で受け流しその勢いそのまま相手の首に短刀をつきつける。

「はい、今日も妖夢の負けー」

霊夢がそう言う。

今は妖夢と隼で剣1本で組み手をしていた。

「んー…悔しいです。でも最後、短刀で流されるとは思いませんでした」

「いやあ妖夢もかなり腕上がってるよ？正直、相手するのはしんどいし…」

「剣使っておいて短刀に負けるのは悔しいです…」

妖夢はかなり悔しがっている。

カグツチ使うのはアレだし、零式は論外だし何使おうかと考えたら霊力を込めずに作った慈悲の剣を短くしたものしか思いつかなかった。

「あー疲れた。まあゆっくりでいいから剣道も頑張れば？剣1本での組み手はもうパス」

隼はそう言って、縁側に座り込む。

「練習してまた隼さんに挑みたいと思います」

妖夢は一礼する。

「あ、あと。この前折っちゃった刀は直しとくから安心して」

「分かりました。お願いします」

「はいはい、任せとけ」

妖夢はそのまま去っていった。

「はあ。隼が直す訳でもないのに」

「いやいや流石に自分で壊したものくらい自分で直すよ」

「彼頼らずしてそんな刀直せるとは思わないんだけど？」

霊夢は呆れたように隼をみてる。

「んー自分で直せるとか言ったら驚くかと思ったのに、つまんないなー」

「うるさいわね、隼にそんな技術あったら驚くどころの話じゃないわよっ」

「じゃあ俺もそついつの専門で生きていけばいいかな？」

「隼には他の仕事があるでしょ」

「そうでした」

納得したような声でそう言った。

「その刀はさっさと持って行きなさい」

「いや丁度明日里に行く用事あるしその時にしようかな？」

「そう」

「…結局暇になるんだなよなあ魔理沙とか来ないのかな」

「魔理沙来たら来たで面倒なんだけど…私にとっては」

霊夢はつい嫌そうな顔をしている。

「久々に弾幕ごっこかしたいなって思ってさ」

「なら私がいるじゃない」

「ん？やってくれんの？いつつも面倒そうにしてるのに？」

「…それは気分が乗らないだけ。今日こそ勝つんだから」

「あつそ。じゃあ俺もいいもん見せてやる」

最近の決まりごとの的なのは、暇になったら弾幕ごっこ。疲れるけど暇つぶしには最適。だけど隼に負けなし

「先手必勝よ！神技『八方鬼縛陣』！」

霊夢は始まった早々にスペルカードを発動してきた。それもかなり密度の濃いもので、当然避けづらい

「…くっそ。いきなりかよ。剣技『慈悲の剣』！」

隼は左手に蒼き輝く大剣を持つ。

「更に！神技『狐黒・不滅ノ霊』！」

持っている慈悲の剣が3又に分かれ、更に大量の霊力が溢れてくる。

隼はそれで薙ぎ払い、弾幕を全て消し去る。

「いっつも刀の能力に頼ってばっかだと思っなよ？」

「…やってくれるわね！」

霊夢はやる気だが、いきなり霊力の消費が多いものを使ったので多少だが息が整っている様子はない。

「来ないのか？なら俺から行くぞ！幻影『影の2刀流』」

慈悲の剣をもつ1本作りだし、2刀流になる。

「そんな大きい剣持ってたら動きが鈍くなるわよ！神霊『夢想封印瞬』！」

目で捉えきれなくなる程の速度で移動し弾幕を放ってくる。

「関係ないね！影技『幻の世界』」

一瞬辺りが暗闇に包まれる。

霊夢の視界が明るくなつた頃には隼は元いた場所にはいない。

「毎回、毎回。卑怯なのよー！」

霊夢は何処にいるか分からない隼に向って叫ぶ。

「神技『神剣一閃』」

そう隼が言つと、何故か霊夢を囲つように弾幕が飛んでくる。

「…ッ！でも当たらないわよー！」

霊夢は弾幕を避けていく。

「やっと姿見せたわね。次は私の番よ！散霊『夢想封印 寂』!!」

「霊力なくなんじゃねえの？そんな使つていいのかよ！」

隼はそう言いつつ、避けていく。

「うるさいわね、次で決めるわよ！神技『八方龍殺陣』!!」

「また似たようなやつを…！まあ俺の勝ちかな？」

隼がそう言つと霊夢の背後に1本のレーザーが迫り当たつた。

「…実物の方手放してたとか気付かないわよ」

「まあもっと周り見ろって、観察眼だ観察眼」

「何ソレ」

霊夢は不貞腐れたように言う。

「まあ視野を広げればいいだけ」

「だからどうやってやるのよ!!!」

「いや、知らん」

博麗神社に住むものの日常は安定した平和さだった。